速の御勝利君の武德のなす所ろ誰か仰ぎ賞せざらんや以來御疎意下さるまじく頼み奉るよし辭を盡し辨疏せり秀吉聞召し其方申所にて成政異心なきこと解けたり此上愈よ誓約の爲め人質を出すべしと仰られければ平左衛門畏まつて富山へ歸り其よし成政へ申ける成政之を聞て然らば人質を遣はすべしとなり成政男子なく女子兩人ありけるが妹の幼稚なるを質とせり秀吉之を請取り置けり斯て北國の仕置ありて又左衛門尉利家の所領越前の府中召上られ加州金澤城に河北石川二郡を添へ利家に恩賜あり同五月朔日又た越前北の庄まで領し給ふ若狹越前加州江沼能美二郡を丹羽五郎左衛門尉長秀に給ひ夫より歸陣し給へり利家是より嫡子孫四郎利長を加州松任の城に居らしめ自らは金澤の城に移つせらる然るに近年兵革打つゞき國民疲勞限りなく殊に佐久間玄蕃允盛政無道にして諸民を虐け課役を多く取しかば利家之を憐み律條を以て官を戒め稅歛を薄ふして民を惠み給ひ衆皆其德になつきけり

○佐々平左衛門尉成政を諫むる事

成政は秀吉の武威權勢を嫉みいかにもして秀吉を攻め亡ぼし兵馬の權を取らんと思ひ自ら禮義を厚ふして諸國に武名ある處士を招きしかは處士四方より來り集れり然るに北畠中將信雄卿羽柴秀吉と鉾楯に及び尾州にねて數度の合戰ありしが德川家の武威を以て信雄卿大に勝利を得給ひしと聞き成政大によろこび佐々平左衛門尉前野小兵衛を召び我大志ありと雖も時いまだ到らざりし所に此度秀吉は信雄卿德川家の武威に碎かれ森武藏守池田勝入以下討取せしよし是れ天幸ひを我に與へ給ふなり我何ぞ怠めゝとして猿冠者に從ふべき早々北畠殿の義兵に與みし能登加賀を討從へ三州に跨つて武威を北陸に輝し時節をうかゞひ日本を掌握に治さめ榮華を子孫に及ぼさんと思ふなり志を得は各にも數々國を與へ功勞に報せんと云へは平左衛門尉承り暫く思慮し仰には候へども此度の思召宜かるべからず如何となれは君信長に仕へ數度の勳功ありしゆゑ當國の守護となり給ひ譽を天下に顯はし給へり然るに今又秀吉を討滅し給はんとのこと恐らくは難かるべし其故は信長秀吉の大量あり將帥の器に勝へ給へるを御賢察あり擧げ用ひて數ヶ國を與へしゆゑ武威を西國に震ひ聲名已に甚し又亡君の仇明智を誅伐せしは忠なり今さ海内從ひ靡く秀吉を背き危小の信雄卿に從へ給ふは石を抱て淵に入るに異ならず且又質とせし姫君を情けなくも捨給ふこと慈愛なしといふべし旁以て思ひ留り給へと誠心を盡し申ければ成政怫然として怒る色見へてものをもいはず起ちにけり

○成政信雄卿に與みする事

去程に成政富山城の修理心の儘に出來し侍屋鋪商賈の家萬戸の賑ひ神保の時よりは遙に繁昌の地となりにけり成政一たび旗を揚げ加州を討取り次第に國々を侵掠し竟に天下を併呑せんとの志遣次にも忘れずといへども曾て平左衛門尉が諫めもあれば兎角に案じ煩ひけるが或時密かに佐々與左衛門を申含めて尾州信雄卿へ使はし羽柴秀吉下賤なりしに御父信長御取立にて數ヶ國を領し榮耀を極む然るに早くも君恩を忘み信雄卿を討亡さんとの逆意其不義言語に絶へて覺ゆ候若し之を

誅せずんば先君の靈豈に怨み給はざらんや成政又た何ぞ渠が不義に與みし候べきよつて質とせし女を乘て御味方仕るべし秀吉亡び候はゞ加賀能登を給はるべしとぞ申しける信雄卿大に感悅し給ひ秀吉を亡ぼさんとの志忠烈といふべし抑も秀吉亡君の讎を討滅すといへども自立の大志あり天下の主とならんと欲し我を亡ぼさんが爲に多勢を率ひ當國に發向す然れども家康の謀略に碎かれ秀吉戰毎に利を失せすといふことなし成政も早く謀を廻らし秀吉を誅伐せらるべし吾本意を達しなは加賀能登越中はいふに及はず若狹越前越後佐渡までも賞與すべしとて自筆の書をぞ渡されけり與左衛門急ぎ富山へ歸て成政へ斯と告けれは成政書簡を披き見て大に喜び又た與左衛門を遠州へ遣はし家康へ申贈られけるは尊公信雄卿の危難を救ひ給ひ所々の合戰に大利を得給ふよし秀吉頃來權勢に誇り天下の諸將を侮り慢りに干戈を動かし四海を掌握せんと欲し又た故右府公の厚恩を忘れ信雄卿を亡さんとの企て禽獸にも劣れり速に誅せずんばあるべからず成政も公と共に心を一にして秀吉を討果さんと欲すと家康開給ひ貴殿織田家再興の志誠に感心いたし候今互に力を戮せ北海南海より旗を揚げなは秀吉を亡さんこと掌の中にあり速かに加能越前をも追落し給ふべしとぞ答ひ遣はされたり

○成政密謀の事

成政佐々平左衛門尉前野小兵衛を召び密かに申されけるは各家を制し諫ひと雖ども近年までも我より遙か末坐に在りし秀吉を今は主君と仰がん事いかにしても殘心なり去るに依て國家の安天運に任かせ秀吉を討たんと思ふなり信雄卿より斯樣なる書翰を給はり德川家康も我北國より攻登らは南國よりも討て出べしとの事なり此上は各も一命を申受るなりとの言に平左衛門尉小兵衛今は勢止む可らざるを知り各敬て承はり平左衛門尉申候は夫兵は奇謀を以て勝利を得るものなり君智略を廻らし給ふべし臣等身命を抛ち君の爲に軍功を勵まし候はんと成政大に悅び秀吉を滅ぼさんと謀るに於ては前田利家は無二の秀吉方なれは先づ加州を攻めん我曾てより謀あり我に男子なし利家の二男又若丸（後ち孫四郎利政と號す）を養子に貰ひ女に娶はせ越中を讓るべしと云へは利家必ず諾せん此事あらは前田我に心をゆるすべし其時不意に討て出で利家を攻亡さは北國に手にたつ者はあるまじ謀は密なるをよしとす必ず他に洩らすこと勿れと申合せ又た諸士を集め成政いへるは我に男子なし幸ひ隣國の前田には男子數多あり次男又若丸を養子とし某が女に娶はせ家督を讓らんと思ふなり汝等いかゞ思ふぞ心底を申べしと諭せは其時平左衛門尉小兵衛兩人進出で又若殿を養子とし兩家好みを結び給はゝ國家の靜謐諸民の安堵實に此上やあるべきと云ひ諸士も亦一同し事已に決したり茲に京都賈人油屋小金といふ者年毎に越中に下れり加州へも往還して村井又兵衛尉長賴が方へも出入せしかは成政人をして小金を賴み村井が方へ先づ内意を入れ其後佐々平左衛門尉を加州にぞ遣はしける平左衛門尉村井長賴に對面し成政又若殿を養子に貰ひ請度よしを述べ此事成就候はゞ兩家の好み深く實に北陸平均の基なるべしと種々辭を盡せしに長賴大に悅び平左衛門尉を留めて饗し應けり

○成政又若丸養子を約する事

斯て村井長頼成政又若丸を養子に貰度よし平左衛門尉演舌の趣利家公へ委しく申上ければ利家公聞召成政我と好みを爲さんとならは我何ぞ其心に背かんや請ひに任せて又若を遣はすべしと宣ふ長頼其よし平左衛門尉に申聞け平左衛門尉急ぎ富山へ歸り成政に斯くと告ければ謀已に成たりと共に悦べり時に天正十二年七月廿三日成政平左衛門尉を使とし再び金澤へ遣はし厚く禮辭を述べ種々の贄を連ねしかは利家悦び給ひて平左衛門尉に懇意を加へられ又若丸は能を演じて見せらる其後太刀一腰良馬一疋引出物あり平左衛門尉是を頂戴して暇を乞ひ富山にぞ歸へりけり平左衛門尉金澤にて城の内外騎馬の數境目の地利を得と見圖り始終を成政に申ければ成政大に悦び偖は利家をたはかり課せたり此上策が怠りをうかゞひ其際を討ては大利を得べきとて獨り笑ひし居たりけり利家よりも謝禮として村井長頼を富山へ遣はさる成政村井に對面し今般前田殿の二男を養子とし某娘に偶せん事を望みしに利家早速許容し給ひぬること本懐の至なり且夫婦は人道の大倫なれは吉月良辰を撰み婚姻をなさしむべしとあり又た平左衛門尉に命じ長頼を饗應し歸しけり加能越の諸民之を聞き是までの兵乱に困苦せしが兩國好みを結び今より後は安穩ならんと悦び合ふこと限りなし

○佐々隱謀露顯の事

成政は月見に事よせ毎夜南の櫓に大臣を集めて密談し遠からず出陣し先づ津幡の城主前田右近を攻め落し夫より金澤へ入らんとせり爰に成政が近習に使へる養頓といふ掃除坊主あり成政短氣なれは數度強き折檻し少も憐みの心なきを常々恨み居りしが頃來成政始め大臣夜々櫓に集り月を見て興ずる氣色なく顔をわつめて密譚しけるを養頓何事やらんと怪み近臣に忍びやかに尋ねたしかに前田公を亡ぼさんとの企のよしを聞き村井又兵衛家來小林彌六左衛門は其叔父なれは養頓急ぎ小林が方へ成政の企を委しく申遣はせり小林大に驚き主人長頼に告ぐ長頼早速登城し利家へ其旨申上けれは利家公是は思ひも寄らぬことなり成政我二男を養子に約するは兩國の好みを結はんとなり成政何ぞ我に敵する心あらんや彼の養頓いかなる謀計を以て不和にせんとするかも知らず併し此事實事ならは告知らすること賞するに堪へたりいづれ先づ褒美を遣はせとて黄金二枚を養頓に賜り下され猶密事を知らすべしと長頼より云ひ含めけり

○村井寨を朝日山に築く事

成政の隱謀敵へ洩れしは富山城下に遍く風聞せし程に諸士商人の金澤に親類縁者などありける許へ密に告しかは前田公之を聞給ひ偖は成政我を討たんとの謀養頓が告げしに違はず事發覺する上は猶豫すべからずとて群臣を召び評議し所々の切所に砦を搆へ人數を遣はせり朝日山は加越の通路境目第一の所なれは敵のとらぬ先に此方より砦を築き然るべきよし村井長頼岡島喜三郎吉次不破彦三爲綱片山内膳等申けれは利家公聞召速かに村井長頼高畠九蟲定吉原田又右衛門に命じ千五百餘の人數を朝日山へ遣はさる各々急ぎ朝日山へ至り土居を築き堀を鑿り塀柵等の普請夜を日に

續で急げり時に金澤より米川兵衛神谷一笑軒來て成政用意もあれは急にも押寄まじきに晝夜急き給ふことなかれ時節涼秋山中の濃霧に侵され病を生ぜんことを恐るとゝひけれは長頼聞て大に怒り我此度仰せを蒙る上は仮令敵來らずとも一刻も早く城を築き豫め備へずんは大事を輕んじ君命を怠るといふべし作女兒の丁箇なりと云て更に衆に下知し普請六七日の間に過半出來せり斯る所に天正十二年八月廿八日佐々方よりも朝日山に砦を搆へんと佐々平左衛門尉前野小兵衛五千餘の人數を率し來りけるが前田方より已に砦を築きたるを聞て敵に朝日山を取られぬるこそ安からねと去ながら城壁いまだ完からじと急に攻破り村井を討とらんと議しける村井長頼越中勢の向ひたるを見て大に驚き城普請は完からず且雜兵は雜具持搬びに金澤に行て纔か七百人ばかり殘れり然れども長頼防禦の備をなし士卒に下知し待かけたり時に金澤の侍阿波賀藤八郎江見藤十郎斯くとも知らで來りけるを長頼大に悦こび金澤へ急を告げんと思ふ折柄各の來給ふこそ幸ひなれ急き金澤へ歸り君の後詰を待つよし申候へと云ければ阿波賀江見頭を掉ひ村井殿の仰には候へとも今は敵を見て何ぞ金澤へ歸り候はん斯る時に參り合ふこそ幸なれ我等も共に戰ひ力及ばずは討死せんといふ長頼聞てこは心得ぬ事かな今爰にてやみくくと打死せんと金澤へ告げ後詰を待ち力を戮せ大功をなさんと其得失いかんぞや去りながら早敵の人數金澤への通路を塞ぎたるよし各歸ること難かるべしと云へは阿波賀江見聞もあへず我等敵を怖るゝに似たれは仰せに從ひ金澤に歸り候はんといふ村井喜びそれこそ忠義にもかなひ候はんとありければ兩人議鏡を合て馬を飛はし金澤さして馳行きけり衆皆な村井が智慮の淺からぬを感せしとぞ

○利家公朝日山後詰の事

斯て阿波賀江見金澤へ馳歸り利家公に斯くと告けれは利家公大に駭き給ひ村井討たせては社稷を失ふに同じとて頓て馬に打乘り小性馬廻の兵五六十騎を從へ續けや者どもとて馳出給へは不破彦三時大身にて領四萬石 片山内膳多野村三良四郎岡島喜三郎原隱岐守武部助十郎一騎當千の者共我劣らじと馳て行き村井長頼は城柵いまだ全からざれば能て防ぐ事益なしとて城外に堀切のありけるを前にに當て人數を押出し備へを立つる佐々平左衛門尉前野小兵衛五千餘人を引率し朝日山に攻めよせ已鉄炮を打たんとせしに俄かに雲霧起り墨を刷ぐがごとく斜風雨を挾んで灑きければ鉄炮の火蓋たゝず双方合戰なりがたく終に備を引て佐々前野は富山へ歸りけり利家公は四里の行程を揉みにもんで馳著き給ひしが敵はや引收ければ又た金澤へ歸り給ふ時に飛脚を以て秀吉公へ成政の叛逆已に發覺のよしを告給ひければ秀吉公使を近かく召され我素より成政の逆心あるを察し前田殿を金澤の守護とせり成政縱令謀を廻らすとも前田殿の智謀勇略には及ぶべからずしかれば成政を亡ぼさんこと掌の中にあり併しながら前田殿にも少し心もとなき事あり能登の國は金澤より行程五十里餘細長き國なれは前田領國といへども越中より兵を出すに易き地にして加州より能登を援くるは難し我是に心を勞せり必ず利家智勇を恃み敵を侮るべからず軍制を嚴密にし吾が出陣を待たるべし追付信雄を攻亡して北國に發向すべきよし申含め猶は懇書を給はり使者にも黄金を賜與し加

州にぞ返されたり

加州越中境所々に籠置人數

利家舍兄　前田五郎兵衛尉安勝
安勝子　前田孫左衛門尉長勝
利家妹聟　高畠織部　定吉
利家聟　中川清六　光重
後藤武藏守剃髮し中川宇伊入道と稱す

右人數弐千餘人能州七尾城を守らしむ　長　九郎左衛門連龍

右人數千人にて能州德丸山の城を守る　奥村助右衛門尉永福
土肥伊豫守
千秋主殿助
瀧津金右衛門

右能州羽喰郡末森を守る利家公加州へ入國の始めより地形を擇び此處加能越三國に跨がり樞要の地なれはとて城を築き右の四人に武功の侍を多く附けて千五百餘人を入置かる

利家兄弟　前田右近　秀繼
秀繼子　前田又次郎

右軍兵を添へ加州津幡城を守る　目賀田又右衛門
丹羽源十郎

右軍兵を添へ千五百餘人加賀越中の境鳥越山に城を築き守らしむ　佐々平左衛門尉
野々村主水

佐々方

右加越の境俱利伽羅に城を築き兩將に弐千餘人を添へ入置く　前野小兵衛

右弐千餘人を添へ越中非波に城を築き守る　越中國侍　菊地伊豆守　武敎
伊賀守子　菊地十六郎

右士卒千餘人越中氷見阿波城を守る　越中國侍　神保安藝守　氏治
安藝守子成政聟　神保清十郎

右大將にて自らの人數四千餘人越中森山城を守る　丹波權平

右越後越中の境城を守る人數五百餘是は上杉景勝の押なり右之外能越の境荒山といふ所に砦を搆へ軍兵大勢代り〳〵に守る越中魚津の城にも鐵炮弓の大將月替りに守る是は境城の繋ぎ城なり成政は富山に在城一万騎を從へ弱からん方へ討て出で味方を援くるなり抑も成政越中を領し大國の主といへども其分限あり然るに大勢の侍を扶持する事は大望ある故に諸國の浪人武勇の聞へある者を禮を厚ふし招き集む時に錄五千石と約し富山へ着しては千石增し千石と約しては千五百石を與へければ是を傳へ聞く四方の浪人我も〳〵と來りて越中に集ること夥し然れども其所領山中江海の邊瘠田迫狹の所を與へし爲め他國の二歩免或は一歩免ほどに當り諸士皆な憤懣し暇を乞ふて歸らんと思ひける所に加越の軍起りしかは見捨て歸らんも慮せるに似たれは皆々止りしかど危きに臨んで命を致すの心なく賴母しからず見へける

○鈴木因幡窪田領を守る事

能州德丸山の城主長九郎左衛門尉連龍は敵當國へ攻め入ると聞へしかは鈴木因幡を召び窪田の館に行て守るべしと下知し因幡承りて速かに馳向ふ相從ふ兵卒皆いひけるは大軍當國へ乱入せは此寡兵を以て多勢に當り難し實に死地に行くとは此事なるべしと然るに因幡は是を憂ふる氣色なく乘て其思慮ありければ館の邊の田畠へ河水をせき入れ奔流波を疊んで其深さ幾尋とも知れざれば敵の攻め近くこと容易ならず時に森山の城主神保安藝守氏治成政の下知によつて窪田の館を攻めんと三千餘の人數を率し荒山に出張し德善河原の邊所々を放火しける鈴木之を見て敵を劫かさんとて山澤林藪の中に譜家の紋の旗を多く結付け德丸山より後詰の勢近く來る樣をなしければ神保是をみて大勢とや思ひけん卒爾に攻め寄せず畑甚左衛門といふ者を斥候として遣はしける鈴木が方よりも飯坂源左衛門を斥候として出せしが畑に行逢ひ始めのほどは双方身つくろひし近寄みれは畑と飯坂兄弟なり是は〳〵と互に手をとり涙を流し共に悲なきを喜び暫く物語りしける飯坂心に思へるは氏治多勢にて館に押寄せは破れんこと必せりと詐りて畑にいひけるは今度神保との館を攻らるゝとも甚だ難かるべし其故は鈴木計畧を廻らし壘を高ふし堀を深ふし坑を多く穿ち士卒又た少なからず然るに爰に滯留あらは七尾より前田五郎兵衛尉同孫左衛門尉德丸山より長九郎左衛門尉連龍討て出で前後より挾んで壹人も殘さず討取るべし汝と兄弟ゆゑ味方の密事を知らすなり急ぎ歸へりて神保殿にも告ぐべしとて立別れける畑馳歸りて神保に斯くと告ければ神保聞てさらは此所に長居しては惡かりなんと陣拂して引て行く鈴木之を聞て敵は落行くぞとて士卒を從へ追討して首數級を取れり

○荒山城攻の事

神保氏治は窪田を引取ける時荒山に壘を築き家臣袋井隼人をして守らしめ自らは越中にぞ歸りける是より荒山城中より出村里へ押込取掠め又た田畑をあらすこと度々なれは前田孫右衛門尉長勝高皇織部定吉中川清六光重出陣し荒山を攻む城將袋井隼人討て出で防ぎ戰ふ城兵師源七郎は後藤孫助敵笠間儀兵衛と鈴を合せ笠間が右の眼を突けるが是を見て田邊將監馳來つて又た孫七郎が右の眼

を突貫きければさしもの源七郎氣を失ひ已に危ふく見へける所に林三之亟源七を討たせじと田邊に渡り合ふて戰ひけるが將監大剛の兵なれば鎗を投捨て林に無手と組付き頓て林を押伏せ首搔斬て立上る其間に師が卒師をたすけて城中へ引入ける然るに城兵すべて義を守り命を鴻毛に比し戰ひしかども寄手大勢に揉み崩され多く討たれて城中に逃入りたり然るに此城無下に淺間なれば持悚へがたく袋非隼人此城に籠らんは薄氷を踏むよりも危しと思ひ籠城の衆に言て退かんと謀りけるが師源七郎山崎喜左衛門石黒采女三人共にいひけるは敵を見て退くは武士の耻づる所なり何ぞ退くことをせんと隼人又云ふ夫は血氣の勇なり進むも退くも時によるぞかしと早々城を出て落行き將既に斯わりしかは士卒我先きにと落去りけり今は師、山崎、石黒を始め纔かに拾三人殘りたりされ共是等は一騎當千の剛兵なれば少しも屈する氣色なく山崎申げるはよし〳〵臆病者ども逃げたるこそ幸ひなれ我等拾三人必死と極め敵寄せ來らば城外に討ち出で〳〵力戰し叶はずば討死して冥途閻魔王への咄しにせんと云ければ石黒いふ夫はいとやすき事なれども先に拾三人城を固く守防ぐべしとて寄手遲しと待ちたるは大膽不敵の者どもなり去程に寄手の大勢鬨を揚げ楯を敲いて攻來り堀下に付て攻め入らんとする所に師源七郎堀の上に立ち扇を以て寄手を麾き加州の歴々と見侍べる斯く申すは師源七郎といふ者なり越中の葉武者どもの籠れる城なれば遠慮なしに攻め給へと云て引入たり是を聞て金澤勢我も〳〵と乘入らんとせしに拾三人の城兵大石大木又は杵臼手に當る物を投かけ〳〵防ぎければ寄手是に打拉かれ死傷する者數を知らず大に避易して見へけり日已に夕陽に及び且つ城兵斯く小勢とは思ひもよらず孫左衛門尉士卒に下知し圍みを解て七尾に三人なれば出で追はんともせざりけり是れ拾三人義を重んじ必死にて勇を震ひしかば危きを免か歸陣し城中僅か拾れ城を持固めし事ためし少なき働きなれば其頃諸國に傳へ聞きて深く感賞し譽れを後代に殘しけり

○金乘坊了哲陣觸の事

北國一向宗一揆漸く治りたる頃なれば剛勇なる坊主多し武士にも劣らぬ者どもなり今度加越の軍に一方を防ぎ合戰を望みければ成政喜び出陣を許さる斯りければ坊主千人餘馳集り太刀を帶び鎗薙刀を持ち臂を張つて勇み國中の武士之を見て片腹いたく思ひけり然るに成政は城に將士を集め加州へ敵の色を顯はしける上は時日を移さず出陣し國境の城々を落し直に金澤へ攻入るべしとありければ諸將承はり當時越後の景勝は家臣新發田治長叛逆にて國中靜かならずと承はり候へは御後ろは心易し此時加州へ御働き尤も然るべしと申ければ九月朔日俄かに陣觸あり諸奉行各役所に出仕して出陣の用意頻りなり時に軍奉行の役所の前を金乘坊了哲馬に乘て通りけるを軍奉行窓より呼んで成政近日御出馬なり明後三日に勢揃ひ御覽あるべしとの事なり早く一統に觸渡さんとすれども殊の外取込み又た使に事を欠けり貴殿馬上にて馳廻り觸れ給はんやとの頼みなるよしをいふ金乘坊易く受て驕て馬を飛ばせ觸れけり然るに三の丸建部兵庫が屋鋪南の土居に若侍集り的を射てありけるが其南なるがた〳〵橋の上に馬を駐め近々成政公加賀の國へ御出陣なり依て明後三

日勢揃を御覽あり皆々出給へと數返大音にて呼はりければ的場の若侍共我々耳なきに非ず何條數返大音にて申す事やある殊に馬上にて無禮なりと叱りければ金乘坊又云軍奉行よりの觸なり各は軍に出る事の物憂さに聞かぬ顏なるや命れしくは侍を止められよと言罵りける心はやき若侍法外の坊主かないで軍の血祭せんと的矢に根を指射けるほどに金乘坊が左の臂にはつしと中る金乘坊驚き其矢を折かけて九艘坂の方へ馬を馳せけるが矢疵甚だ痛み目くるめきて坂の下にて馬より墮ちけり船頭增山長助が前なれば長助頓て扶け起し矢をぬき得させたるもゑ命は恙がなかりしなり

金乘坊なる者弓にて射られたるは兩度にて壹人にいひなせども遍照院金乘坊の事は元龜年中なり金乘坊丁哲が事は天正十二年なり金乘坊丁哲は遍照院が末なり曾て丁哲の祖越後の廢所へ戀師の跡を慕ひ行き新潟大佛渡村といふ所に小菴を結び宗譏を讚談して衆人を勸む後光明寺と號す是を越中へ召び迎へ推名小四郎遍照院旦那なれは暫く椎名が津毛城にあり大田保に一字を建て爰に移せり是を金乘坊丁哲といふ又た本文にいへるがた〳〵橋とは今玉町役所の西なり又た九艘坂の下古へ川ありて爰に船頭八人家し今玉八人町といへりとかや川の東へ除きたるは文錄三年夏五月洪水に馬瀨口の川除潰へ夫より今の鮎川となれりとゞ又た一向宗坊主金乘坊の事より侍と中あしく爭ひ起り出陣の事もやみたるとなり

○成政富山城出陣の事

成政天正十二年九月九日出陣相從ふ者は佐々平左衛門尉野々村主水神保安藝守菊地伊豆守同十六郎佐々與左衛門山下甚八郎寺島牛之助小島甚助本庄市兵衛野入平右衛門齋藤半右衛門堀田治郎右衛門櫻井勘七是等を大將として先陣の人數壹万五千餘と成政筑本七千餘總軍弐万弐千人餘松根へさし懸り松根の城源氏峯倶利加羅二俣等堅固に仕置さし同十日今石動より宮島の杤谷踰へして能越の境に着し暫らく士卒を息はせ時に成政小川鯰之助を召び此あたりの農夫を壹人召連れ來るべしと下知せり小川承はり彼處に村里の見へしかは行て農夫壹人供し來れり此所は能越の境惣郷村とて兩地に跨れり此農夫は越中惣郷の者にて成政領なれども前田公に服せしとなり成政彼者を近かく召び汝が名は何と申すゞ是より末森への郷導すべしと命せしが農夫心に成政常々苛政にて民を恤むことなし何とてかゝる君に道を敎へんやよし方便りて困苦させんと憂悟し我は田畠兵衛と申者にて候道の案内をよく知り候へはしるべ仕るべしと云へり成政喜びさらはとて田畠兵衛を先立て總軍押行ける田畠兵衛わざと道にもあらぬ所を行くほどに山に登り谷に下り壁を攀ぢ岩石に取付松樹葛を力にして軍勢皆な汗水になり難儀至極せり田畠兵衛は思ふまゝに難所に引入て何れともなく逃失けり然るに末森には富山勢の向ふことを知らざりしに田畠兵衛先遣て注進しけるもゑ大に驚き急ぎ備をゞしたりけり佐々勢田畠兵衛に賣られて艱難を經て漸く吾妻野に着き爰に命じ與村助右衛門尉永福の籠れる末森城を攻ひべしとて天神山に登り陣を取り先づ紺屋町の民屋て成政將士にを放火す末森といふは加能越三國の境にて山高しといへども險ならず且つ城壘完からざるを知つて攻め落さんこと掌の中にありと勇み進めり是狀を見て成政大によろこび城攻の心

得を示し合せて自らは末森より二里去つて坪井山に本陣を移しけり

利家公後ち田島兵衛を召れ感賞あり其望みに任せて所の柴山を賜はりしと云ふ

○佐々勢末森城を攻むる事

越中の大軍寄せ來ると聞へしかは末森城中大に驚き騷げり素より此城俄かに築きたる事なれは堀をも堀らず塀一重にて兵粮矢玉も多からず如何して防ぎ戰はんと士卒も思ひしかど大將奥村助右衛門尉永福少も騷がす籠城防禦の備へを設け下知嚴にして士卒に令し勵ましける越中勢は城下へ押寄せ旗旌を靡かし民屋を放火す土肥伊豫守之を見て申けるは敵に城下を燒かせん事餘りいひ甲斐なく殘る候我は城下に打つて出一戰し叶はずは城中へ馳歸るべしと其勢弐百騎斗り引卒して馳出しけり越中勢先陣佐々與左衛門本庄市兵衛城下へ押入り直に城を攻破らんと進みける猛火の煙夥しく土肥伊豫守が馳出したるに行合ひけれ共敵味方の分ちも見へず伊豫守大音揚げ敵は足もとにあるぞ當るを幸ひに突伏せよと下知すれは若侍一同に鋒先を揃へ突いて懸かる佐々本庄が兵心得たりと鎗を合はせ入り乱れてぞ戰ひける寄手戰ひあるを見て齋藤半右衛門堀田治郎右衛門足輕を下知し燒き殘りたる家の上に登ぼせ伊豫が陣へ銃砲を打つほどに伊豫が人數大半討たるれは佐々本庄が勢勇み競ふて伊豫を始め壹人も殘らず討取たり城將奥村助右衛門尉土肥が軍難儀と知り之を援けんとて遥兵八百餘を從へ城門を啓いて馳せ出つる菊地伊豆守父子藪陰に待ち居しが鐵炮を打懸けたり永福菊地が勢に當らず野々村主水が備を突いて懸かり黑煙を立てゝ戰ひ菊地が勢之を見て横合より突入ける寺崎牛之助小島甚助手勢五百を從へ藪を打つて奥村が後へ突入らんとするを永福見て後を取切られては叶はじと人數を眞丸に備へ山下甚八郎が三百討にて備へたる中へ會釋もなく突いて入り甚八郎が備へ崩れ立ち其際に永福城中へ入らんとて人數を引返す佐々勢之を見て城に付入らんと大波の打つが如く鬨を作て追立つると甚だ急なり城兵足を乱たして引けるを永福眼を怒らしあら〳〵かなる聲にて敵は何程多勢なりとも何ぞ懲ふべき乘て下知せし處なり皆々討死せよと一番に鎗を把て返し合せければ奥村が兵士三好勘左衛門野瀬次郎右衛門九曲城戸の邊にて踏留まり敵を突立て防ぎけるが敵二騎突落しければ皆是に力を得鎗衾を造つて突立て寄手崩れ立ち此隙に永福城中へ引入けり然るに外搆の揚簾戸を下さゞりしかは此處より寄手七八十人込入たり是を見て野崎孫助同與左衛門兄弟こゝを破られては叶ふまじと面もならず防ぎ戰ひ遂に敵を追出し簾戸を下しけり又た同日暮頃より寄手壹万餘稻麻竹葦の如く攻め圍んで持楯搔楯を突立て貝鐘を鳴らし矢炮を飛ばせ喚き叫んで攻立たり城將奥村永福同嫡子助十郎千秋主殿瀧津金右衛門城兵を數ふれは敵の九牛の一毛なれども少しも氣を屈せず士卒を下知し矢炮を飛ばし木石を投懸け皆勇を揮ふて防ぎしかは敵死傷多し然れども寄手事ともせず味方の死骸を足懸かりにし蹈みこへ〳〵坂を登りける故愈よ死傷多し寄手攻めあくみ人數を引き城を圍んで夜の明るを待ちけり此城攻めの時城近かく並びたる屋上へ寄手多く登つて城中へ銃砲を打ちけれは城中甚だ難儀し屋上の敵を追拂ひ自燒せんと議しけれども折節風烈敷城は風下なれは反つて惡かりなんとて其

事止みにけり寄手已に引風も治まり一村雨過ぎければいざや城下の家屋を自燒せんと高野瀬左近大西金右衛門に足輕を添へ密かに城外へ出し三の丸に近き家屋を悉く燒拂ひ猛火熾んなれば寄手是を見てすはや籠城に火をかけ落行ぞ討もらすなとて驅ぎけり去ども寄手の將野々村主水斥候として伺はしめ城兵城下を自燒しければ主水諸陣に觸れてしづめしとかや又た城將奥村永福が妻は美目よく常は柔弱なりしが地はやわらかなりといへども石を出す理にて斯く大勢に圍まれ女なれはとていかで甲斐なく過ごさんやと云ひ自ら薙刀掻込みすこやかなる女を四五人引連れ夜更けて城内の陣所〳〵を廻り戰疲れて居眠りなどし怠れるを戒め又た嚴重に勤番の兵を賞美し遍ねく軍勢を勞らひ酒樽數十荷粥數十桶を舁せて衆に與へ明日は金澤より後詰あるべし今宵こそ大事なれと勵ましければ衆皆命を塵芥よりも輕んじ勇み出でけり千秋主殿は府中より度々の忠勤ある者にて物頭になされ東の丸にありけるが佐々方より能州二郡を宛行ふべし降參候へと先づ黄金千兩遣はせしが千秋諾せず此よし奥村へ云ければ奥村千秋が忠貞を感じ千秋を本丸へ入れ奥村加兵衛を東の丸に入替る寄手の將野々村主水が陣營に佐々與左衛門寺島牛之助小島牛之助會合して謀りけるは今日の城攻め暫しの間に味方の死傷多し力攻にして益なしといふ小島甚助又た云へるは今圍みを解き攻め口を甘めなば城兵魚の網を漏れたる心地して大半逃がれ落行べし左あらは勢せずして城を乘取らんと衆皆な是に同じ曉頃ろ諸陣に觸れ俄かに圍みを解いて追手に著む然ども城中士卒心を一にして必死と思ひ定めし事なれは一人も落ちんと思ふ者はなかりしなり城中にも今夜奥村永福が陣營に千秋主殿瀧津金右衛門等を集めて謀りけるは今日の戰ひに多からぬ兵三百計討死し殊に土肥伊豫を討死せしめ今は兵粮矢玉も乏しく此儘にては二三日中に落城すべし去れは一刻も早く金澤より後詰を乞ふべしとて奥村が徒の者壹人進み出て某金澤へ注進に參らんと申せしに永福我も斯くは思へども敵十重二十重に取卷きければ悉なく金澤へ行かんこと難かるべしと徒士中すやう若敵に獲らはれ死すとも君の爲に命を殞すは難き事とも思ひ申さず如何にもして注進し追付後詰あり急を救ひ給はんと思ひ入つてぞ申しける永福を始め並居たる將士皆な感涙を流しさあらは參り申べしとて永福一封の書を認め持たせ且金澤にて申すべきは大軍末森を攻圍み甚だ危急に覺ゆ候併し百騎が一騎になり候とも踏怵へ城を守り敵仮令ひ扱を入たりとも無下に城を渡し申まじく上下一致に必死と心を定め候唯一刻も早く御出馬を相待つよしを申含めけり徒士承はつて十一日未明に急ぎ城を出でしが寄手追手に著みしかは思ひの外心易く金澤さして飛ぶがごとくに去りにけり秋の夜の永きも已に明けにけり寄手は城兵の落行かん事を待つて攻めもせでありしが大將成政は先手の働き心もとなしとて本陣の人數七千餘の中二千人は坪井山に殘し偖又金澤より後詰あらは防ぎ支ふべしと神保安藝守氏治に手勢數千人にて川尻といふ所を固めざせ自らは佐々平左衛門尉を先陣として五千餘の人數を率し末森に來り味方の攻口を巡見し平左衛門尉を召び汝が勢を以て一攻めせよと下知ありければ平左衛門承はり士卒を帥ひ閧を揚げ鉄炮を放ちせめ登る越中より是を見て矢玉を放ち木石を投懸け防ぎける平左衛門尉疼まず士卒に下知し手痛く攻

めければはあはや此城今にも破れんと見へし處に奥村永福城門を啓き討つて出つる相續で藥科新助三輪勘左衛門南部荒次郎野崎新六高崎次兵衛前波三四郎臼井四郎右衛門等命を塵介よりも輕んじ爰を先途と戰ひければ平左衛門尉の軍兵悚へかねて颯と引退く然る處に又た寺島牛之助士卒を下知し西の城戸を攻めしが阿波鳴門之助とて諸國に名を得たる武士猩々緋の白糸にて立波を縫ひたる陣羽織に白毛をふせたる甲を着し寺島が軍兵の眞先に山に登り堀をこへ進みける城兵是を目がけ矢玉を放つ雨の如し去れど事ともせず難なく塀下に附けにけり城中よりは鳴門之助を突かんとて鎗を挾間より突出すを手取にし繰捨ける寺島牛之助是を見て鳴門之助を援けよ續け〳〵と下知すれは皆我劣らじと進み塀下にひしと付鳴門之助力を得塀へひらりと登り一番乘りするはとて城内へ飛入れは相續て武士塀を越し壁を破て込入り敵味方喚叫んで相戰ふ趣中勢勇氣や勝りけん城兵多く討たれ本丸へ逃入たり此山輪は水の手の通路なれは爰を取切られ城中殊の外難儀せり寺島が人數此山輪に旗押立ければ味方之を見て皆鬨を揚げ攻め討てり大將成政大に悅こび皆神妙の働にて斯くまで攻め詰め最早落城と見へたり日已に酉山に傾けは夜軍は然るべからず明朝速かに攻め落し城兵の首を刎て見せられよと下知し自ら五千の人數を率ゐ佐々平左衛門尉を從かへ坪井山へぞ歸陣せり

○利家公金澤城出馬の事

去程に九月十一日午刻末森の使金澤城に着き玄關に向ひ奥村永福が書狀を差上げ及び言上の趣申あげければ勤番の侍皆驚いて急ぎ利家公へ披露せしに利家公大に驚かせ給ふ此時波著寺の空照御前にあり丹誠を抽で武運長久を祈居たりけるが此よしを聞き靜に祈願し嗚呼寧哉君公出陣あるは敵敗亡せんと疑ひあるべからずと申上ければ諸士皆賴母敷ぞ覺へける利家公案より心はやき大將なれは一騎がけに向ふべしとて急ぎ鎧を着し甲の緒をしめ討立んとし給ふ所へ德山五兵衛能出で御供の軍勢も催ふしなく僅かの勢を以て敵の大軍に向はせ給はんと危き御事にて候なり松任へも仰遣はされ利長公をも御供然るべしと申上ければ利家公眼を怒らし薙刀をねつ取り其方何條左は申すぞ一刻も早く後詰せずんはあるべからずと宣へは五兵衛重ねてものをも云はず立退きぬ時に利家公松任の利長公の方へ末森の後詰する間急き打立べしと使を遣はさる能州へも飛檄を以て前田五郎兵衛父子を七尾に殘し長中川高畠以下末森へ馳向ふべきよし申遣はされ舍弟前田孫人利久魚住隼人を金澤の城に殘し置き給ひ吾此度討死せは堅く城を守り羽柴殿の後詰を乞ふべしとありし時に又た北の方奥より酒肴を持たせ首途を祝し給へは利家公喜悅淺からず末の下刻に螺を吹かせ討立ち給ふ時に利家公足輕共に下知し末森の水の手を取切られたるよし定めて皆渴せるならん汝等廣岡の水を瓢に貯へ持來るべしとて鞭を揚げ馬をせめて末森指して馳給ふ諸士は登城する間もなく面々の宅より直ちに津幡へと馳せ行けり利家公已に中條まで至り給ふ頃ろ日暮れんとす時に半右衛門と云る農夫を召び汝今夜の中に百人計り相語らひ翌未明に津幡の邊の山に登り多く紙旗を立て多勢の樣をなすべし此度の戰に勝利を得は賞すべしとて其夜戌の刻津幡に馳著き給ふ津幡

の城主前田右近秀継嫡子又次郎出迎へ一先當城へ入て利長を待受け給へと申せしかは頓て城に入り給へり斯て利家公敵より斥候を遣はすべし若し疑はしき者あらは生捕べしとて倔强の者數十人を忍びの者とし又た足輕野人等數十人敵軍の躰を見て參れとて高松邊へ遣はされける浩る所へ嫡子利長公松任より急ぎ津幡へ馳着き給ふ爰に於て利長公合戰の事を衆に謀らる寺西源兵衛入道進み出で成政多勢を以て末森城を十重廿重に圍み又た神保安藝守氏治末森後詰の押として神代河尻逕に四千餘の人數を備へ佐々平左衛門は高松に陣し大將成政は坪井山に多勢を屯し殊に地の利よく味方小勢を以て大軍に當らるゝは危きことなるべし今は馳向ひ給ふとも末森は已に落城せしならん唯々當城に在まし敵の摸樣を察して打給へと云ひ列座の面々も一同に此議然るべしとぞ申ける利家公頭を掉ふて今は末森急を告げ後詰を我に乞ふ吾何ぞ城兵を憐まざらん然るに棄て救はずんは君臣の義なく且つ誹りを後世に殘さん其上末森落城せは北國の諸士皆敵に從ひ靡くべし其時臍を嚙むとも及はざらん是れ利家に於ては無二の一戰ぞと宣ひ村井又兵衛を召びて某是非後詰し一戰と思ふぞ汝いかにとありけれは又兵衛答て仰尤も義に當れり第無二無三に敵を駈破り逃ぐるを逐ふて敵を壓にし武名を天下に耀かし給ふべし是怖るゝ所にあらず生前の本望是に過すと心腹を布けは利家公感賞斜ならず我と同じき者は村井ぞかし早々出陣すべしと贊せらる秀繼の嫡子又次郎申されけるは某父子君御出陣の時節いつも留守仕候此度は是非御供にて先手を承はり度と申せしかは許し給ひ然らは當城は右近守るべし又次郎は供たるべしと宣ひ父子悦ぶこと限りなし時に秀繼申されけるは當所に天文に達したる山伏の候召されて吉凶を占せられ候へと勸む利家公怒れる色ありて謀已に決すれは何ぞ又卜筮を賴まん山伏如き者何ぞ之を知らんと宣へは秀繼次の間へ退さしか湯漬飯を調へ秀繼持出て利家公に勸めしに利家公快く食し給ふ時に右近又た君何もろ卜筮を嫌ひ給ふや先づ召されて御試み候へと申せはさあらはとて彼山伏を召され眼に稜立てあらまかなる聲にて汝天文を知れるや我戰はんと欲す早く考ふべしいかようにあつても後詰は止まらぬぞと宣へは山伏懷中より書を取出し開かんとせしが又た懷へ書を押入れ吉なり吉日なり速かに出て戰ひ給はゝ勝利を得給ふべし疑ひを生じ時刻を延ばし給ふなといへは利家公莞爾と笑ひ給ひ又將士に向ひ夫れ主將は天地人に制せられず先づ廟算するに彼れ曲にして我れ直彼れ不義にして汝よく天理を知れり此度敵に勝つと必せりと宣ひ我れ直彼れ衆和せずして我が衆和せは是れ勝べき圖なり此擧に成政を亡さんこと掌の中にあり汝等勇を勵まし力を竭すべしとて已に津幡を打立ち給へは士卒止を下へと驅動す利家公は末森の後詰不定なりと思ひ給へは松任の士卒長屋に入て休息ありしが利家公俄に打立たるゝを知り利長公も續いて出給ふ旗持見ねざれは横山三郎長知利家公の旗をかたげ津幡の端にて旗持に持たせけり大塩大海といふ者あはて〻弓の弦を張らずして持てり先陣は村井又兵衛尉長頼不破彦三二陣は原隱岐守前田又次郎片山内膳其次は多野村三郎四郎青山與三前田慶次郎藏人利久子なり利家公の武者奉行は宮川但馬守 利長公の武者 奉行は山崎勝兵衛長銳なり時に長銳前後の陣を馳廻つて列位を整へ押行き其堂々たる勢向ふ所敵なしとぞ見ねけり

斯くて利長公馬捕に向ひ我何れへ至つて夜は明くべきぞと問給ふ馬捕承はりさん候今濱に御着候はゝ明けぬべしといへは（今濱末森邊）利家公大に悦び鞭を加へ馬をすゝめて急給ふ程にはや高松に至る利家公又た我今度討死と期したれはとて甲の忍びの緒を斷て乘給ふ大將かくわれは將士皆討死と思ひ定めしなり然るに篠原勘六利家公の御側を勤め寵他に異り侍二十騎を預りけるが病氣に惱み此節組の侍を引連れ駕籠に乘り此所まで追付たり利家公見給ひ汝病重しと聞しに今爰に來ることいかゞと宣へはさん候御出陣と承はり心も心ならず候ゆゑ駕籠に扶け乘せられ急ぎ參り候頓て病も愈たる樣に覺へ今は鬼神をも拉ぐに難からず思ひ候と申けれは利家公感じ入り供すべしと宣へり斯て利家公翌十二日黎明に今濱に至り給ひ士卒に下知し物音を禁じ人には枚を啣ませ馬の舌を昆布にて卷き密かに浪打際を人數にて押廻せり成政は金澤より後詰やあらんと津幡へ斥候を遣はしけるが利家公津幡へいまだ着給はざる前なりしかは斥候歸て金澤の後詰は思ひもよらずと注進せりよつて成政も氏治も明日は末森城を攻取らんと喜んで油斷し居たる所に金澤勢五六百騎神保が陣のわたりを馳過けるを聞付けすは利家の後詰するぞ防ぎ支へと下知し鐵炮を打懸けたり利家公押の人數を殘し今濱より砂山に押登り宿霧漸く晴れけれは家々の旗一同に颯と揚けにけり越中勢是を見て大に仰天し上を下へと騷動す末森城中には手をたゝき躍上つて悦こび勇ひこと限りなし利家公諸軍に粮食せしめて味方の人數を積もり給ふに利長公の勢七百餘不破彦三が勢七百餘村井又兵衛が勢六百餘利家公の旗本千五百餘都合三千五百ありしを四段に備へ利家公大音に下知し

汝等一命を我に授け力をつくし戰ふべし今を相從ふ者は皆一騎當千なり佐々が勢弾でか是に當るべき成政は我が舊友にて渠が軍立は能く知れり勝利疑ひなからん功あらば貴賤を撰はず厚く賞せん若し我僞りあらは立どころに神罰を受くべしとわりけれは各謹んで下知に服し勇みけり

○利家公末森城後援の事

加賀勢已に備を押出す處に道二筋あり一は末森一は坪井山への道なり爰にて村井長頼利家公に向ふて先づ成政の本陣坂井山へ押寄せ打破らんといふ利家公頭を掉ひゝや〳〵成政足懸りよき所を撰びて陣せん益なし末森は味方の城なれば内外より揉立て戰はゝ勝利を得んと必せり又兵衛尉身を悶へ重て云けるは是非成政の本陣へ一文字に切入り大將成政を討取らんと利家公許し給はず此一舉は我に任かせよとわりけれは又兵衛尉力及はず末森の方へと押行き漸く末森に近つきければ鯨波を揚げ鉄炮を打かけ村井又兵衛尉不破彦三多野村三郎四郎片山内膳原隠岐守青山與三以下の軍勢越中勢に打て懸り敵味方入交りて戰ひける村井が郎等間野新之丞一番に敵の首を捕り來る小林彌六左衛門三木十内屋後吉左衛門其餘の者ども首十一討取て手に〳〵提げ又兵衛尉に見せ直に利家公の實檢に入れしかは汝等勢力を竭し神妙なり我戰場に臨んで始て首を見る時其首にて吉凶勝敗を知れり今日の軍は大利を獲んと疑ある可らず懸れ〳〵と大音にて士卒を勵まし給ふ德山五兵衛傍にありしが餘り勇みはやり給ひて御聲の大に聞へ候聲を惜ひは大將の故實にて候ものをと諫めしに利家公聞給ひされはよ味方の働きのけなげさに覺ゆす聲の出でたるぞと宣ひ其後は秀で

たる働き手には辭を懸け給ふ不破彦三か郎等にも不破十左衛門同四郎左衛門平野齋宮等敵の首數級捕て旗本へ提げ來る利家公感賞し給ひ更に前後左右に下知を加へ給ふ佐々與左衛門が備へ加賀勢喚と突て懸れば與左衛門相懸りに戰ふほどに敵味方討たるゝ者數を知らず骸は道路に横はり血は野原に流れて一條の紅河をなす菊地伊豆守同十六郎は多野村三郎四郎が陣へ突いてかゝれば多野村が勢揉立たられ村井と與左衛門が勢と戰ふ所へ崩れかゝる村井が勢もともに崩れて足を乱す與左衛門すは味方は勝ちたるぞと眞先に馬を進め村井が勢を追散らす村井長頼大に怒りきたなき味方の者どもかなといふより早く鎗れつ取て與左衛門が勢を突立つる與左衛門之を見て是も鎗を撚つて長頼に立向ひ互に突合ふたり村井が郎等主を討たせじと引返へし長頼を拨けて相戰ふ長頼力を得て竟に與左衛門を突伏せ郎等に討たせけり越中勢與左衛門が首を敵に渡さじと一足も引かず揉合戰て三十餘騎枕を並て討死せしかば其餘の士卒右往左往に敗走す多野村三郎四郎も自ら鎗を把て返し合せ菊地勢と戰ひしが與左衛門が討たれたるを見て菊地勢も崩立つて引退く加賀勢勇み進みて一同に喊と聲を揚げ越中勢を追討てり斯て追手の軍半なりければ時分はよしと利家公利長公勢を搦手へ廻はし城内へ入らんと山を登る越中勢之を防ぐ野々村主水本庄市兵衛櫻井勘助齋藤半右衛門堀田次郎右衛門等士卒を下知し少しも騷はがず備を堅めて鐵炮を打つこと雨の如く流石金澤勢も進み兼ねたり時に篠原勘六富田六左衛門富田源六木村久三郎小林作内村井又六小泉彌市郎馬廻の侍には半田半兵衛野村傳兵衛山崎彦右衛門與野彌市郎阿波賀藤八江見藤十郎岡本七助吉川平太井口茂兵衛を始五十騎ばかり鎗を入れんと競ひ進みける半田半兵衛大音揚げ今日の一番鎗は我なりと呼ばつて鎗を入れんとせしに櫻井勘助が放つ鐵炮に半田が左の手を肩先へかけて打ぬきければ持たる鎗をかゝへてうつふしに伏せり櫻井は鐵炮に妙を得けるが半田とは從弟なり知らで打けることの悲しさよと悔みけるとかや金澤勢櫻井が放つ鐵炮に或は打たれ或は疵を蒙る者數を知らず辟易して見へし折しも利家公斯かる上手の鐵炮先きに立ち猶豫せば死傷多からんと自ら將棊の馬印を以て懸れ〳〵と身を揉んで下知われば利長公も白旗を振て士卒を勵ましける ほどに野村傳兵衛山崎彦右衛門眞先に鎗を入れは篠原勘六富田六左衛門小林作内其餘の侍入り乱れ黑煙を立て突合ける（野村山崎後一二と爭ひけるが一番に鎗を入しは時人よく知りたるゆゑ野村は一と定められ兩人共に食錬感狀を賜る又た半田は痛手を負ひ鎗を入て功なかりしも其志を感ぜられ野村山崎も共に食錬感狀を賜る此時半田に歩行世衣十五人與力に預らる）末森城中與村助右衛門永福父子之を見て大に悅び勇み前後より挾んで敵を揉立て追崩せと龍の雲を得たる勢にて城戸より討て出る前波三四郎野瀬治郎右衛門野崎孫助舍弟與左衛門三輪勘左衛門同助右衛門得たり賢しと突て懸る續いて可兒才藏本多三彌引くな進めと聲をかけ敵の中に突て入り越中方小川鯰之助龍田菊丸踏怵へて力戰す利家公の小姓富田六左衛門十文字の鎗を以て鯰之助と突合ひしが鯰之助右の手に疵を蒙り働き得ざりけるを六左衛門付入て遂に突伏せ首をとる龍田菊丸は大力の若者にて生年十六歳なりしが數度の戰ひに敵五六人を討取り又た此所にて武者三騎突伏せ更に走せ廻りて戰ひしが鐵炮にて左の股を打ぬかれ擅と伏ければ是を見て中間走せ來り菊丸を肩に引懸け退きたり越中

勢前後の敵に採立られ辟易して見へし所に寄手の將野々村主水淺黄の幌懸け敵の前に乘出し采幣を揮ふて味方を麾ぬき汝等前後の敵に取籠められ生きんと思ふは不憖なり迚も遁れぬ命ぞや潔く討死し譽れを子孫の眉目とせよしねや〳〵と四方を白眼まへ八方に馳廻りて下知しければ林野源内加々田大八死するに何の難きことあらんと敵の眞中へ一文字に突いて入り元來短氣の若者共野々村に激せられなしかは怺ふべき林野加々田我劣らじと吶と突入り共に死をぞ爭ひける敵味方の喚叫ぶ聲には天維も忽ち墮ち坤軸も須臾に碎くるかと怪しまる寺島牛之助小島甚助始めより山上に屯して戰はず成政旗本坪井山へ使を馳せ片時も早く旗本をよせられ候へ城を落すべき術の候と云送り成政を待居たり利家公父子は采幣を揮ふて前へ進むとも後へ一足も退くな鎗にて叩合ふべからず唯突倒して我眼前にて手柄せよと下知あれは金澤勢一足も退かす短兵急に突立る今宿印西入道德山源七と名乘て利家公の馬先にて越中勢を切崩す野々村主水は崩るゝ味方に下知し足並を立直し前後に心を配つて馬を飛ばせ馳廻りしが敵より放せる鐵炮に肩より胸へ血煙立つて打込まれなしかはたまるべき馬より眞倒に墮ちて道の傍澤水の中へ入りけれど味方も敵も是を知らず主水が手の侍芦の中に淺黄の母衣の見へけるを怪み立寄り見しに主水が死骸なれは大に慟き沈々肩に懸けて引退く齋藤半左衛門堀田治郎右衛門も一足も退かす戰ひけるが齋藤又た鳥銃に打たれ倒れて死せり治郎右衛門馬上にて士卒に下知し扣へ居たりしを敵横合より鎧の計算の間を深く突けるもゑ其儘馬より落て死せり越中方宗徒の者共討たれけれは其餘の將士七十餘騎同じく討死し殘黨色めき敗北す茲に山下甚八郎は最前村井不破と戰ひて菊地勢の崩れし時共に崩れて從兵多く討たれ纔か十三騎となり逃去つて深樹の中に息ひ敗卒を集め再び戰はんと思ふ中に早味方殘り少なに討なされ本庄市兵衛が備はいまだ崩れすして戰ふと聞き甚八郎本庄が陣へ使を遣はし誰にも討死のよし足下壹人戰ふとも勝つべきにあらず今日を期したる軍にてもなし早々引取り坪井山の旗本へ參られよ我等も引取申よしをいはせけれは市兵衛聞き仰尤に候我も引取申べしと答ふ甚八郎之を聞て坪井山へ赴きけり市兵衛も馬を返へし主從貳十人ばかり五六丁退さしが向ふを見れば市兵衛が近臣藤代といふ者敵八九人の中へ取籠められ相戰ふ市兵衛之を援けんと主從其所へ至り戰ふ加賀勢群り來つて市兵衛を始め郎等殘らす討取りけり茲に於て越中勢大に敗走す加賀勢追討ち都べて將卒の首七百五十餘級討取けり寺島牛之助小島甚助山上に備へて成政を待居けるが味方敗軍と聞き偖も成政來らは奇策もありしに今は此所に備へても益なし又た勝誇りたる敵なればみだりにかゝつて勝べき謂はれなし地形あしき所へ引て戰はんと手勢に下知し備を出で先懸すべからすと長柄を組んで前に立ち曳々聲を出して山の半腹まで人數を押出し金澤勢へ遠々と鉄炮を打懸けたり金澤勢之を見て退後れたる越中勢何程のことかある討取れと早雄の若者ども競ひ進む利家公之を見給ひ退後れたる勢にあらす旗の紋をみるに寺島兄弟ならん是等は弓矢取て名譽の者なり卒爾に懸つて過ちすなと制し給ひ取合はされば寺島兄弟士卒を纐ひ徐々と坪井山さして引て行く

○成政坪井山に從ひ出勢の事

成政坪井山に在り軍始りてより陣々より注進櫛の齒を挽くがごとし然るに味方敗軍に及びたるを聞き大に驚き急ぎ人數を押出しけるが又た宗徒の者大半討たれしと告げしかば大に怒り血眼になり我數度の戰に一度も敗を取らざるに今日利家に戰負け汚名を取らんことの口惜さよ急ぎ利家と一戰に安危を決すべしとて佐々平左衛門尉を先陣とし七千餘騎にて馳せむかふ神保安藝守氏治は初めより河尻に陣しけるが金澤勢の寄せ來るに周章混めき鐵炮を打懸けるが頓て士卒を引く成政の本陣坪井山へ退きしが世の人口を恐れ且は成政の怒りを恥けるにやものをもいはず面を赤ふして居たりしかども成政いかゞ思ひけん曾て之を責めず氏治をも相供しけり利家公成政の打出るを聞終ひ敗軍の殘兵爭でか我と戰はん一戰に打破り直ちに富山へ乱入し佐々が枝葉をも伐盡くすべしと又た備を立らる村井長頼は末森の先陣にて將士疲勞せしかども又た先陣すべしとなり弓箭の面目羨まざるはなかりけり偖て先陣は村井又兵衛尉二陣は奥村助右衛門尉多野村四郎三郎三陣不破彦三四陣は利長公五陣は利家公旗本其餘の後軍都べて濟々として列伍を乱さず佛强の切所を前に當て備へらる然るに川尻にて神保にさゝへられし加賀勢も馳來り大勢になりにけり又た末森にて加賀勢戰ひ勝ち越中勢の落行を諸手より追討せり利家公之を制し使番を追々走らせ留められ皆々引返す時に成政旗本七千餘騎佐々平左衛門尉先陣にて押來るにはたと行あひしかは驚き騷いて引退くを佐々平左衛門が士卒追さゞと追懸けたり成政又た下知し士卒を近道通り加賀勢の退く先に遣はし支へければ加賀勢前後の敵に進退谷まり色を失ふ徳山源七堀喜市同弟左太郎今宿印西入道秋山矢之治等前後の敵にわたり合ひ戰ふといへども大勢に叶ひがたく是等五人を始め士卒六十餘枕を並べて討死す佐々方是に勢を得て無二の一戰せんと競ひ進みけるが利家公五段に備を立て切所を前に當てたるを見て成政も人數を押上げ山の茂みに備へを立つ此時成政の軍勢皆な金の獎斗の差物しければ日に映じ一山の光耀燦然たり其軍粧の美麗なるを利家公遙に之を見給ひ吾頓て成政を討取り我旗本の衆士にも金の獎斗の指物をさゝすべしとぞ宣ひけり成政利家公の備へを見懸て戰へども利なきを察しけれは其日の巳の刻に山に傍ひ引き行くを利家公衆に下知し追かけんと自ら馬を先陣へ馳出し村井を引連れ見圖り給ふに味方進まん方は險路にして足懸りわしく敵の引取かたは足場よき地形なれば止めて追ひ給はざりき成政も軍勢足を乱さず段々に繰引にし輕々と引退く利家公成政各々織田信長の旗下に在り場馴れたる大將なれは之を見聞して人皆な賞感せりとかや

○長連龍白子濱着陣幷に烏越城將士奔走の事

前に利家公金澤御出馬の時能州の諸將へ末森後詰として各々明日未明に馳向ふべきよし飛檄を以て申遣はされけれは能州の諸將七尾城に集り高畠織部急に後詰とあれども各々寡兵を以て馳向はゝ敵兵多く道に支へんこと必せり其上末森已に落城せりと聞へけれは敵の樣子を伺ひ得と謀り一同に出陣すべしと申けれは皆な尤と同じけり然るに長九郎左衛門尉連龍は御下知ある上は猶豫すべからず各は兎も角も連龍に於ては速に出陣すべしと云ひ捨て城に歸へり手勢五百餘を引卒し急

き末森へと馳向ふ然るに利家公は末森の軍に勝ち給ひ軍勢休め給ふ所に白子濱に當つて旗一流見へければ利家公怪み給ひ敵か味方か見て參れとて脇田善左衛門野村七兵衛を遣はさる兩人急ぎ行て見れば長連龍にぞありけり兩人其志の忠眞なるを感じたり連龍兩人に向ひ軍さはいかゞと問ひければ已に畢り佐々引取り候なりと答ふ連龍聞て我遲參にて間に合ざるは殘念なり世人に指をさされ最早武道は廢れたり是より高野山に遁世せんと已に髻を切らんとせしが近臣すがり付きて押留む野村脇田駭き急き歸て利家公に斯くと告ければ利家公大に感じ給ひ連龍に急ぎ參るべしと宣ひ又た兩人を遣はさる奥村永福も又た吉田右近を遣はし勞らひけり斯くて連龍利家公の本陣に參り竭しければ利家公利長公早速の發向忠肝義膽感賞するに餘りあると宣ひ列座の衆士羨まざるはなかりけり斯くて利家公末森の城に入給ひ此度籠城の者大軍に圍まれ心を一にし固守防戰せしは天晴の義心比類なしとて城將奥村永福を召され守城の功勞を感賞し給ひ自ら着せし鎧甲太刀に將棊の馬印を添へて賜はる又た士卒にも其功によつて種々の賞を給はる其後永福が妻女を召し籠城の衆を勵まし其功莫大實に賢女なりと感じ給ひ若干の賞を賜はりけり斯て成政は末森の戰に負けたるを殘念に思ひ齒を切り此上は津幡へ押寄せ城中の雜壹人も殘らず討果たし鬱憤を晴らさんと馬に鞭を打つて津端を指して馳向ふ爰に中條の農民半右衛門は前に利家公の命ありによつて百人計の人數を催ふし集め木を伐て兵杖とし津幡中條邊の山々に紙旗を多く立て多勢の躰を見せければ成政是を見て敵多勢なりとて津幡へは寄せずして竹の橋まで退き吉倉山に陣を取る然るに竹の橋の長に當る鳥越城には金澤より目賀田又右衛門丹波源十郎古澤又右衛門を籠め居けるが越中勢末橋を攻め落し後詰の利家公利長公も敗軍し給ふと沙汰しければ鳥越城中大に驚き目賀田丹波古澤を始め士卒皆な臆病神に襲はれて十二日午の刻に城を棄て落行しは見苦しかりし次第なり斯くとも知らず成政の幕下久世但馬守千餘の人數を率ひ鳥越城に押寄せ綱いて寺島牛之助小島甚助是も千餘の人數にて寄せけり先矢砲を放ちけるに城中物音もせず唯だ旌旗の風に飜るのみにて人影も見ねず是は深き計もやあらん卒爾に攻むべからずと始めは近寄らざりしがあまり人なき樣子なれば怪みて斥候を遣はし窺はしむるに城中人なく已に落行たり斥候急ぎ歸り斯く告ければ久世寺島兄弟さあらば早く城を取堅めよとて皆な城に入にけり勢せずして一城を手に入れければ寄手皆な大に喜び合へり

長氏其先祖は長谷部信連とて大剛の勇士なり治承年中高倉の宮御謀叛の時目を驚かす働さありり信連より代々能州を領すといへども時の飛潛にしたがひ畠山の臣とはなれるなるべし後ち温平家信連を捕やるといへども英雄を殺すに忍びず能州へ放せり其後賴朝卿の時能州を給はりけ井三宅を亡ぼし能州を信長へ上る信長又た能州を利家公に賜はる長氏信長薨去の後利家公へ附屬せり

○利家公歸陣寺島兄弟喰留むる事

同十二日利家公利長公末森に在まし人馬の息を休め給ひしが成政加州へ亂入するよし風聞しけれ

ば奥村父子を末森城に殘し置き又も越中勢寄來らば注進あるべし後詰せんと宣ひ城を打立ち九千の勢を率ひ海濱に傍ふて歸陣し給ふ所々にて殘兵十騎廿騎加はり一万餘人となれり然るに前途山陰に人數一備待懸けたり是は寺島牛之助小島甚助兄弟なり末森にて味方敗軍し諸將多く討たれ殘念に思ひ兩人利家公の旗本へ切入り討死せんとの覺悟なり利家公の逞兵我も〳〵と進みければ利家公宣ふは天晴英雄殺すに忍びずと其志を感じ兩人を避けて告給ふ寺島兄弟追懸ければ利家公の兵士多く引返へし防き戰ひ首十計り討取て追拂へり利家公夫より粟ヶ崎にかゝり馬を馳せて其曉丑の刻に金澤へ歸城ありければ留守居はいふに及ばず國中の者農工商人に至るまで凱旋を賀し聲洋々として耳に滿てり然るに利家公軍勢に糧食せしめ寅の刻に又た金澤を打立ち山上より金腐柳橋枕板を過ぎ森本粟ヶ崎邊に陣を取り所々の林藪に勢を殲くし旗を揭げ給はざるは寡兵と見せて敵を詐り引出さんが爲めなり斯かる所に佐々方より伏木小市郎高岡兵内等七騎を斥候とし遣はせり此者共馳返り佐々が旗本に跪き敵は小勢と見位て森本粟ヶ崎に陣しけるが十丁ばかり隔て金澤へ續きたる道ありと見へ此邊に人の往來あり人氣夥しく伏勢あるや訝かしと申しければ成政聞て偖は後詰として京都の大軍來たるを伏置き我を僞り引出し討んとの謀なるべしと早々陣拂して木船へ引入ければ金澤勢も亦た歸陣せり偖も利家公前に末森の後詰勝利ありれば速かに津幡鳥越兩城へ告ぐべしと小林喜左衛門を遣はさる時に小林金澤へ歸へり利家公へ目賀田丹羽古澤を始め三城の守悉く逃げ失せ鳥越城は敵入代りし旨注進したり利家公聞給ひ敵の旗先をも見すして落行けるは前代未聞の怯弱の擧動なり是れ渠等が恥のみならず利家が瑕瑾なりとて大に怒り此上は一戰に鳥越を攻陷し恥辱を雪ぐべしと宣へども元來鳥越は險岨の要害なれば急に攻落さんには味方多く損じ容易からざることなれば老臣の諫めしかば利家公も攻めず止め給へり偖又目賀田丹羽古澤は永く勘當仰付られたり又た利家公末森の後詰古へより危急を救ふ類多しと雖ども甚だ是より急なるはあらず本朝無双の後援なりといへり又た越前の丹羽五郎左衛門長重は尾州在陣なりしに留守居の者利家公末森の後詰として出馬ありしを聞いて加州小松の村上周防守に人數を添へ加勢として金澤まで馳せ來りしかども末森聞き畢りし後なれば勝利ありしを賀して歸れり又た成政も久世但馬を鳥越城に殘し置き富山へ人數引入れけり

○成政援を景勝に乞ふ事

成政富山に歸陣し此度末森にて諸士の功罪を穿鑿し賞罰あり且討死の將士の後を繼がしめ嗣なき者には養子をし厚く惠まれければ討死せし者の妻子歎き悲みけるもいつしかよろこびの眉を披けり成政又た加越の境所々の城を堅固にし晝夜計策をめぐらし金澤を討亡ぼさんと思へり然るに阿尾城主菊地伊豆守來つて成政に對面し此度末森にて敗軍味方多く討死す重ねて兵を發し合戰するは甚だ難しと思へり依つて上杉景勝は弓矢取つて功者なる將なれば援を乞ひ力を合せ加州を討給はゝ利家を亡ぼすこと易かるべしといへり成政聞いて菊地殿の申さるゝ如く然るべく候へども我當國を領せしは故信長公越後を討たんが爲にしかり故に是迄永の年月爭戰せり然るに今援を乞

ふは口惜しき次第なりと申されければ前野小兵衛尉進出で仰尤には候へども當國より加州を攻むるとも敵利おつて味方不利なり其故は加州後は皆な味方地にて縱令敗軍すとも加勢多く軍兵心を勞せず自國は四方皆な敵國ゆゑ軍兵心を勞して勇みなし若し越後を味方にせは軍兵大に勇み進むべし伊豆守申さるゝ所ろ利にあたつて候と申されは成政實にもやと思はれけん然らはよきに計ひ申べしとて前野小兵衛越後景勝への傳を求めけるに城下に稻垣滿露軒といへる醫あり年々越後出羽奥州までも行通ひ景勝の臣直江山城守へも出入せるよしを聞き小兵衛滿露軒を召び汝越後に到り直江山城守に爾々の事を申述べ內意を賴み存ずるよしを委しく申含めける滿露軒承はり急ぎ越後へ行き直江に對面し我國の領主佐々內藏助加州の前田又左衛門尉と確執あり屢々國境にて合戰せり然るに今度末森にて大に利を失ひ何卒景勝公援をなし給はらは能加を討亡ぼしたく越中と越後は是まで敵讐の國に候へは卒爾に使を以て申入るも遠慮候て成政先づ我を以て賴入候なり景勝公御許容下され候はゝ成政生前の本望これに過ぎずと申されは山城守之を聞き景勝に申述べ暫く滿露軒を留置き猶又春日山城中にて評議あり滿露軒を召び景勝對面し申されけるは成政戰ひ利あらず我に援を乞ふ是れ窮鳥懷に入るなれば我何ぞ援けざらん且つ此方よりも望あり越中新川郡は父景虎の伐取りし地なり然るに近年成政押領す之を本の如く返され候はゝ加能を其代りに伐取り渡すべし且つ向後異心なきに於ては人質をも遣はさるべし某速かに出馬せんと申されければ滿露軒其よし承はり事成りぬと悅び急ぎ富山に歸り小兵衛尉に斯と申ければ小兵衛尉滿露軒を伴ひ城に登り成政に其よしを告げらる成政之を聞き大に怒り新川郡は我勞苦して伐取りし所なれば我何ぞ之を返し與へんや又た人質を渡さは我景勝の幕下なるなり何ぞ景勝に跪かんや思ひもよらぬことなり唯だ隣國の好みに加勢を賴おんとて又た滿露軒を責め越後は敵國なるに汝山城守に親しくせるは定めて國の密事を洩すならんと小兵衛尉に此者誅すべしと申付らる小兵衛尉承はりされども滿露軒罪なければ誅すべからずとて先づ獄に入置けり然るに越後より滿露軒へ飛脚の來りしが滿露軒獄中にあるよしを聞き驚き逃げ歸りしとかや

○能州荒山落城の事

能州七尾城主前田五郎兵衛安勝同孫左衛門長勝高畠織部定吉中川清六光重は利家公末森の後詰に打勝ち給ひ且つ長連龍寡兵にて馳向ひ利家公の深感に預りしと聞き大に後悔し我々孤疑猶豫して果さず面目を失へり此上は如何して世の人口を塞ぐべきと評議しける然るに同國荒山の城には守山の神保氏治が臣袋井隼人を籠置けるが氏治へ議することありて隼人を始め城兵等多く守山へ赴き城中には僅かに二三百人ばかり殘り居たり石動山の僧徒之を聞出し七尾へ告げ知らせしか是れ幸ひなりと喜びて五郎兵衛尉孫左衛門尉以下の諸將人數を催ふし荒山に押寄せ鬨を揚げて攻めけ中思ひよらざる事なれば大に驚き騷ぎ鐵炮を放つ心もなく寄手勇進んで門塀を破つて乱入り城し城兵百餘騎防ぎ戰ふ前田孫左衛門尉の手の侍笠間儀兵衛梅野覺兵衛と名乘つて真先に進んで城兵四五騎突伏せければ續いて能州勢敵を打つこと五六十騎殘黨愈々氣を失ふて本丸に逃入りけるを

追懸け本丸の塀下に付き七八人門へ込入つて働けり城兵も今を限りと思ひければ火花を散らして戰ふ程に寄手七八人の侍皆討たれけり去れども笠間梅野勇氣たゆまず塀の薄き方より打破つて本丸へ駈入れば寄手我も〳〵と乘込み城兵防ぐに術なく城を逃出で山中へ走り隱れんとするを切殺し悉く城を破却し安勝長勝定吉光重を始め士卒皆是にて前の恥辱を雪ぎけるとよろこび勇んで七尾に歸陣し討取たる首多く金澤へ遣はし荒山を攻め陷しける次第悉く注進ありければ利家公頓て笠間儀兵衛梅野覺兵衛を始め功ある者へ賞賜せられけり

○鳥越俱利加羅合戰の事

利家公諸臣を集めて宣ふは前に丹羽目賀田古澤鳥越城を逃げて敵に城を渡せしこと武門の恥辱これより甚しきはあるべからず我之を深く憤れり此度軍を發去て鳥越城を取返さんと思ふ汝等如何とありければ列座の者皆此儀然るべしと云ひ同十月十四日陣觸ありて數千の軍兵を率ひ金澤を打立ち鳥越邊の民屋を放火し喚叫んで攻寄る久世但馬守物馴たる大將なれば此寡兵にて出で戰ふも益なきを知り城門を閉ぢ人を出さず山々谷々に逆茂木を引き靜まりかへつて守れり寄手是はどの小城何の難きことかあるとて險岨を厭はず攻よせいやが上に塀下に付くを但馬守士卒に下知し矢炮を雨のごとくに放ち又た大木大石を投懸ければ寄手死傷多く殊に今朝より霰交りの時雨晴間なく寄手大に困苦せり利家公宣ふは此城急に落つべきとも見へざれば人數を引揚げよと使番を廻はし先陣へ傳へ已に引取りしが城中より出で蒸はんとせしを但馬守堅く制して出さず利家公加州へ歸城し給ふ木船城佐々平左衛門尉加賀勢鳥越を攻むるよしを聞き後詰せんと軍兵を率ひ馳出る是を支へんと津幡城主前田右近秀繼嫡子又次郎軍勢を從へ俱利加羅邊に出張し木船の勢に鐵炮打懸けれは木船の若侍あれ蹴ちらせと山に進登る時に津幡の先陣笹島織部河内山半左衛門矢島兵左衛門以下はや敵と渡り合ひ首を取り木船勢疎まず我も〳〵と進みけり茲に前田又次郎は大力の聞へありしが士卒の眞先に立ち太刀拔きかざし渡合はんとせしが降雨に手のうちすべりて太刀を谷底へ墮とせり又次郎是は却つて幸ひなり是こそよけれと大手をひろげ先に進む木船勢の突懸る鎗を潛て鎧の上帶しつかと握目より高く指擧て遙の谷へ投げれは微塵になりて失せにけり敵又次郎を見しかば我討取らんと早雄の若者拾人ばかり鎗端を茅の如くひらめかし突て懸る又次郎之を見て傍なる一丈餘の松を根拔にし薙立けるはやに皆な打拉かれ後へ疊と崩立つかゝる働きは人間にてはよもあらじ天狗の所爲ならんと身の毛をたて我先にと山の下へ逃げけり平左衛門尉いへるは敵は山上に在て味方を見すかすゆゑ迚も懸りても勝まじきぞとて木船へ早々勢を引取れり

○上杉景勝越中境を侵す事

秀吉公宣ひけるは成政利家と戰ひ兩國の民安からず我速かに馳向ひ成政を討亡ぼさんと思へども いまだ近國の敵靜かならず時節を待てり然るに越中越後隣國なれば成政景勝と和睦し力を合せて加賀能登を攻め討つは甚だ難儀なるべし元來景勝勇威謀畧勝れたる將なり又た越後柏崎の妙樂寺は日蓮宗にして大智識の聞へあり景勝渠に事を謀る素より武道功者斥候の事は衆に超絶せり殊に

言語明かにして理に昧からず辛ひ此頃洛陽に來るよし」此僧を頼んで景勝を加州へ動かざる樣にせんと思ふ汝等いかゞとおれけりば列座の諸將一同に夫はよき御賢慮と同じけるよつて妙樂寺を召び此事御頼ありければ速に領掌しける秀吉公大に喜び給ひ妙樂寺に木村彌市右衛門を添へ同年十月上旬密かに春日山へぞ遣はさる斯くて彌市右衛門春日山に至りける此事速かに妙樂寺より景勝へ披露せしかば城中にある幕下の諸將を集め此事評議せられける諸將承はり成政前に越後と和睦し後援を頼みけるに飜つて約に背き又た使せり滿露軒を罪し獄に押込置けりと聞きさあらば秀吉の頼みに任せられ候はゝ然らん是より越中を切取りにせん事易かるべしと各々申すにぞ景勝云ふさらば使者木村彌市右衛門登城せさせとおりければ彌市右衛門を召び大廣間にて景勝對面あり木村申しけるは近年成政加州を奪ばんと計る不義尤も惡むべきなり前に成政末森を攻めて前田又左衛門尉と戰ひ竟に成政負けて諸將討死多し成政之を鬱憤に思ひ再び加州を攻めんと謀る然れども一已の力にては勝ちがたきを察し隣國なれば越後へ援けを乞ふことあらん必ず御同心なき樣にと秀吉頼み申すといひ景勝之を聞き御頼みのよし敬んで諾せり御氣遣ひあるまじと答へければ彌市右衛門大に喜び歸へりけり景勝是より又た越中を切取るべしと十月廿三日八千餘騎を引率し春日山を出馬あり長濱有馬川を過ぎ名立浦本へかゝり墮水より左の山の方をさり親しらずを妻手に見山中に道を作りて押通り廿六日は境川を前に當て陣し宮崎城には成政幕下益木中務丞籠りしが敵の大軍を見て城戸を出でず景勝同日巳の刻より攻寄せ城の後より鐵炮を打込みければ中務丞

怯へかねぬ迚も叶がたきを知り降參し城を渡せり景勝城に入り翌廿七日には藤田能登守安田上總介泉澤河内守が三備をして黒部川を渡り角川早着川を越へ富山より四里東なる滑川まで押寄せ民屋を放火して引返す此時丹羽權平魚津の城にありしが越後勢押の人數を置き滑川まで働きけるを安からず思ひ權平五百人許の兵を率して討ち出で越後の押の勢を追散らし又た角川の岸に人數を押出し越後勢の滑川より歸る路を塞ぎ安田上總介が軍勢引來るを川向より鉄炮を打懸けたり安田が勢川を渡りかねたるを上總介眞先へ馬を乘出し續け〳〵と下知し川を渡して向の岸に上る安田が軍兵主を討たせじと川を渡つて權平が勢に面もふらず突て懸る權平自身に鎗追取て進めば士卒皆な越後勢と追つ返しつ戰ふたり其間に藤田泉澤が二手の人數角川を渡て徐々と引退く藤田が人數十四五丁引いて又た備へを立つる安田が勢又た眞丸に成つて引取り越中勢蜂のごとく起つて付き慕へは藤田が勢備を押出して戰ふ其次は泉澤其次は安田と繰々に備へて戰ひ引退く丹羽が勢入替べきなければ疲果てにけり權平敵を追ふとて落馬し胸を強く打けるもゑ早々魚津へ引取りけり成政此戰を聞き大勢を率ひ富山を打出しに常願寺川にて敵引取りしと聞へければ引返して歸城せり時雪の降り積もる頃なれば景勝も宮崎の城に人數を籠め早々越後へ歸馬あり又た成政は益木中務丞が景勝へ降參せしを聞き大に怒り速かに宮崎城を取返さんと評議あるといへぞも北國の事なれば風雪にて越後又た加賀の取合ひもなかりけり

○成政遠州濱松に到る事

秀吉公は織田信雄卿徳川家康公と對陣し給ひ合戰止む時なし然るに足立清左衛門尉和睦の事を取計ひければ双方和睦し給ひ信雄卿秀吉公と對面あり秀吉公軍を引き歸城し給ひけり是より秀吉公佐々を退治すべしと議し給ふよし聞へしかば成政大に驚き嗚呼天我何の罪がある又恨らくは信雄卿秀吉が計畧を知り給はず和睦し給へり然るに秀吉大軍を率し當國へ發向せば一已の力にて縱令張良が謀を廻らすとも及ぶまじと種々思慮をめぐらし何卒遠州濱松に行て家康に對面し直ちに謀り明春雪消なば南海北海一時に軍を發せば秀吉加州へ兵を出す事もなるまじ是良策ならん排し遠州に到らんに東西は皆な敵國飛州又た金森が領なればいかゞせんと案じ煩ひける茲に玄同といふ禪僧當國出生の者にて日本六十餘州行かざる所なく殊に北國の地理間道までも知らざる所なし成政之を聞き是幸ひなりとて彼僧を側近く召んで立山より信遠に出る捷徑ありやと問ひければ僧答て立山を踰もれば信州下諏訪へ出で是より遠州への道もあり下諏訪へ出る道は兩三度も通り覺て候が扨々難所にて人倫絶へたる所なり山嶽天に連り四時雪あり夏日を知らず寒風肌を裂き手脚龜り茲に過る道もなく巖石を攀ぢ脚下溪深にして煙雪鎖し幾千丈あるを知らず藤蔓幾年となく生ひ茂りたるが深溪へ架し橋のごとくなるを攀ぢて過る所もあり又た脚下に火燃ゆ溪水沸き騰り熱湯となり煙漠々として暗く咫尺を分たず實に言語には盡しがたしと述べければ成政得と之を聞き汝能く其道を知れる事幸なりと大に喜び此僧を還俗せしめ龜谷吉郎兵衛と名づけ近習とせしが或日成政吉郎兵衛に向ひ我徳川家康に直ちに謀り明年軍を發して秀吉を討亡ぼさんと思ふ汝立山より踰へて遠州へ至らん道を敎導せよ近日密かに行かんとありければ吉郎兵衛大に驚き彼山を踰へ給はんこと夏はともあれ今は寒冬にいかゞして行かんや中々思ひもよらぬ事必ず止まり給へといふ成政又た汝が止むるは理なりといへども明年秀吉大軍を率し來らば一已の軍勢にては叶はじと思ふ故に遠州に行き家康と謀り力を合せ戰ふ時は勝利あらん然るに等閑にして來年亡びんよりは山路に凍ゑ死なんもましならんか早々從者の用意せよと云ひ吉郎兵衛此上はとても死なん命ならば行かるゝ方まで御供申べしとて主從九十四人密かに旅行の用意をなせり成政又た留守居の臣に命じ我遠州へ行きしこと敵國へ洩れぬ樣にすべしとて十一月廿三日富山城を密かに出て立山の險難を過ぎけるが誠にいひしにまさる所にて積雪万壑を埋み寒風凛烈として膚へに砭するが如く日暮れやゞるべき巖樹の陰も雪に埋もれ主從肌を合て一夜を明すといへども各々凍えて命も絶るばかりなりなれども成政剛強なれば相從ふ者の氣を勵まし汝等愁ふるなかれ戰場にて矢玉しげき所に立よりは遙に易き道なるぞと先に立つて急がるゝ千辛万苦いはん方なしされ共各穩にて渉りければ却て常よりも過易く向ふを見れば人家近きを覺へて雪の上に踏みわけたる道あり皆なよろこび急行けるに八九家雪に埋みて柴折燒く煙の立ちのぼれば皆々力を得て立入り里人大に驚けるを建部兵庫云ふ汝等少しも驚くなかれ是は越中より信州諏訪へ過る者なるが深雪に蹈迷ひ爰に來たり一夜を明かさせ道の案内せよ引出物せんとて金銀を取出し與へければ里人等大によろこび敬ひ平伏して爰は樵夫の栖にて候へば食物も上ぐべきものゝ候はずといふ建部聞きそは苦しからずさ

れども皆な寒氣に堪へがたし酒はなきかと問ひければ此里には候はず是より十町ばかり去つて人里あり爰に濁酒と云ひ究竟なる物あり買ひに遣はせとて價を出しければ若者急ぎ行て濁醪二斗ばかり求め來たり成政を始め皆燒火に暖め多く酌んで寒さを凌ぎ主從爐邊に頭を垂れ仮寐の夢を結びけり夜も明けぬれは各々立出で行くほどに十二月朔日未の刻信州上諏訪に着きにけり是より遠州濱松へ飛脚を遣はし家康公へ斯くと告ければ頓て迎へとして乘馬傳馬駿府より來り是より宿々滯りなく同十四日遠州濱松城に着にけり斯くて成政家康公に對面ありしかは種々の饗應ありけり成政時に申けるは羽柴秀吉元來凡庸の者なるが信長公登庸して數ヶ國の領主とし給へり是れ莫大の厚恩に候はずや然るに秀吉我意をふるひ重恩を忘れ信長公の子息を蔑にし信雄卿を失ひ天下を押領せんと巧めること禽獸にも劣れり又た某は右府公の寵によつて越中の守護職を給はる何を以てか君恩に報せんと思へり去るによつて秀吉が方へ質とせし娘を捨て北畠殿の爲に忠戰を勵み申べきと思ひつるに近頃秀吉信雄卿と和睦ありし事秀吉が謀略にて信雄卿信せられしは悲歎すべき事に候又た今更成政何ぞ渠に從はん爰に於て秀吉明年北國へ大軍を率ひ發向のよしを聞けり成政一已の力にて大敵を防がん事覺束なし願くば君の神武を以て秀吉を攻め給はゞ某北國に旗を揚げ能登加賀越前を攻從はんこと掌の中にあり元來君は源家正統の名家にして殊に聰明叡智の良將にて在せば今を義旗を揚給はゞ四方の俊傑まねかざるに自づから馳集るべし君と成政心を合はせ共に謀を廻らさば龍虎の勢ひあらんといふ家康公笑ひながら頓て許諾のよしを答へ給ふ其夜は城に宿し終夜軍の評議し翌朝打立ち參河の國を經て尾州清須の城に至り北畠中將信雄卿へ見へ秀吉を討亡し天下の將軍となしまいらすべしといひ計畧をも告げまいらせ又た深雪を蹈分けて越中富山へぞ歸城せり成政濱松城にて家康公と軍評議せし時酒井左衛門忠次間を隔て聞居たりしが退去の後家康公の前に出で成政唯今の辭無禮至極に覺へ候去る中秋より前田利家と爭戰今に何の功もなく殊に末森に於て大敗せしよし世に隱れなく候然るに君と我を龍虎に比し君の武德にひとしく思へるは片腹いたき事なり君何爲れぞ渠が申す旨を御許容ありしと申ければ家康公聞き給ひ汝いまだ事熟せず隘しといふべし唯だ予に任せよと宣ひ其後越中へ加勢あらんとて立山の道を詮議ありければ至つて難所なれば加勢の事は止みにけり

一書に佐々成政立山踰への時此彼をたどりけるが日已に暮にけり木の下岩の隱に立寄るかたもなく雪はふかし主從凍ゑて難儀といふも思かなり然るに燈の影幽かに見へければ成政よろこび此山中にも人家のあると見ゆるぞ宿をかるべしと急行けるがさもいぶせき柴の庵に二人の翁の燒火にあたりて眠居たりしが其容貌常ならず尺け六尺餘り鬚顎左右に分れて蝟毛のごとく今まで壹人は其長さのみ劣らず目かぶら高く頰骨あれて金剛力士のごとくなり成政二人に向ひ我等は深雪に迷ひ行暮らせり一夜を明かさせ給はれと申されければ老翁各眼を開き熟々見て壹人の翁いへるは道に迷へるにはあるべからず定めて用ありて此山を踰もるならん入つて休み給へとありければ皆悅こび内に入り燒火にあたり寒をぞ凌ぎける少頃壹人の老翁問けるは今天下の武將

は誰にて候ぞや兵衛佐頼朝が後ならんか成政打笑ひ翁は與ゐることを宣ふ物かな我聞く頼朝は元治元年三月西海の戰に平家を滅ぼし征夷大將軍に任じ十五年を經て正治元年正月十三日に薨じ給ふ嫡子頼家將軍に任せしかども早世し其弟實朝將軍となれり實朝又た薨去嗣子なきによつて母儀二位の禪尼の計ひとして左大家藤原通家卿の三男二歳なるを養子とし頼經將軍と號す夫より頼嗣家尊親王其嗣惟康親王其嗣久明親王惣じて此間北條時政が子孫權を執りて天下の成敗を恣にす北條九代相摸守高時入道正道正しからず依つて後醍醐天皇武士に仰せて討亡ぼし給ふ夫より足利尊氏將軍に任ず其子孫十五代將軍たり然るに近年平資盛の苗裔織田上總介信長天下の權を執つて内大臣に任せしを家人明智光秀叛逆にて信長自害す信長が家人羽柴秀吉又た明智を討て天下の權を執る故に信長の息信雄と秀吉合戰せり其勝敗いまだ決せずかゝりければ頼朝薨去正治元年より天正十二年までは曆數二百八十餘年になり候と語る老公聞て互に驚き歎じ昨日今日とこそ思ひしにはやくも星霜を經るものかな然るに平家の一族再び盛ならず資盛の末葉暫く天下に威を震ふといへども家人に弑さるゝ事天運の程こそ拙なけれ是といふも大政入道殿悪逆無道にて王者を憐まし奉り民にも苛らかりし報ひならんと共に悲しみけり成政あやしく思ひ抑も老翁は誰人にてましますと問ければ翁答へけるは是は平相國清盛が家の子なり夫なる翁は上總の悪七兵衛尉景清某は五十嵐次郎兵衛盛嗣とて平家の侍大將なり西海にて討死すべかりけれども何ともして頼朝兄弟を討ち主君の讐を報せんと謀り上總五郎兵衛尉忠光舍弟景清盛嗣三人死を遁がれ京鎌倉に往來して頼朝を伺へども志を遂げず忠光は鎌倉法華堂造營の礎人夫にまぎれ土石を搬び頼朝に近づく事をなし已に本意を達せんとせし所に事顯れて擒となり誅せらる又た頼朝我等二人が在所を搜出して討手を向ける事度々なれば身を隱すに所なく幸に越中は盛嗣が領國なれば共に此山中に隱れ木の實草の根を食とし月日を送りしが早や四百年を經る事こそうたてなれと語ける成政を始め皆々之を聞き奇異の思ひをぞなしにけり成政又た傳へ聞く兩翁は天下にかくれなき力士なれば何とぞ力を示し見せ給へと請ひければ景清盛嗣打笑ひかく老ぼれて今は爭でか力の侍ふべきといふ成政強て望みければさあらばとて二人の翁庵を立出る成政主從も續いて出ければ庵の側に大なる盤石あり翁皆に向ひ此石谷底へ投げ給へといへり成政が郎等數多く立寄り抱き擧んとすれども少しも動かず二人の翁同じやうなる石の二つありけるを輕く擡げて遙の谷へ投たるは鬼神のごとくにぞ見へたりける時に老翁指さして麓に人里あり是より下り給ふべしと懇ごろに敎へて二人は忽ち失にけりありつる庵もまた枯木の雪を帶びたるばかりにて茫々たる山とぞ成にけり成政敎に從がひ南のかたをながめやりければくもる煙の梟むあり人里ありと皆な〳〵松の枝を折りて居敬さそりの如くして深谷に落しけるに難なく麓の里に至りける時に樵者の家に立寄りたれば樵者驚き何人ぞととがめけるを建部兵庫頭云ふ驚くことなかれ是は信州深志へ過る者なり宿をも借し道しるべせよ引出物すべしとて金銀を與へければ樵者悅こび案内をぞしにけり成政富山城を十一月廿一日に出で十二月朔日に上の飯

訪へ者同四日に遠州濱松に至るとなり此事又た治乱記にも載せたり

○蓮沼合戰の事

天正十二年は加越兩國の人死傷數を知らず寔に修羅の巷にて昨日過ぎ今日暮れて十三年にぞ成りにけり斯る世の中にも元三を壽き加越ともに賑はしく東風吹度りて殘雪漸く消ゑ柳垂れ梅綻ぶる時にもなりぬ松任の前田孫四郎利長公は放鷹に出給ひ直に金澤に至り利長公に面會あり利家公宣ひけるは雪も漸く解けたれば今年は此方より兵を發し越中を攻めんと思ふ如何とありければ利長公答給ふは仰せ御尤に候村井を御召び御謀り然るべしと宣ひ即ち長頼を召され此事謀り給へば長頼承はり去年は越中勢當國を馬蹄に懸け候事口惜き次第に候雪も消ゑ候へば思召立あつて然るべく某郎等に越中の案内をよく知りたる者の候是に謀かり又も申上くべしとて家に歸り郎等を召集め長頼申しけるは君近かくに兵を發し越中を討たんとの思召立てなり汝等越中の案内を知れる者先づ何を討つて大功あらんと問ふ屋後太郎右衛門小林彌六左衛門兩人暫らく頭を傾け申しけるは我等は越中蓮沼出生の者に候蓮沼とは今石動と安居との間にて頗る險難の地にて敵の足だまりよき場所なり又た礪波中郡の民米穀貨財を貯はへ積置けり此の所に寺あり夜中密かに押寄せ寺を燒拂ひ民を討ち亡ぼさば敵樞要の地米穀貨財を奪はれ大に困苦せん米穀はもとより民命なり旁〻以て味方の大功此上へやあるべきと答へければ長頼聞て大に悦こび是れ上策なりと急ぎ登城し利家公に斯くと告げる利家公聞召實に奇策なり是に從がふべし然れ共汝勇にはやり深く働き入らば

不虞の變あらん慎むべしと宣ひ二月十八日更に諸老臣を城中に召び軍議あり同廿八日金澤を討ち立給ふ村井長頼は屋後太郎右衛門小林彌六左衛門を先きとし一千餘人にて先陣たり孫四郎利長公の功臣山崎勝兵衛尉長德近藤善右衛門尉八百餘は二陣たり三陣は岡島喜三郎片山内膳多野村三郎四郎八百餘次は不破彦三前田又次郎武藤助十郎奥村助右衛門尉富田六左衛門尉岡田長右衛門尉篠原來六是等を將として勇士數百騎相從ふ次は利家公御父子竹の橋邊に出張あり先手の人數越中礪波郡に乱入し民屋を放火して猶深く敵地へ働入らんとせし所に利家公軍使を走らせ引返すべしと頻に下知を傳へければ皆々竹の橋まで引取りける然るに同日夜戌刻村井長頼は四井主馬といふ忍の者に小林彌六左衛門屋後太郎右衛門を案内者として蓮沼へ働入らんと志せしが頃は如月の末つかた白根ゲ嶽を吹きれろす嵐餘寒つよく暗夜といひ雨頻に降りければ目ざすも知らず士卒大木に行き當り或は谷へ轉び落ち大に苦めり四井主馬長頼に向ひ斯の如くにてはいかで進み申すべき引返され候へかしと云へば長頼大に怒り我何ぞ暗夜を怖れてすごゝと軍を返すべき縱ひ長頼深谷にたち入り死すとも是非なし是より引取りなば敵の旗先をも見ずして敗走するに同じからん汝等強て歸りたくば我を棄て歸るべしと云ひ四井を始め相從ふ者大に畏れ且つ其忠心剛强の程を感じ皆な心を一にして暗路險難を凌ぎ廿九日未明に蓮沼に着き無二無三に寺中に乱入し喚き叫び方々に火を縱ち炎さかんに燒ければ寺中に在りし郷民男女周章混めき資財雜具をうち捨て衣一重だに身に纏はず赤裸にて四方へ逃くるを雜兵ども此に追かけ彼に追つめ討取ける程に三百餘人に及

べり其外谷に陥ち坂より轉び墮ちて死傷又た數を知らず哀れなりし事ども なり斯くて村井又兵衛尉長頼は引返さんとする處に礪波貴船城に近ければ火の手を見て敵ぞと察し前野小兵衛尉は礪波城佐々平左衛門は貴船城より討ち出で喰留めんとて追懸散々に相戰ふ村井取て返し戰ひしかども越中勢多ければ取籠められ數疊枕を並べて討死し士卒足を乱して敗北す村井長頼大に怒り敵多勢なればとて越中勢の手並は知りつるものを速かに追散せよと下知しければ屋後太郎右衛門小林彌六左衛門大窪小五郎阿波賀五右衛門等敵の中に突て入り山河も崩れよと喚び叫て相戰ふ吉川平太（後ち礪島丹後）江見藤十郎は餘り強く戰ひし程に鎗はさゝらの如くになつて突折れしかば兩人鎗を抛ち太刀を拔て又た敵中に入り共によき敵を討取り高名せり村井長頼眞先に進んで驅立しかば敵叶はずして引退く村井も亦手早く士卒を纒めて引けり二番に備へたる松任勢山崎勝兵衛尉長徳近藤善右衛門尉八百餘の士卒を從へ入替りて戰はんと備を突出す貴船礪波の軍勢三千餘一手になり懲懸りに唯一戰に揉み崩さんと相戰ふ山崎近藤引くな進めと士卒を勵まし火花を散らして戰かへども越中勢强くやありけん松任勢突立られて逃ぐるを村井長頼士卒を眞丸にし急に横より鎗を入れ火水になれと突立つる金澤方岡島喜三郎が備へたる所へ利長公の鋏炮頭平野五郎右衛門河村善五郎永田猪之助鋏炮足輕百人を從へ來つて鋏炮の玉を込替へしげく討たせければ越中勢若干打たれ咄つと崩れて逃行くを追懸け七八十騎討取猶ほ高き所に人數を上げ鋏炮を打懸ける越中勢茲にて又た二三十騎打たれ叶はずとや思ひけん貴船礪波の城へ急ぎ人數を引入れ森山城主神保安藝守へ敷浪に早馬を以て急を告げ加勢あるべし加賀勢足長に働來れり追付成政も後詰あるべしさあらば敵を一人も討洩らすまじといひやりければ森山城中には之を聞き俄に馬よ物具よとひしめき人數を出しけれども行程五里もありければ時を移して間に合ざりけり其間に加州勢は徐々と引取りけり此時加州より鳥越城押へとして金谷平内等頭七人に弓鋏炮足輕三百五十人添置しが城將久世但馬守寺島牛之助小島甚助門を討て出矢玉を放懸くるを加州勢事ともせず急に鎗を入れて突崩す又金澤の將不破彦三武藤助十郎が人數徐々と引取るを貴船城へ逃入し軍兵之を視て怠へがたくや思ひけん雲霞の如く討つて出で遮ぎり留めんとす不破武藤少しも驚かず弓鋏炮の者に代り〳〵矢玉を放させ備を乱さず段々に繰引にけり貴船城兵山に傍ふて加州勢を追行けるが鳥越城より討つて出たる勢と一手になり金澤勢に追付たれば金澤勢も取つて返す越中方には福岡與四郎印牧甚兵衛飯野權兵衛粟田傳兵衛杉江左門八田甚兵衛鈴木孫左衛門栂野小市郎等進んだり金澤方には鷲津九藏横山右京亮上坂九右衛門半田源太郎各務勝三郎足輕頭には河村五右衛門輕卒に鋏炮を打たせ眞先に進んだり越中勢は能く地理を知れるも白山に登り金澤勢は地理を知らず山間の細道に行向ひて難儀する處に上坂九右衛門眞先に進んで引返し敵に鎗を入れ越中方倉智猪之助と名乘り面もふらず進み懸り散々に突合ふ處に金澤方細井彌左衛門返り來り鋏炮を放ち居たりしが持ちたる鋏炮を抛ちて倉智が鎗に取付き手繰りして寄りたれば倉智鎗を捨て無手と組んで捻合けるが岩角を踏崩し共に谷へ轉び墮ち上になり下になり三度さで轉びけるが細井遂に倉智を押伏せ首を拔き高くさし

上て高聲に越中方倉智猪之助を細井彌左衛門討取たりと呼はれり越中勢之を見て口惜く思ひ山間の敵軍を前後より討取らんと杉江左門下知し一山の藤に傍ふて軍勢を押廻し引く先を取切り前後より揉み立て攻めければ金澤勢麁ろしにならんとするを鷲津九藏爰を破らでは叶はじと大薙刀を振廻し縱横に薙立てたり之れを見て越中の諸將馬上に鎗を提げ我先にと進んだり山崎勝兵衛尉は鷲津より八九間後にありたるが九藏を見捨て援けざりけり山崎が郎等申けるは鷲津は討たれ給ふべし援け給はぬかと山崎聞て九藏討死してこそ吾一番に成べけれといへり八田甚兵衛はよき敵かなと九藏に鎗を撚つて突て懸り戰ひしが鷲津如何したりけん胸板より後へ突貫る鷲津こは口惜しと鎗の柄を打切り痛手なれば撞と伏しにけり横山右京九藏が首を敵に渡さじと走懸る山崎勝兵衛尉も同く進み横山が鎧の袖を引き鎗を入るれば今少し早かるべししはあひこそあらんと制せるを鎧の袖をふり切て鎗を入けり越中方栂野小市郎木村助作山田角彌以下七八人八田を援け來つて横山を突立る山崎勝兵衛尉横山を討せじと眞黐になつて突て懸る金澤方根尾吉左衛門進めや人々と衆を勵まし山崎と立並び戰ひしかば越中勢其勇氣に敵し難く吶と崩れて引退く利家公先手の樣子心元なく誰か見て參れと宣へば横山三郎十七歳なりけるが某見て參り候はんと馬に乘りて馳行しに越中勢引取る所へ馳付たり印牧次郎兵衛軍勢に引下つて退けるを能き相手と思ひ諸鎧を合せて追進ませと呼びしに印牧も名ある勇士なれば取つて返へし堀切のありけるを前に當て手綱かいくり待懸る飯野權兵衛福岡與四郎も取つて返へし堀切を隔て鎗を揃へて待懸たり横山三郎馬より飛下り鎗取伸べ印牧と鎗を合す金澤勢の中より半田源太郎三輪助右衛門援來り半田は福岡三輪は飯野と鎗を合せけるが各々堀切を前にして突合けるはどに互に勝負は付ざりける之を見て金澤方五騎十騎駈付大勢になりて進みよる越中方も亦馳付き大勢になりて鎗を始めんとせしに寺島牛之助小島甚助馳來り采幣を揮ひ馬を乘廻はし兵を纏ふて引取れば金澤方も相引になり鎗を合せし敵味方六人も互に引て立別れけり横山三郎手負けるが勝負を決せざるを殘心に思ひしなり此役に金澤松任の軍勢敵の首を獲ること百八十三級利家公利長公の先手蓮沼の勝負知れざれば使者斥候を走らすること櫛の齒を引くが如く斯る所へ先陣村井又兵衛尉敵を追拂ふて引來り合戰の始終を申ければ利家公利長公感心し給ひ長賴力を盡し十死一生の軍せしかば數ヶ所瘢を負ふて流るゝ血は鎧を染め緋縅の如くになり刀の鞘も碎かれ羽織に立矢は蓑毛の如くなれば諸人目を驚ろかし感せぬものはなかりけり是より利家公利長公金澤へ凱旋し給ひ村井が戰功を感賞し二千石秩を增與せらる山崎近藤を賞せられ若干の祿を與へ其餘永田平野河村以下の蜚食祿或は太刀良馬又は黃金等賞賜あり時に片山內膳已が功を諾士に向つて自讚せしかば利家公笑はせ給ひ汝村井が如き戰功あらば何ほど自負するぞと宜ひ片山も之に信服してぞ退さける

○成政鷹巢出張の事

同年三月廿一日の夜成政軍勢を卒し加賀の國へ一里餘蹈入り鷹巢に出張し民屋を殘らず燒拂ひ男女老稚の嫌ひなく四五百人を斬殺せり是は蓮沼の返報とぞ聞へし郷民等急ぎ金澤へ注進せしか

ば利家公聞き給ひ敵に足をためさせてはあしかりなんと有合ふ小性馬廻の侍五六十騎にて戦かに螺を吹かせ城を打立急ぎ給ふ已に卅丁計を過ぎて夜はほの〳〵と明にけり向ふを屹と見給へば十丁ばかり隔て人数大勢群りたり敵はや爰まで出張せしかと驚きしかと見給ふに金の槌に赤き暖簾の馬印は村井長頼にてありける利家公早くも出たる哉と感じ給ふ是に續て不破彦三多野村三郎四郎片山内膳もありければ利家公大に喜給ひ今朝の先陣は我なりと思ひつるに圖らず汝等に奪はれたりと戯れて急ぎ給ひ遂に鷹巣に着き給ふ然るに佐々が先手早引取しを村井不破道さじと追懸て喰留る佐々平左衛門尉福岡與四郎嶮岨の地を前に當て金澤勢を待懸たり加州の先陣村井不破士卒を下知し壹人も殘らず討取れと大音揚げて突懸る成政の兵鎮西九郎强弓を曳て忽ち四五騎討落しければ金澤勢後足を踏めり折しも佐々福岡下知して咄と突懸り敵味方入交り火出づる許りに戦ひけるが疲れて相引にぞなりにけり鎮西九郎は何卒利家公に近付き唯だ一矢に射殺さんと始めより先手へ出て覗ひしが軍終りければこは殘念なりと山を走り利家公の旗本押通る道の先へ出て小川を隔て柳連なる陰に潜れ今や遅しと待懸たり去程に利家公の旗本嚴重に徐々と引返へさる鎮西九郎闘をはづさず弓れつ取り覗ひすまして放ちけるが如何したりけん矢はれたて利家公の馬の鎧にはつしと中り鎧は割れ箙は碎けたり利家公を始め馬廻の侍大に驚き騷ぎ此邊に敵ありとて若な柳樹見かけて走向ふ九郎元來矢繼早なれば乙矢射んと易かりしかと是まで百に百矢を射るにはづさず然るに今ま射損じつると利家公は天運にかなひたる大將かなとて獨言し逃去りぬされば此鎧今に加州侯の秘藏たり斯て双方歸陣あり富山にては平左衛門與四郎が戦功を感じ賞賜ありけるとぞ

○成政遊樂の事并に菊地伊豆守の叛心

佐々成政は富山に櫻馬場を造らせ茶店を搆へ煖風乾坤に遍ねく花は梢に滿ちて雲の如く霞に似たり此時節成政櫻の馬場に出で諸士をして馬を駈させ或は茶樓に入て茶を點じ又酒宴遊興さまゞ〳〵にて諸士を慰さましむ是れ去年よりの軍勞に謝せんが爲めなり諸氏皆な近來の戦苦を忘れ興に入りて熟酔し謠ひ舞ひ遊びしなり成政も異風なる出立にて所々の茶樓を歴覽す其結搆金張付極彩色の鳥獸の畫或は山水の畫金梨子地或は黒塗の材木を以て建つるもあり又た柴を折つて庵を結び松の住竹の網戸の物侘びたるもありて風流辭に盡しがたし爰にても酒宴を設け種々の珍味佳肴を陳ねて興じ誠に仙遊も是には過ぎしと思ふ計なり時に成政菊地伊豆守を召び盃をさしけるが菊地盃を戴き凸に酒をうけ飲盡して盃を又た成政へ献じ已が帶びたる短刀を成政へ進らせ是は謙信よりも賜はりたる紀新太夫の名刀にて候抑も謙信は北地數ヶ國を討從がへ威名を天下に輝され候君も亦た北陸七ヶ國を管領し武威を遠近へ震はせ給ふべしと賀しければ成政忽ち面色を變じ大に怒り貴殿は老ひ惚れたるか我何ぞ謙信に劣らん謙信信玄天下に名を得しかども國を多領することを得ざりき我七ヶ國を領して本望とせんや我天下を得んこと掌の中にありと磊たと白眼で言ければ菊地口惜くは思ひながら堪忍し某老衰し且つ沈酔にて前後を亡し候と云ひ近臣等も之を宥め君の英才雄畧に誰が及び候はん天下を掌握し給はん事何ぞ疑ひ候はん菊地殿も

其時は一國を拜領し給ひて老後の榮曜を極め給ふべしと取成しければ成政色和らぎてそれより又酒宴時を移し日西に傾きければ成政歸城あり皆々も從ふて家に歸れり斯くて菊地伊豆守阿尾城に歸り郎等を集め申しけるは今日成政大に我を辱しめたり我甚だ之を憤ふれり即座に渠と指ちがへんと思ひしかども堪忍したり成政天下を掌握せんといひしは時勢を知らず殊に其器にあらず片腹いたし實に愚將といふべし其上戰毎に勝利なく佐々の家運もこゝに究まれり熟々思ふに利家は智勇兼備殊に去年より寡を以て衆に勝ち成政の及ぶ所にあらず且又羽柴秀吉武威日を逐ふて熾んに誰か之を仰がざらん佐々滅亡せん事遠からずよつて我が志を前田殿へ通じ此憤りを晴らし又子孫の後榮を謀らんと思ふなり我元佐々が臣にあらず數代阿尾城の主たり成政當國を領せしによつて幕下に屬せしなり今背くとも不義といふべからず汝等如何思ふぞと云へば郎等聞て前田殿の武威北陸にさかんなれば佐々の破滅近きにあらん急ぎ前田殿へ從ひ給へ左あらば御家の繁榮疑ひあるべからずといひしに菊地大に悅こび頓て計畧をめぐらし加州富田治部右衛門方へ使を遣はし某年來志を利家公へ通ずといへども居城阿尾は佐々が領なるゆゑ心ならず幕下に屬し候なり今より後は前田公の旗下に屬し忠戰を勵まさん願はくば此地へ御旗を寄せられ候はゞ某案内を仕り候へしと云ひ送りければ富田此事如何あらんと思ひ村井又兵衛尉に謀かり又村井と共に登城し此よし申上ぐれば利家公聞給ひ若し菊地が謀畧に陷らば天下に笑はれん汝等先家人を遣はし渠が眞僞を伺ひ知りて誓約すべしとて兩人夫より郎等を遣はし菊地が心底をよく知りて利家公へ申上げ即ち附屬を許されけり是によつて四月二日俱利伽羅を攻むべしと陳觸あり金澤を打立ち給ふ先陣は村井又兵衛尉長頼二陣は片山内膳岡島喜三郎三陣は原隱岐守前田宗兵衛尉多野村三郎四郎高畠九藏以下段々に次第を守つて押出せり然るに津幡へ着城し是より六千餘の人數を師ひ俱利伽羅を右に見て末森飯山の間より山路を歷て阿尾城に向ひ給ふ菊地伊豆守嫡子十六郎兩人僅か人數五十計にて馳來り謁しければ利家公喜色あり夫より軍勢所々乱入し民屋に放火す森山城神保安藝守氏治急ぎ富山へ飛脚を遣はし斯くと告げれば成政大に驚き頓て森山へ馳來り菊地が叛いて敵となりぬるを聞き甚だ怒りければ神保聞さん候菊地が不義言語同斷なり唯々加州勢と一戰に雌雄を決せられ候へといへば成政之に同じ已に軍を進めんとせしが勝利あるべからざるを察し富山へ引返へせり利家公は前田宗兵衛尉片山内膳高畠九藏鐵炮大將小塚藤十郎長田權右衛門等千餘人を以て阿尾城を守らしめ菊地父子は五六丁去りて館を造り居らしむ利家公の惣勢は金澤へ歸陣し給ふ

○鳥越城攻の事

前田利家公諸將を集め今度菊地父子降參せしなれば此上は前に取られたる鳥越城を攻め陷さんと下知あり皆一同に仰尤に候と申せばさらば其用意せよとて同四月八日に前田利家公利長公大軍を率して金澤を討立ちて鳥越に押寄せ近邊の山嶺に登り城攻の事を議し給ふに此城要害堅固にして攻ひるに甚だ難し假令攻陷ちても味方三分一は討たるべく唯々敵を詐り引出し皆一戰に攻亡ぼし候はんと申ければ利長公御父子も此議然るべしとて先づ足輕を遣はし鐵炮を打入れんとす城中よ

り之を見て敵の寄る樣子を見積り來れと斥候を出す寄手の鉄炮頭之を見て駈向へば斥候三人に郎等十八人扳連て切つて懸る寄手も互に追返しつ相戰ふ利家公の將小塚藤右衛門原田又右衛門上坂又兵衛等が足輕大浪の打つが如く鬨を揚て切入れば城兵寄手のかさひを見て逃げるを遁さじと追かけたり城將久世但馬守之を見て速かに敵を追拂へよと下知しければ早雄の若侍五百餘人城戸を啓き突て出手痛く戰ひければ寄手忽ち追崩され立足もなく逃げるが利長公の旗本へ崩れかゝる利家公山の尾崎に備へ給へけるが城兵の戰勝を見て筬本の若者已に寄せんと進めり利家公大音揚げ筬本の勢を制して懸られず此故に敗兵愈よ力を失ひ四方へ逃たり利家公大にわせり味方早く鎗を入れよあの勢は崩るゝと宣ふ齊藤形部德山五兵衛入道側にありけるが只今鎗を入るゝと見ゐ地煙大に立つて候と申す利家公獨り身を悶へて山崎はなさか鎗を入れよと下知あれば山崎勝兵衛長德鶏卵の甲に白紙子の脊に朱の丸付きたる羽織に鳥毛の棒の指物をさし馬印を押立て大音揚げかゝれ〳〵と自から鎗を入れ白眼になつて突戰す續いて半田源太郎神尾圖書三輪主水鎗を入れて各敵を突墮す佐々方馬廻頭杉江彦四郎近所の城番なりしが加州勢烏越城を攻むると聞き援げんとて來りけるに金澤勢の中に九里庄藏とて利家公の小性ありしが其頃勘當を蒙り蟄居しけるが此度忍び て爰に來り素肌にて進出で彼杉江に渡り合ひ遂に引組で谷へ落ち上を下へと返へしけり杉江は生得大力なれば庄藏を取て押へ首を搔んとする處を庄藏下より杉江が草摺の下より二刀指通し疼む處をはね返し終に杉江を押伏せたり去れども息切て首を取べき精力なければ片山内膳が郎等伊藤十藏走來り庄藏を押除けて首を討取り利家公の實檢に供ふ越中の野間兵部も士卒を帥ひ進來たるを山崎長德が臣味島六左衛門力戰して追拂ふ山崎長德猶ほ眞先懸て突合ひければ此手の侍必死となり今日を限りと戰ふほどに野間兵部を始めとして七騎まで討取りければ敵崩立ち利家公遙かに之を見給ひ山崎が働を見るや打勝たり見よや〳〵と手を拍ちて宣ふ諸軍勢山崎が軍功者にしてよき塲を合せ鎗を入たり感とせざるはなかりけり越中勢は杉江野間以下武切者二十七人討死しければ叶はじとや思ひけん城中へ引入しかば利家公も軍勢を引揚て金澤に歸陣し給ふ斯て諸士の戰功を撰ばれ山崎勝兵衛尉に食祿千石黄金三十兩小袖一重賜はり此度の軍功超倫絶類感賞するに餘りあり汝が武勇にあらずんば爭でか此戰ひに勝事を得ん我此大功を忘れずと宣ひ諸士皆な羨まざるはなかりけり又伊藤十藏が擧動侍の道にあらずと大に怒給ふ九里庄藏には鞍置馬を賜はる且此度の功によつて勘氣も許され御感を蒙り面目をぞ顯はしける佐々成政も諸士に賞を行ひける中にも佐々平左衛門尉前野小兵衛に各采地二千石を與へ福岡與四郎には良刀黄金卅兩を與へけるとなり

○成政軍評議の事

佐々方伊香子四郎兵衛米市塲上野村に居り勢を集め威を震ふよし聞へじかば末森城奥村助右衛門永福諸士に謀り夜深軍勢を遣はし不意を討てり四郎兵衛を始め大勢周章狼狽して逃けるを此處彼しこに追詰め四郎兵衛尉を始め多く討取りけり此よし加州へ注進ありければ利家公聞給ひ奥村へ感狀を賜はりける去る程に佐々成政は伊香子討たれしと聞へしかば功臣を集め偖も末森の戰ひ以

來味方戰ふ毎に利を失ふ其上菊地は叛いて敵となり國民は前田が爲にしば〳〵侵掠せられ困苦せしむること是れ我大なる恥辱何事か之にしかんや依て我謀を廻らしけるに萬死一生の軍さして雌雄を決し讎憤を晴さんと思ふなり然る時は鳥越俱利伽羅の兩城は富山の藩屏樞要の所なりといへども之を捨て佐々平左衛門尉三千五百餘にて貴船城を守らせ前野小兵衛尉二千餘にて礪波城を守らせ神保父子は四千五百餘にて森山城を固く守り丹羽權平は越後を押させ其餘の諸勢を富山に落みなは加州勢小矢部川を渉つて深く働來るべし敵を思ふ圖に引入れ我壹万餘の兵を卒ひ富山より討つて出づべし時に森山貴船礪波の城より一同に討出で敵を前後より夾み討たは敵を塵しにせんと思ふなり汝等如何と申されければ諸將承はり御賢慮の如く實に良策なり此上あるべからずと一同に申ける去るに依つて鳥越俱利伽羅の城を毀ちて富山へ勢を引とりける然るに利家公は智慮勝れたる大將なれば敵の計畧を豫め察し深く働き入らず成政案に相違してぞ見へたり斯て利家公は今石動山に城を築き舍兄前田右近秀繼同嫡子又次郎をして守らしめ近藤善右衛門尉岡島喜三郎原田又右衛門平野五郎右門を俱利加羅に籠置き又今石動邊の諸民を撫愛し金銀米穀を與へ給ひしかば民悉く利家公に懐き慕はずといふはなし故に利家公の威勢日々に盛にして佐々が威光月々に衰ろふ去れども富山には名高き武士多く諸國より集り居れり殊に成政は軍馴れたる强將なれば容易に亡ふべしとは見ゆず菊地父子加州へ降りしかば惡しと思ふ人やしたりけん菊地が門前に口合の一首を札に書き立てたり

敵の軍皆武勝と菊地との戰ひ負はそこに伊豆〳〵

菊地は九州菊地肥後守武光が末葉にて人も尊敬したりけるに差したる武功もなく加州方佐々方に數々勝ちければ勢を見て降參しけるを敵も味方も彈指して謗れりとかや

○今石動合戰の事

去程に成政は敵を領國へ引入れ一時に勝敗を決せんと所々の城を捨て富山へ勢を引入れしかども利家公良將なれば能く敵の機を察し敢へて深く働入給はず今石動俱利伽羅兩所に砦を築き軍勢を籠め置き給ひければ貴船城佐々平左衛門尉礪波城前野小兵衛尉敵に境を奪はれ安からず思ひ五千餘の勢を卒ひ五月中旬小矢部川を渉つて未明に今石動邊に押寄せ民屋を放火しければ前田右近秀繼嫡子又次郎人數千五百を從がへ馳せ出で無二無三に突て懸り敵も惣懸りに旌旗入乱追つ返しつ戰ふたり前田又次郎は十九歳なりける頃隱れなき大力なりしかば物〻しや何ほどの事あるべきぞ碌〻たる愚將ともに浮世の暇を得さすべし續けや者共と眞先に進んで敵中へ駈入り縱横無氣に薙立て喚叫んで戰かへば平左衛門尉が先手の勢突立てられ忽ち二十騎計り討たれ叶はずとや思ひけん揮と引退く二陣にありし前野小兵衛尉すかさず新手を入替へ前田秀繼の先手の横を打ち息をも繼がず戰ひければ秀繼の人數崩れ立ち個强の侍十餘騎討たれ雜兵は數を知らず討たれけり時に近藤善右衛門尉岡島喜三郎原田又右衛門平野五郎右衛門等千餘人俱利伽羅の城より討つて出で横合に突きかゝると雖ども勝に乘りたる越中勢串ともせず相戰ふ所に金澤方鉄炮頭平野五郎石衛門組

足輕を雁行にして林の隱より五十挺の鉄炮にて打立てければ敵兵しらみて進むを得ず佐々平左衛門之を見て前野小兵衛尉と入代はり新手にて戰ひしが金澤方大勢討たれけれども五郎右衛門が手より打つ鉄炮に越中勢辟易しければ平左衛門尉下知し軍は是までとて小矢部川を渉つて人數を引入れけり此役に佐々方へ討取首雜兵共に都て百十三級なり前田方へ討取首雜兵共に合せて六十七級なり佐々方へ首多く取りしかども芝居踏まざりければ金澤方にては勝軍なりといひ佐々方にても此の軍勝なりとて討取る首を親部川の岸に竿結渡し懸並べて平左衛門尉勝凱をぞ行ひける前田秀織は金澤へ使を馳せ合戰の始終を注進あり然るに同年六月羽柴秀吉公金澤へ使を遣はし去年より數度の戰爭疲勞言語に盡しがたし秀吉北國仕置の爲め發向すべきなれば其心得あるべきなり自今以後は越中へ働らかるべからずと堅く制止せられけり又た利家公村井長頼を巡檢使として越中へ遣はされしは越中所々の城を守る將及び士卒の怠惰あらんを勵まし給はんとなり

○氷見合戰の事

仝六月廿四日森山城神保安藝守氏治同嫡子清十郎軍勢を引卒し氷見邊に働き民屋に火を放ち時に炎天打續き殊に浦風吹度りければ猛火熾んになれり氏治士卒に向ひ今日の戰ひに菊地父子を討取らば望の如く賞賜せん汝等心を一にし敵擊つとも突くとも少しも疎まず進んで戰ひ一足も退くべからずとぞ下知しける阿尾城にありける前田宗兵衛尉片内膳高畠九藏菊地伊豆守父子氏治が阿尾城を攻むると聞き皆いへるは此城邊を敵の馬蹄に懸けさせん事殘心なり急ぎ馳向ふて追散らせと二千餘の勢を帥ひ阿尾城より討ち出で已に神保が勢と喚叫んで相戰ふ暫ばしの間に敵味方各〻六十餘騎討死せり去れども神保は大勢なれば阿尾城の勢戰ひ負けて引色に見へければ金澤の鉄炮頭小塚藤十郎組の足輕を岡に登ぼせ鉄炮玉込めはやく群がりたる森山勢の中へ雨の如く打入りしかば少し猶豫して進み得ず神保氏治大音揚げ葉武者どもに目を懸るな菊地父子を討取と下知すれば士卒皆扇の紋の旗を目懸け擒にせんと進みける阿尾城の諸將菊地を討たするものならば面々の恥辱なりと懸隔て〳〵戰ひける菊地父子儕は今日の戰我等父子を討たんとの事なるかと足懸りよき所へ引退くを神保が勢之を見て遁がさじと究てかゝれば菊地父子が勢立足もなく崩れけり之に引立てられ前田片山高畠が勢も亂れて敗走す神保が勢勝に乘じ追懸け闘を作つて攻め討ちけり時に村井又兵衛尉は利家公の命にて境目の數城の怠慢なき樣に戒め巡檢せしが三百餘の士卒を從へ阿尾城へと志ざし來たりしが遙かに阿尾城の方を見遣れば合戰ありと覺へて鉄炮の音矢叫びの聲頻りに聞ゑ馬煙り夥たしく見ゑ長賴身を悶へ戰終へなば悔るとも及はじ乘皆急げとて馬に鞭を加へ飛ぶがごとくにして戰場に馳着き直に士卒に下知し横に鎗を入れける神保が勢は逃ぐる敵を追ふて備へを乱せし時なれば村井が勢を支へがたく殊に金の槌の馬印を見て例の金の槌ぞ打碎れてあやまちすなといへる程こそあれ色めき立つて見へし處を金澤勢惣返へしに返して戰ひ森山勢敗走す追討ちにするほどに貳百餘人討取れり已に二里過ぎて中坂に至り是より難所なれば敵取つて返へさば味方多く討たるべし早く勢を引取れと爰に追止め引取れり今日の戰ひ始めは神保方勝なれ

ば討取る首武百八十餘級加州方へ討取首八十三級村井を得て神保勢大に敗走せり此時討取首都合武百八十餘金澤へたくり軍の始終を注進しければ利家公大に感じ給ひ各々功ある者に賞賜あり又た村井長頼速かに馳着き味方の敗軍を援け守返し勝を得しこと其功莫大なりとて太刀一腰駿馬に鞍置て賞賜せらる

○豐臣秀吉公越中へ發行の事

羽柴秀吉は武威天下に震ひ終に兵馬の權を執つて今年春内大臣に任じ正二位に叙し給ふ時に阿波讃岐伊豫土佐の領主長曾我部土佐守元親を退治あるべしとて御舍弟大和大納言秀長猶子近江中納言秀次を大將として數萬騎を差向け給ひ又自ら進發し四國を攻亡さんと議し給ひしが長曾我部敵しがたく降を乞ひしかば早速四國平均に及び秀長秀次歸陣し給ひけり秀吉公此上は北國に發向し佐々成政を退治すべしとの用意頻りなり此より越中へ聞ゑ成政越中へ諸將を集め此度猿冠者多勢を以て當國を攻めんと議すよし是れ我が浮枕此一舉にあり今にも攻來らば百戰して雌雄を決せん若し叶はずんば城を枕とし討死せんと思ふ汝等如何とありければ佐々平左衛門尉山下甚八郎進出で夫れ良將は時勢を知るを第一とす然るに君時到らざるに兵を擧げ給ひしゆゑ功ならず却つて禍ひをまねかれ候今秀吉の威勢天下に震ひ四方服從すること水の下れるに就くがごとし誰か能く是を禦ぎ候べき然るに今秀吉に拒み給ふは累卵よりも危ふし當家の滅亡せんこと必せり急ぎ信雄卿へ御頼みありて秀吉へ不義を陳謝し給はゞなどか宥免し給はぬ事の候べきと云へば成政も理に服しさあらばとて兩人の言葉に從ひ北畠信雄卿の方へ同年八月上旬使を遣はし秀吉公へ降參のことを申通じ頼まれけり去る程に秀吉公は大軍を帥ひ八月十八日に金澤へ御着陣後陣は猶越前北庄にあり利家公かねてより奉行人を遣はし路次を修め斷へたる橋を架し待給ひければ先づ城中に迎へ入れ奉り珍膳美味種々の饗應を盡し京都より猿樂を召下し能興行あり秀吉公喜悅斜ならず慰め給ふ時に秀吉公の仰には近年越中にての働らき父子の功莫大なりと御感賞あり其れより諸將を集めて軍の評議をぞし給ふ斯くて富山の使尾州へ至り信雄卿に頼みの事達せしに信雄卿之を憐れみ給ひ瀧川下總守勝雅土方勘兵衛尉雄久を使として秀吉公金澤城に在まし給へば兩人爰に來り信雄卿の仰せを秀吉公へ申し述べける成政勢盡き予によつて降を乞ひ願くば渠が日頃の罪を宥免ありて一郡を下し置かれなば永く異心を捨て忠勤を勵み候べし御哀憐を加へ給はれとありければ秀吉公聞き給ひ勸善懲惡は將の專要とする所なり秀吉が此度北陸に働くは成政を攻滅して叛人の戒めとせんと思ふなり今成政が罪を宥しなば世に叛人絶ゆべからず然るうへは誅伐せずんばあるべからずと怒り給ひ瀧川土方力なく尾州に歸りけり

○金森長近越中へ出陣の事

飛州金森五郎八長近天正十三年八月羽柴秀吉公より使を以て越中領主佐々成政逆心にて近來加州前田利家と合戰に及び勝敗未だ分ぬず何とぞ越中退治として秀吉追付上方を出馬せしむる條貴殿も早速越中へ攻め入り申さるべきとの事なれば長近承はり此頃飛州も三木休庵入道は佐々木の支

流多賀太郎が後胤にて殊に休茂は又齋藤山城守入道道三が婿なれば美濃飛驒兩國に武威を逞ふし金森家を傾けんと謀り國中靜ならずと雖ども秀吉公より催促なれば八月上旬金森五郎八長近廣瀬兵庫頭宗直鍋山豐後守同弟左近太夫牛丸左馬介同又右衛門人數貳千餘飛越の境太長谷水無村に打ち入けり又長近が養子長屋喜藏丸可重人數千餘を卒し河尻備中守を先手として野々俣口より馬を入れ二ッ屋口へ攻め入り此邊より村々を放火し遂に長近可重一手になり三千餘勇み進んで神通川を渉り鹽野へ軍勢を押出す此事富山へ早く聞へけれども城中より人數を外へ出さず一城に蒼みて勝負を一時に決せんとの軍議なれば戰はんともせず金森も未だ秀吉公の御着陣なければ鹽野より深くは働き入らず陣を張て上方勢の來たるを待ち居たり

○上方勢富山城を攻る事

斯くて秀吉公は金澤の城に於て軍議已に決し先手五萬餘を二手に分け一手は俱利伽羅より押寄せ一手は海濱に傍ふて伏木に至り兵船數千艘に取乘りて水橋邊の浦々へ着き富山城東の方より攻め入るべきとなり秀吉公旗本二萬餘金澤御出馬將士の馬物具光り耀き其行粧目を驚かせり俱利伽羅よりの寄手は小矢部川を渡りて敵地へ備を押もといへども敵皆な富山へ蒼ひもゑ易く安寧坊へ進みけり秀吉公旗本は吳服山に陣を据へらる山々谷々五六里の間寄手滿々たり蓋は數千の旌旗風に飜がへり夜は遠近の篝猛火天を燒くかと見ゑ成政諸軍を富山一城に蒼み下知しけるは今度北島殿を賴が へり夜は遠近の篝猛火天を燒くかと見ゑ成政諸軍を富山一城に蒼み下知しけるは今度北島殿を賴み秀吉へ和を乞ひ候へば敵寄せ來るとも軍すべからず若し秀吉許容なきに於ては籠城し十死一生の軍して味はざる時は腹切らんとぞ議せられけり斯くて諸軍勢安寧坊まで押詰ければ國中の人民騷動し資財雜具を持運び老たる親を負ひ幼を抱き山林へ逃隱る秀吉公聞き給ひ諸軍勢の狼狽を禁じ民罪なく虐げざる由を告知らせ給へば諸民立歸り各々業を務め安堵の思ひをなしにけり利家公は安寧坊の坂の上に向け城を築き富山城を眼下にして每日斥候を神通川の邊に出し城中を窺はしむ川向の岸には富山方より櫓を建て塀を懸け寄手川を渡さば討ち取らんと弓鐵炮の者を置き時々大筒を放つてもだんなき躰なれば寄手川を渡さんとする者なし又水橋よりの寄手は浦々に着船し夫より民屋を放火す富山より煙夥しく見へけれども敵東よりも寄るとは思ひもよらず其あたりの民周章騷ぎ逃け來りて敵浦々に滿々たるよし云ひければ城兵大に驚き色を變せしかど成政かねて和睦の心なれば城戸を閉ぢて軍兵を出さず寄手も亦深くは働き入らず時に寺島牛之助小島甚助兄弟成政の前に出で申しけるは北島殿を賴み和睦なされんとの事はか〴〵敷きことも候まじ縱令一旦和睦ありても行末覺束なし今秀吉公大軍なりといへども當城に籠る軍勢二萬餘も候へば何の難き事の候べき此上天下の勢を盡して攻むるとも軍のならぬほどの事は候まじ君我等が謀ことを用ゐ給はゞ今夜密かに御出馬あるべし神通川の上を渡たし佐々平左衛門尉前野小兵衛尉神保安藝守等壹万貳千の人數を以て安寧坊の敵に當りて山下甚八郎三千にて當城を守らせ水橋の寄手を防ぎ今曉頃に平左衛門尉前野神保等い人數川を渡たし前田公の備へ無二無三に突き入り合戰を始め候はゞ諸軍勢多く先手へ集り前田公を援けて戰ふべし其期を見合せ君長澤より五千人を從へ秀

吉の旗本へ切つて懸り給ふなれば我等御先手仕つり十死一生の戰ひをなすべし秀吉公思ひ寄らざれば十に一つも秀吉を討ち取ることもあるべし左なくとも旗本崩れて敗北せば惣敗軍となり思ふ程に追討たば此後の軍心易く又味方へ參る人も多かるべし若又味方勝利なくば是までの御運と思ひ御腹召され候へ死すべき場を知らざれば恥を後代に殘すこと世にためし多し得と御賢慮あるべしと理を盡して述べけれども成政野も山も海上も敵ならざる所なきを見て今は氣力も衰へ汝等がいへるは理なれども北島殿へ賴み置きたれば今一左右を見合はせ若し事ならずんば其上にては申す通りの働きすべきとて用ひざりしこと愚かなれ

○成政降を乞ひ秀吉公宥免の事

瀧川勝雅土方雄久尾州へ歸り秀吉公成政を宥恕なき返答ありしかば信雄卿聞き給ひさぞあらんと思ひつるとて重ねて兩人を遣はし成政盟約を變し質とせし女を棄て叛逆せし事不義暴惡の擧動言語に絶ね候なり然れども君の寛仁にて渠が一命を宥免し給はらば辱かるべく是れ信雄が願ふ所なりと强て申し送り給ひしに秀吉公聞き給ひ成政不義の罪重ければ首を刎るともあきたらず且渠を誅伐せずんば天下の叛人何を以てか戒めとせん然れども信雄卿再往の賴みも默止がたく此上は渠が命を宥恕すべし去りとも前田同心なくてはなるまじとて頓て利家公を召び斯くと告げ給ひ成政を生ずも殺すも利家の所存に任すべしとわりければ利家公古傍輩の事に候へば何卒一命を宥免し給はれとわが衆皆な利家公の寛容大度を感じ合ひ秀吉公それより成政の罪科を免許のよし仰せ出されけり去る程に成政は降參の願ひ成りしかば天正十三年九月五日祝髮縞衣の姿となり城を出で秀吉公の本陣へ參じけり秀吉公かねて利家公の陣中へ命あり成政降人となり陣中を過る時皆一同に咄つと笑ふべしと下知したり斯くて成政利家公の陣所を過ければ前後の陣より一同に咄と笑ふ成政が心の中さぞ口惜かるらめとれしはかられて哀れなり斯くて吳服山の本陣に至り膝行して秀吉公に拜謝せり秀吉公御言葉も懸け給はず同九日秀吉公陣拂し御歸馬成政を供せられ今石動へ御着其夜旅館の寢所へ成政を召され汝爭でか我が武威に當るべき吾甚だ汝が不義叛逆を惡むと雖ども殺すに忍びず赦免せしむる條越中四郡の所砥波射水婦負を取りわけ新川郡を與ふるなり經界を正しくして利家の命に違ふべからずと宣まひて御盃を給はりしかば成政忝き言を拜謝し富山にぞ歸りけり

○秀吉公姓名及越中三郡利家公拜領幷に成政肥後國へ移る事

斯くて秀吉公越中を去り九月十日金澤城に入らせ給ひ北陸平均の大功偏へに利家の武略なり越中三郡を知行すべし粉骨を盡し給ふに三郡の增秩はさぞ不足にあるべし秀吉初め羽柴筑前守と號し武名を天下に顯はせり此度の賞として我姓名共に讓るべし今より前田又左衞門を改め羽柴筑前守と名乘長子孫四郎利長も羽柴と稱すべし勇智足下に劣らず去年よりの戰功世の耳目を驚かせり思ふに越中三郡は利長に讓られよと宣ひて自筆の御書を給はりけり誠に姓名共に讓り與へらるゝこと古今希なる事なりと諸人羨まざるはなし利家公舍兄瀧人利久入道に久敬對面せざればとて召さ

れ數度の功勞を賞し給ひ御小袖道服を給はり其外戰功ある利家公の臣に賞賜あり長光腰物黃金百兩胴服壹つ村井又兵衛尉へ黃金百圓づゝ道服不破彦三前田右近前田又次郎へ黃金五拾兩づゝ胴服壹つ長九郎左衛門尉奥村助右衛門尉前田五郎兵衛中川清六へ右之外侍十六人に黃金二十兩づゝを賞賜あり是より秀吉公金澤を去り御歸洛あり孫四郎利家公松任城より越中森山城に移り給ふ越中金屋村に城を築き片山內膳を守らしめ同郡安田村に城を築き岡崎喜三郎を籠め置かる兩城共に山田川を帶びて富山城の押へなり又成政は富山城に任すといへども新川一郡を領し小身となりたれば其年の冬より翌天正十四年の春夏新參の諸士は申すに及ばず譜代の侍まで假を乞て他國せる者多し已に秋も暮れ冬にもなれば北地の常にて降り積む雪深く殊に兵亂の後なれば年も饑ゑて民に菜色あり成政も兎にかくに世の中をあぢきなく思ひ遣りて或日庭前の白雪を見て述懷の歌をよめり

何事もかはり果たる世の中にしらでや雪の白く降らん

秀吉公此詠歌を聞き給ひ哀れをたぼしめし御側の面々へ成政は信長公の舊臣にして數度御馬先にて御用に立ちしをかく小身となし置くこと本意にあらずと宣へば近臣之を聞き秀吉公は仁義ある君なりと感じけり同十五年六月秀吉公佐々成政を召され成政早速上洛ありければ陸奥守に任ぜられ肥後一國を賜る成政の面目桔木に花の咲きたる心地して頓て入國あり此時神保安藝守も同伴せり然るに肥後の國人成政を國主と仰がん事思ひもよらずとて一揆を起しける就中菊地郡の桑部其子有勳等逆心す成政之を取鎭めんとすれども能はず立花左近將監宗茂秀吉公の命にて馳せ向ふ然共容易ならざれば又淺野彈正忠長政を遣はされ立花を援け一揆を討ち滅し中國平均す時に加藤主計頭清正小西攝津守行長へ肥後の國を賜はり陸奥守成政は上方へ召れ攝州尼ヶ崎まで到りけるが爰にて切腹仰せ付られ其家斷絕せり成政肥後を領せし後越中新川郡も利家公へ御預け御裁許なり

○前田利家公昇進の事

天正十三年利家公越中過半領地と也ければ貴船城を前田右近秀繼に預けらる子息又次郎は今石動城にあり然るに同年十二月越中大地震尤も貴船邊甚しく城を毀ち右近夫婦壓死其外死人多し同十六年島津義弘退治として秀吉公御出陣の時利家公も御出馬にて岩しやくの城を攻陷し比ゐなき働にて秀吉公大に御感ありし也土方勘兵衛は成政降參の時信雄卿より秀吉公へ兩度まで使す渠れは利家公御外戚にて尾州犬山の城主也信雄卿の使役なりしが信雄卿秋田へ流浪し給ひ土方も浪人と也加州へ來ければ利家公此より秀吉公へ申し上げらるゝよつて秀吉公越中新川郡の內壹万石土方勘兵衛はに下さる今布市村月岡の邊にて今此所の米を土方米といふ上米にして堅牢なり又勘兵衛が弟大田但馬守と號す是も利家公の甥なれば利長公の代となり召仕はれ貳万石を領せり後命に背て誅せらる同十八年相州小田原陣に利家公北國の惣大將として關東の城七ヶ所を攻め落し給ひ夫より出羽奥州へ御發向天正十三年任官し給ひ打ち續き官位昇進あり從三位大納言に至り天下の執權を蒙らせられ秀賴公の御後見となり給ふ利家公時に又清花の家に準せられ家臣高畠石見守定吉中川八郎右衛門等諸太夫に任じ利家公御舍兄前田五郎兵衛尉子息孫左衛門長佐は播摩守奥村助右衛

門永福は伊豫守村井又兵衛尉長頼は豊後守長九郎左衛門尉逸龍は入道して如雲と號す片山内膳は伊賀守岡島壹三郎吉長は備中守青山與三は佐渡守近藤善右衛門は大和守山崎庄兵衛は長門守糟山三郎長和は大膳允笹原勘六は出羽守富六田左衛門は越後守小塚藤十郎は淡路守前田與十郎は對馬守となる斯やうに諸臣まで叙爵し前田家の威光旭日の天に昇るがごとく御治世萬々歳と祝しけり

○前田家勳績の事

前田氏姓は菅原菅亟相の後胤なり世々尾州に住し給ふ前田又左衛門利家公幼より織田信長に仕ふ天文二十三年公十四歳にして始て鎧を着し軍に臨んで勳功あり又た弘治二年織田勘十郎殺害せらる因て其家人乱をなし尾州いのうの戰あり勘十郎が小姓頭宮井勘兵衛公に向ふて矢を放ち其矢公の右の眼下に中る公すかさず鎗にて勘兵衛を突き伏せ其首を討ち取り信長の實檢に供ふ信長之を感賞し終に勝つことを得たり時に公十六歳なり又十八歳にして信長の近習となり信長の同朋十阿彌公に惡し公手自ら之を斬る信長甚だ怒り給ふ是より信長公へ言葉なし永錄三年五月十九日信長今川義元と合戰す公一番に鎗を入れ敵の首を取て信長に示す信長又言葉なし公退て其首を水田の中に投し又た敵の陣中へ入り首を捕て以て信長に示す信長猶は默然たり翌年五月十三日信長濃州森江に於て長井と合戰す時に公先懸して敵の首を取り信長に示す爰に於て信長言あり以て之れを感賞す其後信長より公へ赤母衣を給ふ公若年もゐ是れを辭す信長曰く歳若しといへども武に長と叛群の功あり辭すこと勿れと終に之を受く同八年九月十三日信長佐々木と合戰す江州箕作山の城を攻む公時に使として馳せ向ひ先づ敵の城門に至る敵城戸を啓き討つて出づ公鎗を合せ一番に敵の首を取る時に力戰して二ヶ所を傷づけり秀吉之を感じ其後しやらくの城攻を秀吉公と共にせり元龜元年四月廿六日信長朝倉中務大輔が籠る越前金ヶ崎の城を攻むる時公と福留平左衛門をして敵の先陣を見せしむ兩人鎗を合せ功あり同年六月廿一日信長江州淺井と合戰す柴田修理亮を以て先手とす信長又公をして柴田を援けしむ然る處信長命ありて柴田人數を引揚げ淺井の兵之を追ふ公返へして鎗を合せ追拂ふ故に柴田破れずして引取けり柴田大に悅んで公に拜謝す同年九月十四日信長攝州天滿を攻むる時深入して已に危ぶし公獨り殿して信長の危難を解く天正元年八月十四日朝倉義景沒落の時公越前とらね峠に於て二度鎗を合せ敵の首を取る同三年五月廿一日信長參州長篠にたゐて武田勝頼と相戰ふ信長始めて三千挺の鋏炮をわつめ武田方へ放ち打たしむ公佐々成政福富平左衛門伴九郎右衛門野々村三十郎等と互に下知し武田方を打ち拉しむ時に又公敵の將と言をかはし短兵急に接し力戰して右の脇下を傷け信長此勵勇を感ず同九年五月上杉喜平次景勝が兵越中魚津の城に籠る信長命あり公柴田勝家佐々成政等を以て將とし之を圍む景勝天神山に後詰し二三日あつて森勝藏搦手として信州より打つて出で春日山を攻めんとす景勝急ぎ越後へ歸陣す爰に於て魚津城中の將卒壹人も殘らず斬獲す同十年六月廿三日温井三宅能州石動山の衆徒と心を合せ荒山に要害を搆へ四千餘人出張す公荒山峠にゐて合戰大に打ち勝ち給ふ其後石動山の惡僧殘黨を催ほし再乱をなす時に公之を攻め自ら刺擊して打ち破り其首千餘級石動山の左右に梟す又

公の家人奥村永福末森城を守らしむ天正十一年九月十一日佐々内藏助壹万人を卒ひ城を圍む公後援として急に金澤より馳せて先づ津幡に到り三千人を帥て日夜となく馳せ同十三日曉に末森に到る利家公利長公と共に兜の忍びの緒を斷て必死を示し給ひ將卒之を見て皆な討死と定む公末森の後援をなし敵軍を打破り給ふ成政敗けて軍を引き加州の地より歸へる公成政加州を討たんことを疑ひ夜中海濱より馳歸へり同十四日の朝津幡に到る成政爲すことなく終に退いて越中に歸へる翌年秀吉軍を帥來て成政を圍み攻む公利家と先陣たり成政勢盡きて降を乞ふ秀吉時に公の功を賞じて越中國を賜ひ秀吉の仰せありて利長公に至り羽柴筑前守と稱し給ふ天正八年秀吉北條を伐つ時公と利長公をして信州碓氷峠より關東に入らしめ八王子松枝の城を拔く此外公攻城野戰武功多くして官位しば〳〵昇進し慶長四年三月十一日御逝去御年六十二贈從一位御諡を高德院殿と稱す

利長公初め利勝と稱す羽柴肥前守と號す信長公の姫君を娶る天正十三年成政と合戰す成政の勢鳥越城に籠る公之を攻め給ひ城兵も爰を先途と防ぎ戰ふ公手痛く攻めて終に勝利を得たり同天正十五年四月朔日秀吉築紫へ出陣公蒲生飛驒守氏郷と兩將となつて豐後かんしやくの城を攻む時に丹波少將副たり公と氏郷急に進んで之を攻め陷す秀吉甚だ感んじ天奏に達し慶長三年四月廿日中納言に任じ從三位に叙す同年公家督相續秀吉薨去の後五奉行竊かに野心をさしはさみ家康公に背く石田治部少輔叛逆顯はれ慶長五年八月三日公家康公の旨を承けて金澤より兵を發し加州大正寺城山口玄蕃允を攻め屠ふり山口父子の首を梟す此時に當つて公尤も忠戰功勳あり同慶長十九年五月御逝去御年五十三贈大納言正二位諡を瑞龍院殿と稱しける利常公初め利光と號す利家公の四男利長公の弟慶長六年將軍秀忠公の姫君加州へ御入輿大久保相摸守忠親青山常陸介忠成送り來たる公忠功あるによつてなり同十三年五月侍從に任ず時年十三松平氏を賜ふ筑前守と號す同六月二十八日家督御相續同十九年公二十二歳攝州大坂岡山先陣たり翌年夏再亂の時合戰に打ち勝ち深く城中に入て敵の首數千級を討取り神君へ獻ず同年閏六月十九日公參議に任ず且家老本多安房守横山城守長知等從五位下に叙す寛永三年八月十九日中納言に任ず從三位に叙す改めて肥前守と稱す萬治元年十月御逝去諡を微妙院殿と稱す

此間の事諸書によつて錄す故に異同多し疑ふ所もあれば敢へて自から正さず識者之を取舍せよ

○加能越三ヶ國拜領の事

越前一乘ヶ谷の城主朝倉義景滅亡の後天正三年九月廿三日信長公より越前府中拾万石を利家公佐々成政不破河内三人へ三万石餘配分兩井は其頃北の庄といふ柴田修理亮勝家に賜はる

時に利家公は前田又左衛門と稱し不破河内は彦三が先祖なり

同九年信長公より利家公能州一國拜領七尾へ御移りあり利長公時に孫四郎と稱し奉り越前府中に殘り居たり是れより先天正七年佐々成政へ越中一國を信長公より賜はり富山へ移る能州は畠山家衰へ家臣温井三宅遊佐等威を震ひ爭戰止むことなし時に謙信討伐温井三宅等越後へ奔す後又信長公より手を入れられ終に平均の上利家公へ賜はる又越中も越後と爭戰し是れも信長公謀を以て佐

々成政を道はさる同十一年秀吉公より利家公へ加州石川郡河北郡佐久間玄蕃允が跡加増として賜はり金澤へ移らる又利長公越前府中を返納し加州石河郡の内松任四万石を拜領し引移つらる

加州は長享年中一向宗門徒蜂起富樫之介政親を亡ぼして下間筑後法橋等逆威を震ひ國中神社佛閣を破却し天正年中まで八十七年本願寺領となる金澤に末寺を建て國政を執行はしむ信長公越前一揆を退治の後加州を攻め一向宗門徒を討亡ぼし越前吉崎に於て一揆の魁首一向宗の僧徒を殘らず死刑に行はれ佐久間玄蕃允盛政を金澤へ遣はさる天正十年信長公御自害の後秀吉公と柴田勝家不和にて合戰に及び佐久間盛政も柴田に與みしければ京都にて刑罰せられ其跡を利家公へ賜はる

天正十三年九月十一日秀吉公より利長公越中三郡礪波射水婦負拜領守山城へ御移り松任四萬石は指上らる

天正七年佐々成政信長公より越中一國を賜はり富山に居住す秀吉公御代に成政信雄卿と心を合せ秀吉公へ敵し加州前田家と合戰せり依て秀吉公越中へ發向成政降參後越中三郡取上げ上新川郡を前の如く成政へ賜はり利家公三郡を拜領せり是れ利家公拜領なれども大閤仰せありて利長公拜領せらる松任四萬石は上り越中の代官を利家公の臣寺西治右衛門へ秀吉公より仰せ付らる天正十四一ヶ年なり此時又左衛門を改め羽柴筑前守と稱す是れ秀吉公の舊名を拜領せし者にて成政富山へ移れる七年目なり同十五年筑紫陣の時成政肥後一國を賜はり新川郡は利家公御預りになり同年丹羽五郎左衛門長重筑紫陣の時若州八万石召上られ加州松任四万石下さる

同秀吉公御代慶長二年利家公大納言に昇進隱居にて加州二郡拜領越中一國は利長公能州一國は利政公へ讓らる

此年利長公中納言に進み給ひ羽柴筑前守と稱す同年守山は山城にて自由ならざるもゑ富山城へ移らる守山在城の間十三年なり今年堀左衛門督越前福井より越後を拜領し高田へ移る新發田へは小松の村上周防守越後本庄へは別喜右近其跡大正持ちは山口玄蕃父子七万石拜領能美郡八万石は丹羽長重へ加増にて小松城へ移り合ひ拾貳万石となれり

同四年閏三月三日攝州大坂に於て利家公逝去利長公其年金澤へ移らる

慶長三年大閤秀吉公大坂の城にて薨去其節利家公秀賴公の御後見なり翌年利家公逝去

同五年神君より加州能美江沼兩郡拜領又利政公御領能州一國此時召上られ三ヶ國一圓に拜領

此年石田治部少輔逆心濃州關ヶ原にて神君父子石田と合戰し石田打負け罰せらる大正持城主山口玄蕃父子石田に屬して出勢なし小松城主丹羽加賀守も勝負を見合せしゆゑ山口父子は切腹丹羽と和睦ありしも其罪によつて領知召上られ流牢其跡不殘利家公拜領

利政公御内室は蒲生飛驒守の女にて大坂城内に人質たり利政公も關ヶ原へ出陣なく利長公より廣々異見ありしも終に御出陣なく領知召上らる元來利長公拜領の内配分もゑ能州も利長公領に

て加越能共に全く領地となれり利長公母公の徒弟土方勘兵衛新川郡の内壹万石關東より加增後能州の内にて替へたり今の能州公領壹万石是れなり丹羽長重其後奥州二本松へ移り拾貳万石を領せり

神君御代慶長十年利長公越中富山へ移りて隱居し新川郡廿貳万石領知となる利光公（後號利勝公）小松に在城の處金澤城へ移り松平筑前守と稱せらる

慶長七年天德院殿入輿御婚姻

同十四年利長公富山在城の處御城幷に町不殘燒失射水郡關野に新城を築き同年秋成就移住の上高岡と改名あり普請中は魚津城に在留せられ高岡へ移りの時富山へは城代幷に町役人等金澤より來る同十九年五月二十日利長公高岡にて逝去高岡へ移られし後六年目なり

同年九月利光公加能越三ヶ國全く拜領大坂冬陣御勘同廿年夏陣大坂落城の後寛永十五年中納言に昇進せらる

家光公御代寛永十五年利常公加州小松へ隱居新川郡廿貳万石領知せらる筑前守光高公金澤にて家督相續八拾万石餘領知せらる次男淡路守利次公へ越中新川郡の内婦負郡一圓合せ拾万石分知富山城へ移らしめ三男飛驒守利治公へ加州江沼郡能美郡の内七万石分知太正持へ移らる

御判物寫

權現樣

加賀越中能登三ヶ國之事一圓に被仰付就ては守此旨可抽忠勤者也

慶長十九年九月十六日　　加賀侍從殿　　家康御判

時に家康公駿府に御在城大御所と稱す

秀忠公武州江戸に御在城將軍樣と稱す

台德院樣

加賀越中能登三ヶ國之事任今年九月十六日先判之旨永不可有相違者守此旨可勵忠勤之狀如件

慶長十九年九月廿三日　　松平筑前守殿（利常公なり）　　秀忠御判

大猷院樣

加賀越中能登三ヶ國百十九万貳千七百六拾石事任去る慶長十九年九月十六日同廿三日先判之旨全く可有領知之狀如件

寛永十二年八月四日　　加賀中納言殿（利常公なり）　　家光御判

嚴有院樣

加賀越中能登三ヶ國百貳拾万貳千七百六拾石之内加州江沼郡能美郡之内七万石越中婦負郡新川郡

の内拾万石能州四郡之内壹万石以上拾八万石餘除之殘百貳拾万貳千七百六十石幷に近江國高島郡の内兩村貳千貳百六十石餘如前に宛行全く可領知之狀如件

寛文四年四月五日　　家綱御判

加賀中將殿光高公なり

文照院樣有章院樣御早世故御判物無之

有德院樣

加賀越中能登三ヶ國百貳拾万貳千七百六十石之内加州江沼能美二郡之内七万百七拾石餘越中婦負郡新川郡之内拾万石能州四郡之内壹万石以上拾八万百七拾石餘除之殘百貳万貳千五百八拾石餘幷近江國高島郡之内三ヶ村貳千四百三拾石餘高百貳万五千石餘事宛行之代々之例領知之狀如件

享保二年八月二日　　吉宗御判

加賀宰相殿謙國院樣なり

右料紙大高檀紙壓なり

○利家公富山御居城の事

利長公慶長十四年富山へ御移り西は安養坊吳服より東は新庄水橋まで御家中屋鋪建つゞき町家は鵜川橋より鵜飼の川原磯部木町まで建並べり四年御在城の處鵜川邊栖卷屋彦三郎といふ者の家より三月十八日失火御城を始め過半類燒利長公千石町神戸清右衛門宅へ御避け三日滯留の後魚津へ御入城あり夫より關野に新城を築きて移轉せられ富山の山本清三郎支配となる此火災三壺記には慶長十四年三月廿八日武德編年集成には同年三月廿三日とあり土人傳へて三月十八日とす之を光殿寺燒といふ御家譜には同十五年三月とあり又馬場政乘が記には文錄三年秋利長公守山より富山へ御移り慶長四年まで六年御在城同年利家公御逝去にて金澤へ御入城同十年再び富山へ御入城同十四年富山燒失にて暫らく魚津城に御座なされ高岡に新城を築き御移つり富山に五年高岡に六年御在城同記に同十九年甲寅十月大坂御陣の時富山御城代は津田刑部といへり元和元年大坂落城此時六月高安次郎右衛門下人喜右衛門千人夫竹束持にて大坂へ出陣せしが銃炮に中たり歸國し皮肉を切りて玉を出せしと云ふ

神道川船橋は慶長年中懸りたるよし昔は木町の末通りにて船渡しなりといふ然れども慶長年中に木町末に船橋懸りけるや利長公御下知狀に小島民部當にて船橋小島町船頭共とあり利次公富山御入城の後寛文元年富山町改まり是れまで惣側町にて通りの鐵御門樞御門建惣側土居に松を植らる舟橋も一町ばかり上りしよし是木町より今の所へよりたるように見もれどもしからず舟橋舊記に橋は初めより今の所にて後一丁許上に懸りしかど公儀へ御屆なさもへ出來がたく本へ復りしとぞ又船橋北向は南に灣ひ家々並び合へり其前より東手傳町へ廻り夫より西の方へ通りありしが手傳町は此頃御亭の向ひにあり今の船橋向通りは田地にて小島高といへるよし其後北向の家を毀去り田地の所も直に通りとなり手傳町も今の所になりたるよし又慶安二年に船橋の銭鎖出來せし事も

舊記に見も

○利次公富山城へ御移りの事

寛永十六年淡路守利次公へ拾万石御分知せらる其中婦負郡にて六万石加州能美郡にて弐万石下新川郡浦山邊にて壹万六千八百石餘上新川富山邊にて御賄料とし三万貳百貳拾石村は小泉大町根塚布瀬羽根高田磯部なり寛永十八年十月中旬利次公富山へ入城其年春より家中引越の面々富田下總同右衛門近藤甲斐瀧川玄蕃松平久兵衛不破内記村隼人同勘左衛門那古屋藏人生田四郎兵衛岩田勘右衛門堀田左兵衛淺野將監三輪彌市右衛門堀才之助蟹江主膳富田彌五作秋山佐助入江權兵衛淺野五郎左衛門西尾五左衛門多羅尾勘兵衛山崎長兵衛其外小怪馬廻御徒御鷹匠各家作り美々敷繁華にて見へける新川郡は小松公御領なれども御父子の事なれば急に百塚に御城御取立ならざれば替地ありて居城せらる地子小物成は小松御馬廻一組にて才許せり

梶原左内橋本主殿兩人御小性にて嬖幸せられしが漸やく成長し各二十歳に及びける其頃速水助之丞といふ美少年召抱へらる然るに梶原速水も男色にて互ひに親しみ當時橋本主殿は御目付役を勤む又上田市之丞は初め梶原召仕への者にて梶原の取立により後立身して御徒となり小性目付役に上る舊暦三年二月中旬梶原速水しば〳〵忍び逢ひけるが世上に風聞しければ上田思ふに我梶原に恩わりといへ共役儀の重ければ此事言上すべきは當然なりいかゞせんと案じ煩らひ或時橋本主殿に談じけるが主殿申しけるは汝は梶原が取立なり我も梶原と同じく仕へし者なれば左内が難儀となるを愁ふ言上は無用と止めける其後市之丞思ふは主殿の言理なりといへども役儀なれば若し上聞に達せざるときは同罪を免かれずと頓て書付を以て申し上げる然るに利次公御思召もありける や何の御沙汰もなし其内橋本主殿より兩人の事を御聽に達しけるよし風聞せり然るに梶原速水も何となく御前疎々敷なりければ兩人推量し主殿の言上に疑ひなしとて夫より兩人主殿を恨みけり此事主殿は夢にも知らず我を惡むはあるまじき事と思ひ兩人是れまでの不義猶豫すべき事にあらずと覺悟し直ぐ書面にて御聽に達しける時に利次公梶原左内を呼出だし兩目付の書付を左内に下され汝不屈なれども小松公より他國者を抱ゐる事御制禁あるを用ゐず今汝等を罪せば聞へもいかゞなれば此度は赦すなり以後吃度慎むべしと仰せあり左内感涙に咽び御前を退出しけり梶原は母一人あり未だ妻子もなし家に歸へり母に向ひ橋本上田兩人我事を言上し憤懣涯りなし此上は兩人を殺し自害仕らんと存し候まゝ母人は京都へ御送り申すべし御用意なされ候へと云へば母聞て色をなし京都とは何事ぞ我も助太刀し其者共を打ち果し一所に自害せんに何の苦勞あるべきはやく事を謀り候へと勵ませり其時左内申しけるは御上より御沙汰にて廿九日には秋山志摩方にて主殿と我と和順の振廻といふ事なり招かる其節主殿を殺害いたす覺悟なり其以前に家内の埒を付けんとて召仕ふ男女に衣類金銀を與へ下宿せしめ明日山二上山大岩等へ參詣せよと下知せしに皆よろこび下宿せり斯くて廿九日にもなりければ速水助之丞左内家司上坂治右衛門掃除坊主林清等と申し合せ上田市之丞を呼びに遣はし市之亟來りしかば菓子酒などを出だし勸め其上にて左内は今度

我等の事を言上せる返報せん覺悟せよといひもわへず共に手取り足取り縄にて縛り錐小刀にて突き槌にて打ち鋸りにて挽きなぶり殺にし面の皮を剝ぎて庭へ投出せり少焉ありて晝時にもなりければ左内母に暇乞ひし秋山方へ行けり速水林清治左衛門等ゑ跡の事を賴み置けれは最早左内は秋山方へ行着き申すべし母人覺悟し給へとて小脇指を渡しけれは母脇指をうけ取て喉を突き貫き速水助之亟とゞめをさし茶の間の爐に死骸を入れ炭を盛り上げて火吹きれこし大概死骸の燒けたる頃乘て左内は治右衛門に案内せよといひ置きしもゑ治右衛門兩人に暇乞ひして秋山方へ參りける速水林清兩人殘り最早治右衛門は秋山方へ到り候はん家に火を懸けんとて茅に火を付け焰さかんに燒上る秋山方にては左内主殿兩人を振廻し相御伴す御徒大森五兵衛なりしが小歌の上手にて一上曲謠ひ酒盛も酣になり各の醉を催ふし兩人の宿意も打ち解けし躰に見えける浩る折しも左内家司坂治右衛門左内に逢ひたきよしにて來たれは左内立出づる治右衛門潛かに跡の始末は爾々といひけれは左内さあらは家に火を懸け申すべしと云て座敷へ歸り暫くして左内主殿庭先へ出で遊歩せしが左内屹となり今度の一件堪忍なりがたしと云ひさま脇指を拔き打ち懸かる主殿も心得たりと互に打ち合ひ共に深手を負ひ枕ちがひに倒れて死せり上坂治右衛門表に在りて之を聞き飛入る處を秋山大森兩人治右衛門を捕へしまりする折から火事ゞと騷げるはゞに秋山は直ぐ登城しけるに梶原が宅にて人多く馳せ寄る秋山馳せ行き視れは門を開き庭中ゑ酒樽二つならべ杪を立て速水は鎗林清は長刀にて門に入る者を上下嫌はず突き伏せ薙ふせ酒を酌んで息をつき又た來る人を

を突き落し死傷九人手負十二人とゞ聞へける富田右衛門尉給人馬上なり突きれとさる御徒松井清右衛門も討たれたり火も鎭まり人も來らず速水と林清さしちがゑて果てにけり頓て吟味の上林清が一族六七人罰せらる又左内は知行五百五拾石主殿は六百石速水は貳百五拾石なり是れ明暦三年三月廿九日の事なり

本田安房守政長越中へ鷹野御免にて七月富山に旅宿其夜辻踊あり夜更け躍場にて安房守の家來口論の上御小姓片岡平右衛門を打擲し大勢にて片岡を足下に懸けたり平右衛門家に歸り其由を書認め切腹せり然れども其夜誰とも知れざるゆゑ翌朝安房守旅宿を立ち金澤へ歸りけり斯て翌日詮義の處安房守家中のよし知れけるゆゑ金澤へも申し遣はされしかば相手兩人締りあり利次公江戸滯在中にて此事を聽き大に怒り歸城の上仔細に穿鑿せん安房守始末もせず早速立退きけるを不屆とし平右衛門の相手は安房守なり此上は中納言樣御才許次第と痛言されたり翌年歸城の上中納言古市左近を使者に添へられ富山へ遣はさる利次公安房守へ御立腹尤もに思召され安房守若年ゆゑ不屆の仕合御堪忍あれとの御意なりけれは利次公かゝる御意とせば如何樣とも背きがたく思召すよし申し上る又古市へ御内意あり安房守我等家來を麁略に心得けるは我を侮れるゆゑなればいかなる御意にても堪忍いたしがたく追て御意により我も分別いたすべし若し御尋ねもあらば申し上ぐべしと仰せられ左近金澤へ歸りけり中納言樣利次公の御内意を御聽遊ばされ老年になりかような事は甚だ難儀に思召され尤もなりといへども安房守家來ながら我儘にもなされがたし又た若年

なれば行屆かざる事もあるべし偖々難儀なる事との仰せにて又左近を富山へ遣はされ尤もに思召されしかど安房守儀も思召通りにもなされがたく平右衛門相手は兩人の小姓と安房守不屆の名代として家老切腹仰せ付らるべく是れにて御堪忍なされとの御意を申し上げ此上御承引なきにては幾日なりとも左近相詰め其上中納言樣富山へ御越遊はさるべき思召のよしにて嚴冬深雪なれば富山御領境まで人夫を以て雪を除け黑土に仰せ付られ候よし申し上げる利次公右のよしを御聞き遊ばされ村隼人へ仰せけるは御意の趣き御請に及び申すべし其方如何とありければ隼人承り此上君承引なく中納言樣此地へ御出遊ばされ候と申さば甚だ重き儀御請可被成よし申し上たり依て左近へ御請の御返答あり又此方よりも御挨拶の御使金澤へ遣はさる右に就き安房守家中先に富山へ召連れ家老青木彦左衛門切腹小姓兩人切腹仰せ付られける青木は知行千石なり安房守右御禮として可被越旨仰せ出され蟄居御免富山へ御禮として罷越せしに御目見得仰せ付られ御懇の御意あり富山にて片岡平右衛門同伴の不破加兵衛淺野市左衛門八尾へ追込仰付られたり翌年三月中納言樣江戸へ御發駕の時富山御本丸に入らせられ御一宿あり御家中御供は通町より鷺中町へ止宿新庄までも輕き者共泊せしよし

万治二年加州能美郡貳万石と下新川壹万石餘と替地になる此時富山も諸役銀地子銀等御物成に圖り込み御打渡凡そ草高六千石にて富山町家六千軒といへども三千軒に滿たざるよし

寛文十年五月廿七日甲府宰相綱重卿の臣太田壹岐守嫡子十左衛門同三男惣太夫公儀より御預りにて三の御丸馬場の西に家屋を建て町奉行御用懸りとなり其後利興公御代室永六年太田十左衛門病死江戸より檢使新庄與三右衛門來り遺骸を龜谷應聲寺に葬ひる同年十一月六日太田惣太夫御赦免同廿三日歸府松浦彌七町醫山本榮菴を添へ送らる延寶二寅年春より飛越境に爭論あり右に付き公儀より檢使長田平右衛門佐脇傳右衛門來る富山より山小屋懸り人夫御郡より二万人餘出たり其秋凶作にて翌年夏饑人多く仝三年閏三月廿九日細野彌左衛門の長屋より失火御城下過半類燒三の丸赤瓦燒け米四千石許灰となる

正甫公御代同年十二月吳服山にて雉子狩り同六年三月廿三日吉作村邊にて狼狩あり家中は勿論町郡より人夫多く出づ同七年奥田山にて狼狩あり

延寶三年上野火の御番仰せ蒙らる然るに上野近邊町家より失火にて二に分れ猛火熾んとなり防ぎ難くや思召けん圖書を呼出さるゝも防ぎ方に懸り罷出でがたきよしを答へける使そのよし申上げしが又候急に參上との命あり又同じく答へしに使云ふ夫にては御爲宜しかるまじく是非御越し然るべしと强ひしに苦しからず其旨申し上げよと云へり使其通り復命せしに御上甚だ憤怒せらる然れども双方人數をはげまし汗水になりて防ぎ竟に双方火鎭まりけり御上歸馬あり圖書御目通りに差扣へ仰せ出さる流石明君にて江府に兵學の師匠あり早速使を以て主人の召さるゝに參らざる儀もあるやと尋られ兵學者委しく事の譯を問ひ返答申し上げるは御大勇なる御君よく御堪忍なされ且又よき家來を御持ち御面目此上やあるべからず猶又罷出で委く申上べしと云ひ御上之を聞き莞爾と笑ひ早速圖書を召し時候安否を尋ね盃時服等下賜せられ君臣もとのごとしとかや又圖書常に

御上の行狀により諫を入れける或時數ヶ條を書記しさし出しけるに折ふし御上湯に入り給へば圖書湯室に迫り數條を讀立て諫めける事皆國家君上の爲め誠心を以て申し上ければ御上も深く感動あり諫めの通り用ゆべしと宣まひ圖書承はり職分の儀ゆゑ不禮も顧りみず斯く御用ひ下さるゝに於ては難有仕合とて退出せり圖書聖賢の道を好み勉めて懈らず時の儒者南部草壽と親しみ公餘書を讀み又詩社を結び各會して詩を賦せり其遺稿中に存せり老後致仕して宗眞と號す一朝病に罹りて齎を易ふ草壽追悼の文詩あり左に錄す

悼瀧川宗眞君

是歲癸未之秋七月十九日、瀧川宗眞君罹霜露之患、奄捐館舍矣、夫君之爲人、自少好學、至老不衰、其學有成、而施之行事、進而立朝則忠以事公、有條理紀綱可觀、退而居家則廉以持己、有德容儀刑可法、寬大弘涵之量、得之天性、慈仁溫恭之誠、溢于眉宇、實夫子所謂大夫之賢者歟、斯宜有天之福而保遐算百年、奈何天不憖遺、使賢哲之人早下世焉、抑天亦難諶歟、悲何可言、予也荷知於左右二十余年、其相愛之誠不衰於始終、雖以予之不才、爲世所薄、而不敢自耻、猶抗顏以樂立士林下風者、以有君之知我也、管子有言、生我者父母、知我者鮑叔、予雖管子非同日之談、君之知我亦何讓鮑子哉、獨所慚者覆忝知已愛、未報其萬乙、自今之後知我愛我、誰又有如君乎、嗚呼哀哉、身世百年永失所依、寧復有意於當世乎、嗚呼哀哉、憂鬱之情不可措、謹賦俚語二章、以備之靈座、神而有知尙鑑焉、

其一

仙遊乘鶴入洪荒、一片浮雲隔帝鄉、崑嶽却消金玉氣、豐城空現斗牛光、丹心報主多功勳、白首經邦有典章、精爽如公滿天地、虛明萬古有何亡、宗眞君號虛明子

其二

白日趨西水走東、浮休瞬息一何忽、典墳猶想聖門學、韜翰空傳儒將風、徒使蒼生懷謝傅、何圖綠野哭裴公、嗟予慚乏撰碑筆、焉向名山勒德功、

南部景衡

小塚將監は爲人威嚴敦厚にて君を補作して忠勤なり容儀の正しきには君も究屈に思召けるとなり御殿御座の間の次に夜詰せるが柱の前に座し夜更假寐すといへども人來れば忽ち目を醒せり常に柱に倚り正しく坐しければ人皆將監柱といへり高田の城請取仰せ蒙られし節も御用にて金澤へ行きしに將監の頴才威儀の正しさ爲め金澤にても人皆感賞せりとかや又或年君公御慰に蘿蔔を栽ゑさせて小人共餘多懸り朝昏となく培養ひ少しも暇なく難儀せしが將監之を知り懸りの者共へ蘿蔔を下さるゝよし申し渡されければ皆よろこび拔て擔ひ去りしなり其後君公蘿蔔のなきを覽て御尋ありければ將監の申し渡にて懸りの者へ下され候よしを聞き何の仰せもなかりしとなり是は輕き者共は奉公の餘は草履芒鞋などを造り交易せねば妻子も養得ざるものと將監の了簡に出で君も明にして其意を悟られ一言もなかりけるとぞ

延寳九酉年天和と改元六月廿八日越後高田の城御請取方公儀より仰せ蒙られ同晦日より御領分人馬御改御用馬百五十疋人夫千六百人馬壹匹口率共に四人の割り惣人夫貳万石増人六百人男尺五尺五寸以上を撰び馬は四尺以上にて七月十九日出馬同廿二日越後中屋鋪へ御着同廿六日巳刻高田城三ノ丸御請取同八月十日高田出立同十二日歸城天和二年十二月廿八日江戸御屋形類燒元錄二年三月江戸新たに造營せらる

同十六年十一月廿九日江戸御屋形類燒利與公御代寳永四年春江戸御屋形御造營正德四午年二月七日富山本丸御城炎上二三日前より夜更けに船橋の鎖鳴りしゆゑ橋番怪み覗へは狐狸の類多く橋を渡り去れり一二夜斯のごとし時に御殿坊主部屋より失火のよし利與公御代明和七年七日十二日夜丑下刻堤町蓮照寺邊町家より失火翌十三日午刻まで火鎮まらず竈數八百九十六類燒

安永二巳年十一月十六日御用番松平右近將監殿より御留守居御呼出し仰渡され候ふ者大原彦四郎御代官飛騨國村々百姓共高山陣屋へ相詰强訴に及ひ又は高山陣屋への通路を塞ぎ及二不屆一候此上何歟可レ及二理不盡一も難レ計候間家來指遣御勘定組頭江坂孫三郎甲斐庄武助を申談指圖を受け取鎮頭取候者等召捕候樣に可被致候勿論時宜により打掃ふ儀も可有之候間鐵炮大筒等用意可被申付となり就右江戸より飛脚十一月廿一日到來翌廿二日巳刻過一手合御人數組頭津田五右衛門足輕頭佐脇藤右衛門侍廿五騎小荷駄奉行等出立せり然る處飛州事靜かに相成候間御人數暫らく見合候樣に彼地より飛脚來る依つて御領境猪谷に人數屯して飛州へは二木勘左衛門恆川半吾郎越て御用を辨せり其節樣子爲御尋金澤より使者遠藤兩左衛門大正持より堀江大七郎派遣せられたり

利與公文學を好み詩作も多し遺稿を東渠詩集と號す江戸下屋鋪に御隱居利久公御代安永二年利與公隣なり屋鋪に學校を造營し落成の後同五年より春秋釋奠あり儒者三浦平三郎瓶山先生と號す其頃執政は淺野大學にて深く學問を好み公餘常に讀書す十三經、解念一史、資治通鑑、經義考、淵涵類鑑、太平御覽、說郛、韻府等の大部なる書其餘百家の書は大概集めらる又た執政に在つて常に恭敬を忘れず忠誠正直にして富を求めず面腆を昵づけず能者官に在つて小人僥倖なし故に上下靜謐にしてよく治まれり實に民の主といふべし又三浦平三郎利與公に値遇し次第に昇進して少老に至る後儒者大澤丹治本田善右衛門市川小左衛門あり春秋釋奠丁日を以て文宣王を祀つり顏曾思孟を配享す

廣德館釋奠儀注

黎明諸執事將レ出レ寮、令二屬吏擊二木版一、唱名者唱二執事職名一、樂作（乱聲）、各執事至二廊下一、而解レ力（傳刀者受而上架）

叙二立堂下一、各位立定樂止、掌儀升レ堂（平聲音取）巡二視諸陣一、至二香案前一、跪焚レ香、降復レ位、少進唱二迎神一、樂作（越樂）、迎送者升至二外戶前一、跪讀二迎神詞一、降復レ位、掌儀少進唱二褰帳一、帳者升而褰二外內帳一、降復レ、位

贊禮者北向鞠躬、少退西向唱二俯伏拜興拜興鞠躬平身一、各執事如レ唱拜、掌儀以下及司厨升レ堂各就二堂上位一、掌儀降迎二獻官一、引至二香案前一、跪焚レ香（引者焚レ香、儀並同）、贊禮者引二祭酒一而升、樂作（萬歲樂）、祝受二幣於齋郎一、至二外戶一、授二祭酒一、祭酒受レ之跪奠二神位前一、少退東向跪讀詞者至二外戶一、讀二奠幣詞（讀畢、復レ位）、祭酒至二

香案前ニ北向立、贊禮者進ニ祭酒右ニ、西向唱ニ鞠躬興拜興拜興拜興拜平身ニ、祭酒如レ唱拜畢俱復レ位、先レ是祭酒升堂時亞終獻官以下盡升而就ニ堂上位ニ、掌儀唱ニ著座ニ、各執事著レ座、掌儀起レ座少進唱ニ奠供ニ、樂作慶德、引者焚レ香、祭酒至ニ神位前ニ、齋郎各取ニ饌於神厨ニ、遞ニ與傳供者ニ、祭酒受レ之跪奠レ位、畢各復レ位、掌儀迎ニ初獻ニ、引者迎ニ分獻ニ而焚レ香、復レ位、分獻至ニ外戶ニ受ニ於傳供者ニ、跪奠ニ配享之位ニ、畢各復レ位、掌儀迎ニ初獻官ニ酒乃祭樂作五帝樂、引者焚レ香贊禮者引ニ初獻官ニ至ニ洗爵所ニ、執爵從レ之、汲レ水洗レ爵、遞ニ與贊禮者ニ、贊禮者棒レ爵至ニ樽所ニ、司尊酌レ酒、初獻官受而献ニ神位ニ、少退東向跪、讀詞者讀ニ初獻詞讀畢復レ位、初獻官至ニ香案前ニ而坐、祝捧ニ祝版ニ、半跪ニ獻官之左ニ、東向讀レ之、贊禮者進ニ獻之右ニ、唱ニ俯伏拜興拜興鞠躬平身ニ、獻官如レ唱拜畢俱復レ位、亞終獻並同亞獻樂奏ニ太平樂ニ終樂奏ニ三臺樂ニ引者迎ニ分獻ニ、退而焚レ香復レ位、樂作換頭、分獻至ニ配享位前ニ、傳供者受ニ爵於齋郎ニ、至ニ樽所ニ、司尊配レ酒、分獻受而獻レ位、畢各復レ位、

掌儀香案を神位の前に進む祭酒神位の前に至る齋郎御附臺を神厨より取來り傳供者に遞與す祭酒受て神位に獻す齋郎又御香木を持來り傳供者に遞與す祭酒之を受け跪て香を焚き本位に復る

掌儀御拜の事を少老に告ク

御拜畢て祭酒神位の御附臺を徹し傳供者に授ク齋郎受て神厨に納む事畢て掌儀香案を堂中の本位に復し退て座に着ク

掌儀告ニ飲福受胙ニ、引者焚レ香、贊禮者引ニ祭酒ニ至ニ香案前ニ、祝授ニ福爵於祭酒ニ、祭酒受レ之、授ニ爵贊禮者ニ、齊郎受レ之而入レ厨、祝授ニ胙於祭酒儀與ニ飲福ニ同贊禮者進ニ祭酒之右ニ、唱ニ俯伏拜興鞠躬興拜興拜平身ニ、祭酒如レ唱拜畢復レ位、掌儀唱ニ徹供ニ、樂作還城樂、引者焚レ香、祭酒至ニ神位之右ニ、東向跪、讀詞者讀ニ徹供詞ニ、祭酒徹ニ神位饌ニ、傳供者受レ之遞ニ與齋郎ニ、畢各復レ位、分獻徹ニ配享之饌ニ、畢各復レ位、祝徹ニ祝版ニ、祭酒徹ニ幣篚ニ遞ニ與祝ニ、傳供者受而授ニ齊郎ニ、納ニ之神厨ニ、畢各復レ位、掌儀唱ニ垂帳ニ、帳者起下ニ內外帳ニ、掌儀至ニ香案前ニ、跪焚レ香復レ位、少進唱ニ送神ニ、樂作越天樂、迎送者至ニ外戶ニ、讀ニ送神詞ニ、畢復レ位、掌儀唱ニ起坐ニ、各執事降レ階叙ニ立堂下之位ニ、樂作長慶子、立定贊禮者北向鞠躬少退西向唱ニ俯伏拜興拜興鞠躬平身ニ、各執事如レ唱拜畢、而帶刀退出、

○洲壞分越中四郡と爲る事并に礪波國と号せし事

神代卷曰、伊奘諾尊、伊奘冊尊、生ニ大日本豐秋津洲ニ、次生ニ伊豫二名洲ニ、次生ニ筑紫洲ニ、次雙ニ生隱岐洲ニ、次生ニ越洲ニ、加賀能登越中總一洲也、續日本紀ニ用明天皇御宇定ニ五畿七道ニ、元正天皇養老二年、割ニ越中四郡ニ爲ニ能登州ニ、聖武天皇天平十八年、令ニ天下諸州造ニ國郡ニ、追分ニ越中之國四郡ニ、屬ニ越後ニ、

嵯峨天皇弘仁十四年、割ニ越前國二郡ニ、爲ニ加賀國ニ、

古事記に人皇三十代の頃日本國百三十餘國とあり中に越中といふはみな礪波國といふ名目あり其後人皇四十代の頃日本六十六ヶ國に定めらる五畿七道もわかりて時に礪波國の名なく郡名となれり惣躰越中と號せしと見えたり更科國諏訪國も亦合せて信濃國とし更科諏訪郡名となれり

立山者越中之鎮也、又謂之雄山、崇高摩天、延亘數百里、面々芙蓉不當衡山七十二峯也、余欲躋名勝、文化壬申夏六月念五日、黎明離富城、東行三十里、至岩峠、是雄山之麓也、有華表、勝題雄山祠、拱木森然、樓塔重複、又有僧房二十四、中稱別當者、爲其巨擘、蓋修密教之徒也、皆隸雄山祠、無他祝史、雄山盛夏及雪盡、登山謁神者多、六七月之間別當在于室堂、各房亦代二人副別當理事、自岩峠三十里、過横江村血懸郵、至蘆峠、有古詞、雄山之屬神爲手力雄神、北亘有二十四之房、與岩峠同、又南有古殿、云、是大寶元年文武帝使下佐伯有若丸守中越中下、其子有賴有、故隱此、祝髮改名曰慈興、時雄山神有告興、興奉神意、斫樵葬、而始闢立山、此爲其遺址、且爲慈興之後者、亦十二家、今尚住于此、然雄山祠厥始不可得而知也、而史籍所載、上古已有焉、則慈興之事蓋其中興乎、過橋有姥堂、又云慈興有母、卒後與使工作其肖像置此中、徘徊日已逼、虞淵、遂宿山房、廿六日、早行十里許、有勝妙川、出於峽間、是瀑布之下流也、編藤枝爲橋、緋于兩崖之巨石、渡之、飄搖編藤疎、脚下數丈而見水、股戰難進、惴々流汗、又有湯川、東出樂師嶽、西流亘北會于此、又爲常川、踰金坂、抵千手原、有佛閣、又至材木磴、傴僂而上、磴皆奇石、如積棟楹梁栱、然因得名、左右喬木蓊然、皆數百年之物也、又有古祠、去十許歩、有巖洞、曰鷲窟、中可容數十人、美女杉今已稿死、殊可惜、至此又十里、路傍有一穴、其深不可測、又有鵲頭杉、大十尺圍者一々爲妄說、蓋流俗之附會也、又十里鑑、初坂、至伏拜、林間始見瀑布懸蒼崖、直下百丈餘、所謂勝妙瀑布也、水聲如大風雨、至使人毛骨寒慄、是一山最勝之觀也、行又十里至桑谷、已卓午、飯佛樓、又十里有不動堂、小憩施茶寮、嚥茶、又十里許至獅陀原、地勢平曠開豁、寥無草木、又正南峽中自松尾、至溫泉、歷獅陀原十里至追分、有支逕、其一可至于姥懷、其一通子一谷、行數十歩、又向北有逕、僕言自此財數里有市場、市場之峽中景尤勝絶也、行觀之可也、因行至其所、果然南有國見嶽、北大日嶽、層巖絶壁、崭巖突兀、有崩欲壓者、有危欲墜者、有横裂者、有直裂者、有凸者、有凹者、奇怪不可盡狀、僕又言嶽上幽林之間、世所謂天狗神者多、望之使人寒心、又北有畜生原、曾聞人往此無歸、故不敢往、還至一谷、逕絶高崖懸鐵鎖、鎖有長短二條、續以及下、握之而後得、達其險可知矣、自追分至此又十里、左有獅子端、絶壁上怪巖蹲踞張頤、蔦蘿被之、如一青獅子、頂有護摩壇、旁有小堂、釋空海修法處也、捫蘿側足而上、其高數十丈、目眩恐顛墜、速下去已垂日映、至室堂、是登山者總投宿處也、至此又十里、幽奇絶境無草木禽獸、砂石礫埆之地、峯々宛如白瑪瑙、動心駭目之觀也、立小時遂脫芒鞋上堂、已投宿者滿堂、老生蠻山嶮、疲倦甚、早就牀、欲睡則衆客言語紛嘈喧殺、又中宵凝寒侵肌、重棉猶欲附火、終難成睡、廿七日、夙興天氣開霽、登山尤可喜事也、飯已、與別當杖策相從、顧後他登山者亦魚貫來、先向浄土山、躡石磴、下視西南有鏡籠池、周可數十里、水色如瑠璃云、是龍蛇潛在焉、遂極攀緣、絶頂疑逼天四顧海内略靡、有遺者、近可辨江上井邑、遠杳杳乎有無中耳、信天下之大觀也、少頃陰霧遮已失望、霧中又忽焉生如車輪者、圍徑八尺許、輪邊五色而如虹、中有物髣髴、是山中所謂三尊來迎者也、恰値之眞偉觀也

立久而去、別取レ磴、下磴急足趨欲レ留不レ駐、頃刻而下、雄山最爲二疎傑一、自二一層一至二五層一、俗謂二之五越一、每レ層有二石佛一、以二小屋一覆レ之、磴道如レ梯レ空、前後相扶持而上、皆發レ喘爲二鋸木聲一、攀躋十餘里、有二神祠在二山巔一、是爲二伊奘諾尊一、各肅容拜謁焉、別堂於レ是誦レ經、且說二因果之理一、生爲レ惡者死爲二厲鬼一、廼言二其事在二此山中一、則出二鬼牙老女角種々物一、示二衆人一、以爲レ徵、是懲レ惡勸レ善之事也、又絶巔植レ杖小立、陰晴須臾變、烈風欲二挾レ人飛一、畏而去、涉レ岡北行至二大汝一、有二佛閣一、爲二觀音一、又數里路極險巇、遂上二別山一、有二佛樓一、爲二帝釋天一、前有二視水池一、周可二一里一、又有下謂二有賴之鎧一者上、糸革爛腐而餘二片鐵寸金一、以備二故事一耳、自レ此絶險不レ可レ着レ脚、仰見攢峯峭扳、巉然挿二於霄漢一、是劒峯也、已非二他山可レ擬、雲霧開處愈秀、姿態萬變、信造化之尤物也、又是峭風尖寒不レ得二久留一、割レ愛而去、下二別山一、危磴曰二大走小走一、數里踏二堅氷一、往々蹉跌、又下數里有二巖洞一、曰二玉殿窟一、廓然甚大矣、蓮華岩亦奇、自レ此北折行數十歩、有二綠池一、已曾、又有二美久里池一、周可二二里一、又去十數歩有二血池一、又數歩谷中有二寶穴一、大小以レ百數、有レ水者燒熱湧沸、或有下躍上者上、或有下崩騰者上、或有下如レ飛レ玉者上、或有下如レ炊レ飯者上、無レ水者寶中鳴動、熏煙直射レ天、或有下如レ發二鳥銃一者上、或有下簸二揚煙一如レ鑪者上、或有下如レ叩二門戸一者上、一々不レ可レ枚二擧之一、人著二跫音一、則更增二猛烈之勢一、怒號震響可レ怪也、別當於レ是說二八大地獄一、威二脅衆人一、駭怖失レ色、又東北有二千峯萬壑一、人跡所レ不レ能レ至也、盤旋幾盡二一日一、再至二室堂一宿焉、廿八日質明自二室堂一南且西下、磴道十里之間、有二鑑石又姥石一、各類二其形一、姥石尤逼レ眞、因爲二種々說一、亦似レ不レ誣、造物之巧有下如レ此者上、蓮日在二山中一、極寒可レ着レ爐、比レ至二杤坂一、暑氣如レ燬頻揮レ扇、昏暮又宿二蘆峅一、既歸爲レ記、以啓下追二余蹤履一者上

立山紀行

佐藤季昌

若かりしよりれもひたつことあまたゝひなれど或は都に遊び或は東にさまよひしらぬ火のつゞしの果迄うかれ歩行時を感しては花にも涙をそゝぎ別をれしみては鳥にも心を驚かすたま〳〵古郷に有も世のさかはあはれなるものにてうつたゑに忘るとにはあらねど人やり奈良ぬ道はいたしと母覺へすひさ行駒の過やすきをかぞふればいそちにも四つ五つたらぬ身にまでなりぬわさて近き頃より身にあし曳の病もいてきてこゝろさへくすれたればかくけうさくいやたかき山に登らんことをいかゞとためろふもいとわりなしやしかばあれと年ことに遠き境を隔てたに歩を運ぶ人々の行かふをみてもやるかたなきまでれもふもわやにくなれせうとも同じ心に年月を送りし今年はさそふ人さへあればとてわれをもいざなひつはからざるゑに社とし頃のねがひもとけ給はねなど妻子のいさめ母かたみはいひ甲斐ありていとうれし

水無月十九日まだ明やらぬに立出る鼬川渡る頃月は西へとなりぬれど我は東へ行遊子殘月に行と口つさみつゝ近きわたりにはさせる關たにもなし渺々たる田面をみわたせば稻葉にのほる朝露の衣をひたして空は晴行と雨つゝみをもせばやとばかり思ふ中市横内などいへる村過るころれひ夜は明にけりさしむかひて屏風を立たる様に見ゆるはいまこゝろさ壽みねつゝきはるかに顯れて道案内するものゝこゝかしこれしゆるこそ暫目さひる心地したりやう〳〵常願寺川をわたる駒のあ

かきに碎くる水は壽いそうのやうにてかの清少納言かいひしもふと思ひ出で似つかはし

明日はまだ越べき山のふもと川なみのしらゆふかけて手向む

大森の禪林は遥なる安紹か知れる和尚の住給へは茶なゝ乞ぬるにいと禮もころなりこの大とこゝそたち山の奥玉戸の窟を禪牀とし給ひ或時は地獄谷の炎を夜の灯として觀念し給ふよし捨身の修行いと高きぬかつきて立出る行く〳〵も小笹ふく賤か家のまはらなる村あり名を問へば一夜泊りといふ

此村のひと夜とまりの名をこめてくさのまくらをいさや結ばん

かくいへどいまだ日の高ければ似けなきものから岩峠寺何某が許にてつゝみゐなゝ取出しぬるに安紹能雄は暑にたへずして水はんをくふ此所ぞ麓の大宮にして伊奘諾尊手力雄命ふた神の御社末社十九棟鳳の甍旭にかゞやき鳧の鐘夕の雲にひゞく祭禮は四月八日に執行ひ別當は三十四坊斬をつらぬ抑此御山の傳記を聞くにむかし　文武天皇大寶元年三月十六日夜帝の御夢に彌陀如來枕頭に立給ひて曰今より四條有若をして越の國につかはし侍らは國たみまず〳〵安穩成べしと帝打驚かせ給ひてとみに有若をめし越中の國司になし給ふ有若嫡男有賴當國に下り保伏山に住給ふ或時辰巳の方より白生の鷹飛來りて卿の手に止る卿是を見てめゐなゝと限りなし一日有賴父に請て此鷹をもて狩暮しけるにいかゞはしけん鷹いつともなく飛去ぬむね打たゝろき東西とさがし求むれど甲斐なしせんすへなきに唯茫然たり時に森尻の權現顯はれ給ひて示し齋田ひたすらに巽の方を尋べしと敎に任せて深山路に入り日も既に暮れぬとある岩根を枕とし一夜明かしつとめて岩峠の林に至りぬるに爰にひとりの翁右に劒を提げ左に念珠を持ちて曰くかれの尋ぬる鷹いま横江に有と聞きうれしさもいはんかたなくて名を問へば我は是刀尾天神なりといひ終りてかきけしぬいと高くぬかつきて猶山に入時に猛き熊かけ來て通るゝ道なし有賴いちはやくも是を射るあやまたすその矢熊の胸に中りて足曳の山深き玉戸の窟に逃入りぬ通さじと猶もかけ入ばこはれもひきや三尊の佛像岩洞に巍々として異香又芬々たりゆくりなくたゞろくものからつく〳〵是を拜みぬるに彌陀如來の胸に矢正しふ立て血流たり既に我矢なることをいちじるければ大にたゞろきかつ怪む如來夢のごとく告給はく我濁世の衆生を濟はんが爲になれをして當國にわるしたらしむ鷹は劒が嶽刀尾天神なり熊は我なりれのれ早く出家して當山をひらくべしと有賴隨喜の涙にむせびてたゝ地に說方か原五智寺の慈朝師に謁して受戒し慈興と號し此御山を開き給ふと猶細かなることは緣記にゆづりて是にはもらしぬすべて此處より絕頂まで十三里と聞ゐし大宮をめぐりて

神こゝろ麓の塵にまじわりてまもるやかたき國の岩くら

横江の村ちかきわたりは夏草のいとしけき野原にて暑さいはんかたなし水もかなとそこら尋ね求むるにとある岩陰よりいと清けなる清水を流れ出にけり

夏の野の風もほのふを吹かへてすゞしくなりぬ眞清水のもと

しはしとてこそ立留り津れと西上人のよみ給ひしもかうやうの處にや誠に立さらん事のものうく

てあたりの芝原に人々圓座しつゝ杖して一日のつかれもわるかにて果は居眠をさへしたり日も闌ぬやぢりとるべき里もなき遠しなど從者に驚されて立出し蘆峅寺は岩峅より二里あまりあなたにてこゝにも二十四坊軒をならべたりそが中に乗々契置つる坊につく夕日猶殘りぬれば姥だに參る是や大寶三年四月二日慈興上人の母江州志賀にて終りを遂け給ふ上人悲みにたへずしてみづから像をきざみて慶雲元年八月葬禮の式をなし給ふよりいまに秋の彼岸にはその折にたがはぬ執行ひまめやかなり近頃燒亡のことわりし急ぎ大守より木の道のたくみに仰せてもとよりも猶うるはしく造りなし給ふ御前のうき橋はけふさくそひえて澗水玉をならして凜々たり杉の幾かゝゑともなきか立ならびていとれくらきに日も暮れぬべしとて坊に歸る山里はものゝ侘しきこと社われ世のうきよりはといひしも實さることなから夜に入ては瀧のをとのすごく虫さへ鳴ていとさびし

故郷をいでゝ幾日もわらなくにつかれにけりなわしくらのさと

なつながら虫の音さそふ山里や露のよすかの草のまくらに

霄の間過る頃客人あまた入來りて立さわくを聞けはあな尊何のたゝりなふ歸りけることのうれしさよ昨日室にて逢ひし人の山靈のとがめにや得參らしてありし又何がしの國より遠くきにける人のかうやうの類ひわりげりなんと定かならぬことゝは思へとひたもすにいゝのゝしりさらは唄ひ酒たうへてんと手打足とゞろかしてたみたゞ聲いと高ふわけだにしれぬとなど唄ひ舞夜もすから醉ひに醉ふて果はいさまさわらそふさまわまりにはらあしきわさなれば無禮の罪たゝさはやとはれもへと明日は御山に參る身にしあれば物ことつゝ玄みて社と念じかへしぬ鶏も鳴き曉の鐘雲にひゞく頃をひいつしかにしづまりてをのかしゝこゝろゆくまゝに縱横にかさなりいきたなくいねたり此驚かしに夜ひと夜いねすつかれぬれとれかしさもやるかたなくて中々目覺る心地しぬればたちいづる大峠小峠なぢいへるを越えて川原にくだるしはしゆく程に先達川際の山を登ることは道には非じ迷ひけんやといへぢいらへたにせてのぼる山はさのみ高きにもあらねど土くづれ力にすがる草さへなくて所々取付石もゆるぎ落てさきなるものゝ足は我頭にいたゞき後れたる人の頭は我足の下にぞありけるいまはかたみに裳裾に取ついてやう〳〵足とゞめつへきほどの道もとめてしはし汗をぬぐふ先達始めていへらくさこそからうし給はめ河原のいと廣きに少しは道も取たがへぬれぢよしやいつくまれ輙からぬは此御山の習ひに社とものなれたるつらつきのいとにくさやとかくするまに坂口下らんとて木の根岩角に取付てうしろさまに下る抑此道はいかにぢやかねて聞き置し名たゝる處にもあらぬにかくくるしきぞといへば是ぞ大くづれとて下なる川の瀨にいりて上なる山に廻りて越ることもあり又河原つだひしていとやすくこゆることもなれには侍れと近き頃は此道はかりなりといふ下りては名たゝる藤橋にぞあなるかねて聞きしより見るに目くれこゝろまどひてしはしこなたに敢ものいたしてみわたせば藤はひとすぢづゝ左右の橋にらちのやうにしなし中通はみすぢにて所々横木を結つけたり下は幾千尋ともしらぬ勝妙川矢よりもはやく漲ぎる浪巖に碎けて天を拍つの勢ひあり橋は河風にさへ吹なびきてわやうさいはんかたなし

あやうくも雲より雲をきしねにてつなくともなき峯の藤はし

中々に渡りてはむねとゞろき足なほふるふ此わたりしはし過行は木草しげりて空のあやめもわかぬ深山路にて是ぞ凡ての山口にしてこがね坂とぞいふ

何こともさほりやすき身のうへはこがね坂をもひろひてぞ行

下るべき谷間もなくさしつゝひて草れひ坂に登る

誰かまた草れひながらのほるらんみちたにそことみねのしら雲

材木坂は名にれいて棟柱にけづりなしたる石縱横なるが山はさがし道とてもわらねばこなたの巖を抱へてかしこの木の根に取つくされは近き頃のことなりし魚津の浦専光寺の和尚此山に三十三度歩を運びけるに履をはきながら登りけること人の能くしりたることなれといまれもひ合するに胸とゞろきぬ唐土の謝靈運山に登る事を好みて木履を着くといへりされど登りには前のはをさり下りには後のはをさりぬといへば賢くもしなしたり返す〳〵彼和尚ぞたやすからぬ仕業にこそ此處や女人堂建てんとて木作せし木數多引かせたりけるに一夜に石となりぬといふ

梁や棟のすがたそのまゝによこたりふせる岩のかけ道

先達聲れかしふ石角衣を鈎して破り藤枝眼を刺て新なりと唄ふくるしさのあまりにやわらんされど人がらには似ず心懦いていつしかつかれも忘る計に魔へしが美女杉は若狭の小濱の尼何がしに從ひける女の化して斯成けるよし傳記に見へたり

松浦かたしなこそかはれこゝにしもちとせひれふる松のこずゑは

しかり尿はれかしき物語りもわれとあまねく人の知ることなればこゝにしるし侍らず朽平といへるを過て伏し拜みに到る從者敷ものわりこなど出してあるしもうけするに似たり勝妙の瀑布は谷を隔て遙に高く聳へたる山の頂よりぞ落つる水は三段にわかちて幾千丈ありとも知れず響は百千の雷の如く色は萬匝の素練にも似たり李太白が飛流直下三千尺疑是銀河落二九天一と作りし廬山の瀑布もさのみ是にはまさらじ

高根より落ちくる瀧の水けふり千尋の谷のそこにひゝきて

名殘れしけれど日闌ぬれば立出るいく程もあらで鼻つくはかりさがしければ彼瀧みしれもひにはようかはりて汗は中々瀧のごとし名をとへばかるやす坂といふいと腹あしき名なりとて

藤かつらとりつゞ道のくるしきをかりやす坂と何名つけけん

夕かけて桑が谷に下る是ぞ麓より室までの半にして接待の茶などたゝよするに竹の柱いとふ傾き。て萱むしろの古びたるを二三枚敷たり小笹ふくしの屋にも芦の筥屋にも似べきにもあらずいかでやとりとるべしと母覺へぬものから日は闌ぬ行き先は遠しいかゞはせんよしや身を仙人にもなしはては雲にも伏すべし饌をも吸ふべしなどいひなぐさめてやゞるつら〳〵あたりをみわたせばさせるは元もなく唯たくましき巖の魏々として花もなき夏草の青みとり雨露を凌くよすかには持たせし雨つゝみとうてそこらかたのごとくしつらひやう〳〵夕飯調ふもいとわりなしや夜に入ては

雲霧立れはひ連なる人のすがたゞに見ねねはしのびやかにねふつする聲のみぞ力草なるとはかり
ありて月いとさし出ぬ雲霧のいづこにか行けんとみる〳〵又立れはふかくすることいくそはくそ
こゝろのうちくもりてはゝれはれてはくもる定めなき世のありさまにてれもひつゞけてよもすが
ら寐られず

世はなれし山にてもまたうき雲にたにのこゝろやはれみくもりみ

こゝをもまたくらきに立出る庵にありける男いましばし郭公の鳴けは夜は明ぬべし爰にはくたか
けのかわりにとふといひ出しぬいとやさしければその言葉のまゝに

谷の戸の明方になくはとゝぎすそれを八こゑの鷄かねにして

こゝろいられのやるかたなふわけのぼる木の根岩角のあやうさに一足つゝかぞふばかり行く〳〵
もかたへの杉のむら立に郭公の二聲三聲鳴渡れば夜はほから〳〵と明にけりさきの男の空言いわ
ぬぞいとにくけなき凡そ市中に住める人はかりそめのことにも面をやわらげ言葉の花に色香をそ
へて人の耳を悦ばしむれを誠の實少なければ彼山賤にも中々れとりぬべしといへば葛天氏の民な
らばこそさいふものしも同じ穴のきつねならめとて人々わらふ中津原は彌陀ケ原と母いひて高ね
に近きわたりながら蒼茫たる廣き野原にて左りは劔ケ嶽雲に聳へ右は藥師ケ嶽遥に見も此しもに
こそ名たゝる温泉ありけり立寄て湯あみせんと思へど道のさかしきを聞くに胸とゞろきて留まり
ぬ行手に見やりて市の谷の道へと杖を引此あたりぞ今もかも雪とけの水道もとむる風情青々たる
草もやゝ此頃より萌出けめ一鳥聲なふして幽閑も又たぐひあらじ

水無月を雪まになして若草のもへいつる野べぞ世にもめつらし

むかし森尻の智明坊といへる僧のありけるひとゝなり驕慢にして此山にのぼる俄に聲牛の吼るに
ぞ遂に魔界に入てみづから光藏坊と名乘て此市の谷に住む刀尾權現遠くしりぞけ給ふ時に一の爪
を落す又た此邊りに畜牛原といへる野あり陸奥板瀬坂の藤原直丞といへるもの茲にてもくりなく
居眠りやがて馬となりかつ角をさへ戴せてかけ廻るよし因のなせる果いとあさましかゝる物語を
聞きつゝ市の谷に到る澗谷にそふて登れば奇石峨々として淵水溶々たりその清きこといふ限なし
手に掬せば冷かに口すゝげはいと甘し身は仙境に入るかとばかり桃源にもまよひけんやといひつ
ゝとはかり行に巖の高く聳へたるにくろ金の鏈りを二筋かけて道もこゝにぞもきとまりぬる鳥な
らでは越もべきとも見へぬに先達鏈りを持そへてのぼるをくれじと人々取つくにいとあやうく足
もしとろにふみとゞまらず漸々のぼれば岩根さく道のいとさがしきかまゝに見上ぐれば峯は霧さ
へかゝりて目くれまとひ見返れば谷ふかふして雲又漠々たり進むに胸ふさがり退くに道なしかた
へは根笹こそあれよき力草なりとて取つきいまは足つかれ胸とゞろきて身も汗に染れんとす息の
つくべき足の留むべきひまもあらねはせんすべなし半過る頃岩はしる水したゝり苔なめらかにし
てたゞて登るべしとも見へぬにこゝにしも鏈りのいと長きをかけたり先のに習いて唯いさりにい
さりて命も消へし魂もいつ地にか行けんと我をもしらでのぼるやう〳〵少しなだらかなるに出て

始めて蘇がへりぬそも〳〵又かゝる道もわるものかなわれら齡ひは百年の半に近き身にしてかゝる深山をわけ登らんことは事好のものとや人もわらふらめまた行先もをしはかりて悔しさやるかたなしむかし韓退之は文學世に秀で卓才古今にならぶ人なき身ながら或時華嶽にのぼりその險絶を見てはなはだ恐れ慄き文をつくりて奇を好む過ちを譏りけること物に見へたり今わもひ合すればさもありぬべしとて更に進むべしともみねず先達是を見ていひ甲斐なき人々かなわれみ給へ三尺の童子も登りやすく八十の翁も退ぞくことなし唯佛神に身をまかせ玉へなと聲あらゝかにいひて先にすゝむ此いきはひに力を得て足さへ輕しとぞいふ

取すがる小笹の露の命もてかゝる深山をこゆるあやうさ

獅子ヶ端はまことに似つかはしあやうさいはんかたなければとめずらしと母嶺も弘法大師護摩壇愛染明王の窟やわり少しのぼればいとなだらかなる野原とばかり行に又小松原とゞいふからふじてこゆれば是より室まではさせる坂もなしされど一足づゝのぼればつかれたる身にはいとふたゝがたしや鋭石も名たゝる所なれとくるしさに言の葉もなし室ちかきわたりに三室崩れといへるわりむかし飛騨の小萱の郷に北山石藏といへるもの貪欲猛悪にして人を殺し物の命をとることを好めり遂に怖ろしき鬼となりてこゝをしも住家とせり別山金剛童子是を追ひ給ふ牙ぬけ口噤りてしにきかゝることは世にけしからぬやうにていぶかる人もあれと其牙今に神室にあれば此御山に登らん人の爲めにくさ〳〵しければ跡先にかいつけぬ室につくけふはやすみて明日は御山へ登らんとはたもへど夕ゐる雲の立居も唯ならねば雨にやならん風もや吹らんとて夕べかけて立出づる遠き國々より來にけりとみゐて垢離とり閼伽むすびつゝ優婆塞の白きそうそくして白ゆふにかしらをつゝみ鈴など鳴らして打まじりたるがいと清けなり室より峯までは五十八丁といへど唯手を立てたるがごとし山の姿は類ふべきもあらねど夕日にうつろいて金をつみあげたらんにひとしく眞砂に交る岩角を玉を碎く心地したり右は淨土山をばなれて聳ゐたり左は大汝峯別山雲を凌いで秀でぬすべて一の越より五越までは此界をはなれたる有樣なれば拙なき筆をとりて書顯はさんは中々恐れあればもらしぬ能雄安紹は家のわざなればれふみきに神氣ひもろきに備ふ年頃の願の滿ちぬるに鬢のしもやう〳〵すゞしき身をもてかゝる御山に登りし事のいとといとふ有難くて唯廣前にひれふして泣神寶の數々拜みてそのあらましがいつ〳〵

有賴熊ヲ射矢根　有賴刀　無銘

行基菩薩奉納錫杖

墓股鏃

若狹老尼額角

北山石藏口牙

光藏坊爪

藤原直亟角

大錢三文　其外異國古錢多

本尊彌陀如來は伊奘諾尊と立給ひ不動明王は手力雄命と顯れ給ふ本迹一致の理はり聞に尊とく仰せにあまりあり

あな尊ふとうき世のちり母雲霧もはなれて高くたち山のみね

名殘なきしもあらねど日も暮ぬべしとて一の越までくだる備ひしれふみきとうてふかたみにをし戴き少し醉ひぬれば例のしらぬゐせことのみいふ此あたりにしらふの鷹ありまた雷の鳥ありしら山の松の木陰にとよみ給へば彼山にはれふくぞわるらん鳴神の音を食とし侍ると人とにいへばさもわりなんされど來の鳥ともわればいかゞと覺も夫はとまれかくまれ延喜式神名帳に越中國三十四座のうち新川郡七社そのうちに雄山の神社はまさしふも此御社をいふにや且此山の傳記のうちに小山大明神の告によつて淨土山に至り一光三尊の如來二十五の菩薩を拜みぬることあり雄山小山ひらき同じければひとつ山にやすべての山の名を雄山といへる山もわるにや且歌枕の增補に氣比宮越中の國とわりまた行意か雲をさるつるぎのみねにのこし置て神さひにけり氣比の古宮といへる歌を出し見ればいづれともさだめがたし或人たち山の名は劍峯如立といへるより起りぬといへど是とても何にわりと母管見には見わたらず才賢こき人に尋ねはやといへばあなくだ〳〵しむかしも今も名はたち山にて事たりぬべきをあまりはりたるとはいはぬがよきとて人々にくむす

こし平かなる溪合に出れば雪の猶殘りて厚さ五六尺もあらんかかたふして巖に似たり

來て見ずは世に水無月の空言と名やたち山の雪も氷も

衣をかさねたれとゝと寒ければ急ぎ室にかへる夜もすがらねられず歌よまはやと思へど例のうわそくわるは國々みめくるすきようさ老たる若き立つとひていとかしかまし更行まゝに少しはしづまりぬれといづれねたる人ありともみねすやり戸のひまより見やれば空いとはれたり曉月暫飛千樹裏秋河隔在二數峯西一と閑に誦してさたかには寐もせず起もせず曉過る頃より風あらく吹來りてやがて雨のあしいとはやし夜も明ぬれば雲深ふして朝飯たく火影に人々の面をもわかちぬなほふりしきるや谷そこにとゞろくそこは鳴神の音にぞありけれ此寐ぬる朝けに御山かけんとてよひよりやゞりし人の二百餘もあらんかし此空を見ていかなるたゝりにかあらん身のうへにはあらじやと眉をひそめ額をあつめてうつ伏ねふつの聲さへいと幽かなりそが中にきのふ御社に參りしものは彼鳴門越ねし船の湊入したる心地してものこと我は顏にいひのゝしるもいとにくし巳の刻はかりに雲社はれぬ雨少しれやみたればさらば地獄みめぐりて桑谷まで下らんとて立いづる雨またふり來て谷風のあやにくに下より吹あげたれば菅笠のうらにさへしふきてかしらも身もぬれにぬれぬからふじて谷をくだればこはいかにぞや罪人のいくら母なきかれとこれふな老たる若き夫〳〵に聞わかれて責せたむる聲のさけびゆらしに響きて遠くも近くも聞もればいまゝでふるひにふるひし身も忽ちに汗出てれそろしさいはんかたなし先達のわれこそは何かしこれ社は叫喚焦熱阿鼻

等の地獄尼ては一百三十六とぞ數へぬ見わたせば所々にもゆる猛火は濺る谷水をさへぎり湧返る湯玉は夫かとみればやがて炎と立のぼる劒が嶽は今もかも罪人をねぢ登すかとれもひ血の池はまのあたり千しほの水をしたゝる實やこの閻浮提に數多の地獄おりと寒山詩集附提記聞の中に白隱禪師の書給ひ假名法語にも十五經など引てねもころに記し給ひきいまも思ひ出していとふれどゝろし

聞しより見れば身の毛もたち山の谷のならぐに燃るほのぶを

雨やまざればいまはたゞがたし立踏りてぬれたるものをも乾かさはやとて室にかへる火たかずれど爪木さへいとふぬれて思ふやうにもなく持たせし酒どうてゞ守の坊にもすゝめおたりの人にものませて彼地獄谷廻りしあらまし語りいづる或人曰凡て高き山には火あり水ありて相うつ故に富士も延暦の頃貞觀の頃は更にして度々燒けしこと史に見へ遙そのゝち寶永の頃をひ大に燒けにき信濃に名たゝる山つぐし阿蘇山などいまもけふりたゆすしゐていふかる事にしもあらずといふ左祉あらめざれと彼禪師は三百年來ならふものなき善智識の宣ひし言葉をこそ我は信じ侍れどで醉のまぎれに疎いりぬつとめて立出づるそらのけはひも昨日に似たるものから雨はいとはれにき銳石過る頃日さし出で見わたす海山のはらぶかなるが繪にも寫しぬべしうばがふどゝろ過るとて

なつもなほ雪ふむ峯を越過ておたゝかけなる姥かふどゝろ

こゝをしも姥かふどゝろといへるは彼若狹の尼ゝまでは登りしが女人禁制を犯せる罪にや遂に額に角生へて果は石となりにけりその角いまに神寶の中にてさきに記しぬ桑が谷下れば故郷の友がき欠真など登り來て遊のくるしさなどかたみに語りつゝ行先も覺束なしなど聞へければ例のたへがたかりしてとに事そへて室にて坊に聞し淨土山別山のあらましまで見し樣に語るそもく三の山かけんとれもひ給はゝまづ淨土山へ登り給へ峯に阿彌陀堂おりそれより御山に參り給ふでみねつゝき五十丁計もあらん此間に大汝峯あり後光石橋立石白山權現堂折立富士權現蟻廊渡砂々嶽はいひしらぬけはひかそれより行者返り抱石などさがしさいはんかたなきよし別山は帝釋天にて御前に硯水の池おりてゝより室まで五十丁おり大走り小走り賽河原玉殿窟胎内潛遠花石楊妓嶽美九里池伽羅陀山などいひて世に類ひなき所ながら昨日の雨風に得ゆかでおりしなどいへはいと有難ふもれそろしふもれぐしがちに鼻白めしたるもたかしかゝつらひては日も闌ぬべしと立別る伏拜みにて瀧のしら糸くり返し打見るにわく時なし材木坂はいとさかしふ巖に取つきて先なる人の笠を蹈てゞ下るとてゝろなき夕雨さへふり來て道のほゞわびし

足曳の山路をめぐる夕立にくさわけ衣ぬれ〳〵ゞ行

からふして藤橋わたる頃蘆峅より迎ひのものいで來りて酒肴もたせたり今までのうさもつらさも忘るばかりにのみぐふ大くづれも醉ひのまぎれに苦しさも覺へず下れば馬ふたつつながせたり安紹能雄に進めてのらしめ木幡の里ならねど我は歩行よりゞ暮過て蘆峅につくつかれにたれとつゝがなふ立歸りしそのうれしさに酒とうてよ何をがなといへばあるし肴もとめに小もるきのいそぎあるけと山里は思ふに甲斐なしなどいひつくろふ宮路の何某肴調へてみづからも出て來りてのむ

彼土佐日記に一文字もしらぬものが足は十文字といへるがごとくみな醉て伏しぬ廿四日日闌てやう〳〵目さめぬ朝飯とゝなふうち庭に見送りの馬牽かせたりこたみは三人ともにのりて行く〳〵さかしき峯越しつらさわやうされもひ出していひ慰む先達のきのふより勢ひ落て後にありしが不圖いひ出せるは人々の室より御山へ參り給ふときやつがれは跡にのこりていまは二の越やこゝ給はめ三越やと立出て遥に見やりぬれば淨土山に來迎こそ立給へり實や彼山を三尊影向の山といへるもさることなりその折にこゝろのつかせたまふにやといへばいやさりけれしいで此來迎につけて近頃空花談叢といへる文を見しに此御山の來迎の事を書のせ又もろこし娥眉山にもありけりよし委しく書給ひしがいま先達の物がたりにてかうかひ見れば彼文にかけるもめうたがひなしされば此文の作者八事山大和尚は砂石集撰集抄つれ〳〵草などの誤りまでたゝし給ふ博識なればれふかたは此來迎の事もあやまちなかるべきかされど我友書林何がしに仕へける男の登山してまのあたり押み侍るには彼文といさゝかちがひたるやうにも覺も兎につけ角につけさゝみじかきわれらのかうやうのことはあづかりしることにもあらじといふうちはや岩峠につくさきに契りし坊に入つてしばし暑をしのぐひやし物など乘て心得たる樣にてとみに出してゐるしもうけしたりさして言葉をもかざらぬぞ山里のけはひ失はざるいと誠とめけり日も午の刻過ぬといへば急ぎたつ常願寺川わたる頃迎ひのものゐまた出で來りて中市村にて酒肴とりしき取ちらしたりやがてはらからなきまで出で來てわらひつ歡びつうれしさ限りなし夕ちかき頃まで遊びて家にかへる

立いでゝ一夜二夜の旅寐にもいくたびむすぶ故郷の夢

玉津島みれど母あかずいかにしてつゝみてもかむみぬ人のためと萬葉集によみしはところこそかわれ實にさることなめり十とせあまりのむかし此の山にのぼりこゝかしこにてかいつけたるをいまいたして見れば漢文にもあらず和文にもあらでちくらの沖にたゆたふ船のことわいためなきものからいまさらかうかへあらたむべきいとまもあらずもとよりみぬ人のためのみにて文章の野なるは更にして事實のたがひたるかのいすかの口はしのそしりも多からんかしこはたゞ其折の山つとにこそ

寛政十午四月

松蘿子月窓

○紀二立山異人之事一

皆川愿

立山絶頂出二雲霄一、上無二一毛一、沙迢々、近有二大坂好奇客一、膽壯獨往窮二幽寂一、當二巔兩株巨杉聳一、杉下草舍火未レ消、似二有人常爲二棲止一、心抱二精疑一且逍遙、俄見二囂然一老至身軀魁岸行躊々、恠謂無二乃爲二偷竊一、客進跪伏言自昭、千陳萬謝始信實、箱中出レ物類二崖密一、與レ客充饑亦自餐、咀嚼味甜似レ食レ栗、義輪時已沈二虞淵一、山下巖嶮比如レ櫛、是險昏黑固難行、盡且次宿待二明日一、爐邊吹レ火防風寒、草蓐掩圍用レ情悉、中宵促坐問二主人一、君爲二神仙一將隱逸、叟道身生二元弘一時、新田麾下効二驅馳一、勤王兵戈多二反覆一、東征西伐竟與レ尸、心憤二將歩隕一北地一、孤城奮義犯二賊師一、城中三人與二一犬一、苦戰由レ已出二神奇一、糧盡勢極振不レ得、揚言命爲二流箭一墮、夜深決別伏劍出、一身潛匿免二萬死一、寄レ生唯在二雲外

山、行止不レ離榛莽間、渴飲二溪間一飢果實、寧知芝髓能駐レ顏、薜荔之衣葛蔓帶、麋鹿豺狼常爲レ班、春花爛熳秋葉赤、幾千甲子往復還、此身何曾生二羽翼一、峭壁絕巖不レ須レ攀、子來到レ此幸逢レ我、如レ他安知レ無二神姦一、名嶽之上異物紛、子行莫レ犯一魑魅群一、大坂客子謹奉レ敎、天明相辭下二白雲一、京人昔有二池無名一、喜探二奇勝一尋レ山行、曾在二富嶽一逢二此客一、親聞二是語一畏心生、入レ山不二敢仰一二山頂一、過レ林懼有二精靈鬪一、嘗來二齋頭一談二此奇一、夜窗燈孤光正熒、

元亨釋書に藏緣法師は神融の從弟なり北國のみ遊行し立山白山を修行の場とせしと云ふ又文覺上人登山の事は平家物語に見へたり又行脚の僧此山に禪定せしに奥州そとの濱の漁者の幽靈あらはれて古郷の妻子へ傳語しまるしに袖をさきわたせしといふ事善知鳥の謠にあり又池大雅堂しは〳〵登山し嚮本詩料をもとむ

○有領の事

有嶺は富山より十五里富山より水須まで七里爰に人留あり有嶺へ行ことを禁ず水須より八里人煙を絶ち其間笠ヶ峯まで四里登り極るなり有嶺三十家村をなせり一家を增すことならず故に家毎に二三の偶わりもとより他に緣を結ぶことなく一村の中にて嫁娶せり其住來る何れの時か詳らかならず平家の落人多く爰へ隱るといへり今なほ武具を傳ふ此郷盛夏ならざれば雪消へず故に五穀育せず家居も夏まで雪に埋もれわれば甚だ堅固に造作す藥なければ板にて覆ひ葺けり又人死せば自らの園地に葬り塚を築き其上へ灰を撒き其後灰に鳥の足跡蛇の過る痕などあれば亡者鳥になり蛇になりたりといひ佛などは信ぜず然れども上瀧大川寺檀となりて大川寺末寺西覺寺といへは爰にあり其外社人鍛治なども住せり加州の村吏など至れば先づ供饌に米を盛出せり之をくいつみといふ各二三粒も喰へば主客辭儀に及べり又男は皆百宦名女は袈裟などゝ名づく又一山芎藭を生じ夏に向ふて花咲き紅白相雜り見事なりといへり此處唐の朱陣村に同じもゑに白香山の詩をこゝに錄せり

徐州古澧縣有レ村曰二朱陣一、去レ縣百餘里、桑麻青氣氤、機梭聲札々、牛驢走紜々、女汲二澗中泉一、男採二山上薪一、縣遠官事少、山深人俗淳、有レ財不レ行レ商、有レ丁不レ入レ軍、家々守二村業一、白頭不レ出レ門、生爲二陣村民一、死爲二陣村塵一、田中老與レ幼、相見何欣々、一村唯兩姓、世々爲二婚姻一（其村唯朱陣二姓而已）親疎居有レ族、少長游有レ群、黃雞與二白酒一、歡會不隔旬、生者不二遠別一、嫁娶先近隣、死者不二遠葬一、墳墓多遶レ村、既安二生與レ死、不レ苦二形與一レ神、所以多二壽考一、往々見二玄孫一、我生二禮義鄉一、少小孤且貧、徒學辨二是非一、秖自取二辛勤一、世法貴二名敎一、士人重二冠婚一、以レ此自桎梏、信爲二大謬人一、十歲解レ讀レ書、十五能屬レ文、二十擧二秀才一、三十爲二諫臣一、下有二妻子累一、上有二君親恩一、承レ家與レ事レ國、望二此不肖身一、憶昨旅游初、迨今十五春、孤舟三適レ楚、羸馬四經レ秦、悲行有二饑色一、夜寢無二安魂一、東西不二暫住一、來往若二浮雲一、離亂失二故郷一、骨肉多二散分一、江南與二江北一、各有二平生親一、平生終日別、逝者隔レ年聞、朝憂臥至レ暮、夕哭座達レ晨、悲火燒二心曲一、愁霧侵二髮根一、一生苦如レ此、長羨陣村民、

○黑部山中の事

黒部の水源は信州より出て立山劔ヶ嶽の後を廻り北に流れ下黒部四十八瀬となり海に入り黒部山中千山万壑重疊して危險言ふべからず人行くこと難し木を伐る柚のみ深く到れり道はもとよりなし黒部川に傍ひ斷崖の上を攀ぢ過るに脚下數百仞目眩み股戰ふて進みがたし滑川河瀬屋某山中伐木の事を司り柚を多く雇ひ山林に斧を入れんとす時に風雲忽ち起り山谷鳴動せり是れ山靈天狗神のしからしむるなり是に於て柚の頭だつ者伐木の谷に向ひ今年の伐木上納金何百斤雜用何ほど此山木を伐らずして上納すべき事やある此谷を伐盡しても猶足らざること如此と大音にて十露盤を鳴らし其理を解は其夜風雲收り鳴動やみて寂然たり翌日斧を入るゝに何の害もなしといへり又伊折村源助といふ者柚の中にて魁首なり壯膽剛力にして常に山中に入り猛獸を多く殺せり或時又源助井戸菊水谷へ始て斧を入れ暮にむかつて風雲忽ち起り山壑鳴動せり時に柚皆次の谷の小屋へ歸りしが伊折村作兵衛少し後れけるを獸抓んで空に入らんとす源助は作兵衛がれくれたるをあやしみ立返りしがこの有様を見て打ち驚き飛上つて作兵衛が兩脚をつかんで引れろさんとす空中の獸放さず互に作兵衛を引ければ作兵衛生氣なく口より多く血を吐けり源助大音にれのれら作兵衛を渡さずば一々に攫み殺さん速に渡し去るべしといへども猶放さず源助大に怒り聲を限りに罵り叫びれのれ伊折村源助をれそれずして此山にすまんと思ふや若し作兵衛を殺さば是より毎日山中に入りれのれらも殘らず殺盡さんといふ時に獸去りしと覺て作兵衛下へ墮ち源助が脊に負ひ歸る作兵衛目口よりながれし血にて源助が總身朱に染まれり源助は作兵衛を呼び藥なぞ用ひ介抱しける

時夜半なりしゆゑ明くるを待ち居たり鬼がふずるまに夜も明ければ谷を隔たる柚も皆な來り是を視て共に介抱し水を飲せ食を與へなどゝしければ作兵衛生氣復しけり猶小屋に風さしめ犬に日にして快復せり源助其日猶休まず直に谷に入て木を伐る然れども源助の剛氣には獸もおそれて審をなさずとかや作兵衛を抓みしは彌々又猛獸の類なり猛獸とびへるは熊にして犬なり色黒からずよく風雲を起し虎豹に類するものなり寶暦十四年に松倉村の柚座主坊といふ所にて此獸を殺せり毛色茶にして斑紋あり長九尺許尾を合せて一丈七尺ありしとびへり又柚獸兵衛といふ者あり是柚又大膽不敵なる者なりしが山中に尤も畏るべきは蟒なりされども蟒は刀物嫌ふゆゑに柚みな常に山刀を腰にせり或時獸兵衛山刀を忘れて山中に入りしが壹丈ッ蛇に蟒追ふと見なして獸兵衛大に聲を揚て呼びける柚皆驚き仰ぎ見れば水を隔て獸兵衛向ふの岸を走せ廻るされども蟒の形見へず暗腥き風れこりて雲霧のごときものを吹めぐらす獸兵衛追れて樹に登ければ蟒も亦樹に上るとみゐしが獸兵衛大に叫び梢より飛れりし塗端蟒呑たるにや獸兵衛の影はみゐずなりにけり此餘山中奇怪なる事多し枚擧すべからず又加州の村吏に山廻りといふあり境を廻る者なり黒部山中へ入るには道をひらき川には大木を伐りて橋とし過ぐるなり信州境まで至るに種々の所あり赤牛ヶ嶽といふは朱の如く赤き山なり又半里四方も明攀ある山あり又半里餘も葱を生じ長六七尺許茅廟のごとし又水晶を生ずる山もあり一里許二尺廻りの竹あり又藥草多し是れは小又村の著子に語れり此都山廻りに從ひ兩三度も此所へ至りしが始め立山より入り信州境を廻りて有嶺より長戸へ出で歸る

といふ又或時杣多く山中に入り幽谷の樹を伐らんと其あたりに小屋を造り宿しけるが夢に異形のもの來り此谷の樹を伐る事なかれといふ夢見し杣醒めて皆に語りけれども取あげ用ゐる者なく遂に斧を入れ谷を伐盡しける其夜杣皆よく寢入ける時例の異形のもの又來り寢入し杣をひとり〳〵に口を塞ぐとみゐしが殘らず死したり夢見し杣は木を伐らざりしゐる殺さゞりしとみゆ潛かに見居けるがそのねそろしさいはんかたなく是より杣を止めしが個樣のともしば〳〵ありときけり

○四郡諸川

小矢部川

親部川は礪波郡にて親部村は今石動の川上にあり石動街道に橋あり水出づる時は橋の北に船渡しあり伏木放生津高岡木町より賈船を此橋下まで上ぼす親部水源は同郡刀利村樽尾峠又福光井浪城端山溪より出づる支流多し金澤より飛州高山への道淺野川湯涌道を登つて河北郡横谷村より此刀利を過ぎ大峠を踰へ五箇山赤尾村の關所又飛州境椿原の關兩所を越ゑて行く是を西道といふ金澤より赤尾村まで十三里赤尾より飛州高山まで廿里許合せて卅三里高山へは庄川の南東をさして行ぐなり又本道は礪波郡城端の奥二ッ屋村小瀬峠通りなり又石動より中田三戸田城生を踰行くは先年高山在番道なり又親部に落つる一川小瀬峠より出で瀬戸川原川大井川此川より瑪瑙出づ蓑谷川も合す蓑谷に木葉石を生ず取來れば必ず大風起るといへり此山の頂に繩ヶ池あり旱りには此池にて雩するとぞ又蛇節川院宣川各小杉の下にて落合ひ東に東城川あり井波東西山溪の水各上津村にて落合ふ又澁江川は安江邊石坂新村の東に流れ埴生の下にて合ひ此水源は金澤より福光を踰へ小又村より出づ又一川長坂の下一里塚本より砂川となり千石村を過ぎ嘉例谷村より出で小矢部川へ落つ又今石動乾の方氷見道上向田村巳の方より子撫川出で街道に橋あり此山溪を宗島谷といふ數村あり子撫川の上分流一派森屋村へ流れ一は栗柄村に入る此街道に橋あり橋の東にて小矢部川打ち合ひ上下泥川にて水出づる時は渉りがたし又此谷の奥は能州牛首村河井村なり此川加州高松寶達邊にも分流す是れ能州より石動へ越ゑる道なり又荒俣川古は千保川へ水多く流れ今入川なきゆゑ水溢れす其外東の用水清水川石動より高岡までながれ七瀬ほど渉たる下高田村にて小矢部川に入る又曾部川は戸出邊の山溪の水にて碩友和田新町の南を流れ西大源寺村にて小矢部に落つ此川の鰡は名物なり又一水は西山能州境澤村より流れて岩坪村の北にて落合ひ一水は千保川高岡入口橋下を流れ下は守護町の向ひにて皆小矢部川に入る此所に渡しあり是れ伏木守山氷見などの道なり

千保川

礪波郡千保川は庄川の支流なり庄川の南に金屋村北に庄村あり此所水急に流れ舴艋にて渡す庄岩辨才天の南北にて分れ東庄川大門村へ流れ南は千保川高岡兩橋の下を過ぎ守護町村の向ふにて小矢部川へ落る高岡木町の西に渡舟あり氷見伏木への街道なり川上庄村より千保川の流れ五里餘なり正保慶安の頃大田村の下柳瀬村川除年々普請ありといへども千保川へ水過半流入る時は高岡瑞龍寺境内へ水溢るゝゆゑ小松より御下知あり大石材木を以て堤を築防せらる奉行諸役人年々修理

を加ふれども猶水多く流れ入つて止まず度々老中より來りて下知せらるゝ是を柳瀬普請といふ其後寛文十年川除奉行喜多岡氏安江氏馬淵村田中村大境堅古しよりなる普請にて庄川を無理にせき東大門川へ水を落し入れ其後延寶貞享の頃より東庄川へ水多く流る然れども庄川出口にては先年より荒俣千保用水口あり是より千保荒俣川は水損なけれども荒俣川は別で用水の外水流入さるゝ時として水溢るゝことあり

庄　川

礪波郡に庄川あり庄川といふは谷口における村名によれり水源は飛州高山の西の方より出で北陸第三の大川なり飛州にて東南より西山下を過ぎ越中五箇山大谷にて東西に分流し東を楡川といふ楡川の水源は同所水無村より出で下仙納原村に落合ふ此川十里許あり庄川上飛州にて東神通川と水源二里餘を隔つ庄川は飛州にて山深く谷々より落ち集の黒谷川右の寺づき川又三里半下に尾土川二里餘下に大日川二里半下に荒谷川三里下に西の方飛州椿原村の北桂川あり又越中五箇山赤尾村關所の外に二川境川と云ふ飛越境谷より出で赤尾にて庄川上に落合ひ又境谷二派水源は加州白山續き中宮山の北瀬波山千丈ケ平の東より出づ境谷街道より三里許奥川を境に三村あり越中葛村飛驒葛村と稱す又赤尾の關は五箇山東西を此關にて固めたるものなり河東に街道なし東西村に籠の渡しの外道なし金澤より刀利を經て赤尾へ三里赤尾より三十里台せを三十三里なり又金澤より高山へ至る四ッの間道あり凡そ庄川は飛越兩國より出る川三十許合流し五箇山東西の間大川

籠の渡七箇所あり曾山村奥津島村猪谷村田向村細島村中田村皆籠の渡しなり又此川に上下橋四箇所五箇山の中に二ケ所仙納原東西下は大門新町能町にあり是より上を庄川といひ中ごろを中田川といふ支流を高山にて千保川といふ水出つる時は大門橋の西支流に舟橋あり能町の橋下には渡舟あり放生津伏木にいたる此水邊所々に小舟を以て渡す步渉りならざる川なり礪波郡射水郡西山谷々の流都て小矢部川へ落ち伏木の上にて庄川へ落合ふ故に北陸の大川なり昔源義經奥州下の時伏木の湊にて舟賃に千染の袴を與へ給ふといへり此渡の向に放生津といふあり八幡の社は藤原家持領主たる時此社にて放生會を行なひ給ふゆゑに所の名とす此湊より西北の方氷見浦まで三里入海なり此間に名所多し磯の海も此あたりなり又氷見の北に島廿一あり七尾湊へ續いて入海なり又能州奥郡三崎浦へもうらつゞきなり氷見の辰巳に濱あり布勢の湖といふ鯔蜆なゝを名物とす唐島岩崎奈古の浦の名所あり此濱の水は氷見町中より海に入る橋あり庄川水源飛州より北海まで四十里許あり

和田川

射水郡に和田川あり今石動より富山街道中田の東に流る此川は婦負郡山田村の辰巳より出で芹谷野西南東北を流れ廻りて圓池村北に橋あり關口村にて庄川へ落合ひ芹谷野向に神保安藝守氏長の城墟あり上杉謙信攻め屠る其以前爲景謀ことに陷りこゝにて死せり

神通川

神通川は新川郡婦負郡を堺して流る北陸第二の大川なり第一とするは越後新潟川なり神通水源は飛州高山東より出る岩宮川町野川なり又一川三日市川出で奥の谷は城下の坤の方にて其中なる西峠より一川出づ此川の中に神通といふ所あるより川の名とす高山より富山まで道程二十二里二丁右の川に高山城下の乾の方にて落合ふ高山北に街道あり猪谷道東より一川出づ是を古川といふ又湯谷とも云ふ此川は信州境飛騨の地蒲田の湯谷より出で越中猪谷御關所の兩街道高原村末にて神通川に落合ふ同所に橋あり此川の源は信州鎗ヶ嶽の南より出で街道より山までは九里あり又一川百瀬川といふ是は五箇山の中百瀬村の山より東神通川へ入る此谷の内十里許あり上にては百瀬川下にては山田川といふ富山船橋十五町上にて落合ひ百瀬山林多し五箇の水は都て庄川へ落れども此百瀬川は庄川の内栂川の東九里塔村より出で婦負郡へ流る又西岩瀬村の奥より一川出で東谷野よりも一川出づ右二川の間に又一川奔流箭の如く長川原村の向にて落合ふ又一川節入谷より出で一川五味谷より出で八尾東艮方にて落合へり右の川々都て下神通へ入る又新川郡熊野川は富山の南を流れて坤さるの方にて神通へ落合ひ常願寺川支流用水の流れは馬瀬口より入て岩木村にながる井立川といふ此川新保の上より入て下は富山古川町の下にて神通川に入り又常願寺川支流西方へ一川ながる赤井川といふ富山領境なり上は栗田村より分れて荒川といふ新庄入口に橋あり此川上は流杉村より入る洪水にて入川すれば島の内田畠損耗多し併し富山金澤御領兩所の用水ゆゑ川口をとひることならず此の水下は奥田村東にて右の二川ともに神通川へ落つ如此衆水合下東岩瀬の湊へながれ北海に入る

加州より飛州高山へ至る四道あり西に一道今石動より中田村水戸田荒町村八尾まで行き婦負郡川端七ヶ村を過ぎ加賀澤村關所を經て三河原村神通川を渡り向枚戸村を過ぐ又川端八ヶ村を過ぎ高山へ至る又一道八尾村通西山の中を行く此道は富山領赤原村關所を踰ゑて飛州切留村の向一本橋をわたり小無雁村の東に渉瀬あり又一道は富山より布市村陀羅尼寺村小黒村通り東川端十四ヶ村を過ぎ猪谷村關所を踰ゑ荒木村より高山へ至る又西に一道加州より越中刃利を過ぐ是れは間道ゆへ記さず富山より高山へ二十一里十八丁あり

常願寺川

常願寺川は新川郡にあり新庄の東に常願寺村あるにより名づくといへり水源は立山にて左は勝妙瀧より落ち勝妙川といふ又立山眞砂ヶ嶽の流又地獄谷の流れなり又右に湯川といふあり東南の三谷は伽羅陀山への腰越より出づ此谷の南に温泉あり夏中入湯の者多し温泉への道は松尾といふ坂にて上り下り三里餘あり是れを踰ゆれば湯に至る故に南北の川平岩の下にて落合ふ又南に一川あり金剛寺川と云ふ内尾の水有嶺村へ出でて流る内流は加賀飛騨領境なり下は水須村へ流れ芦峅村の向にて常願寺川に入る水須村に關所あり飛州幷に遠山へ往還の人を監察す又南獄谷より北芦峅に藤橋二箇所あり又一川目桑谷より出て伊勢屋村曲淵村の間にて常願寺川へ入る常願寺本名は立山川なり立山は日本に三つの高山なれども白山とは違ひ溪谷多からずして流水少きゆゑ北陸五六

番の川なり又一川大岩川上は大澤より出で下新庄村西にて目桑川へ落つ常願寺川北海に入るまで上より十八九里

加茂宮川

加茂宮川は滑川の南にあり街道に橋あり橋畔に加茂大明神の社あるによつて名とす宮の西海に近し山より海まで十三里許此川源は立山又は劔ヶ嶽の南谷より出で仙石村を過ぐ此川所によつて名を異にせり滑川にては加茂の宮川又小出川上市川眼目川ともいふ南の方に又一川あり若狭川といふ又辰巳に一川あり大岩川といふ同所北の山谷に又一川あり白岩川とす右三川上市村の坤の方にて若狭川は上座主坊の布倉ヶ嶽より出づ此山は諸國に希れなり一つ山にて急なること手を立てたるが如しもろに人登る事難し新庄邊又水橋街道高原の邊よりみゆる山なり岩峠に近し又大岩山は行基菩薩彫刻の不動尊立給ふ此所を冥加谷といふ小松利常公御代犬千代君御祈願料として同村高の内を以て田地二十石の所を寄附せらる右三つの川上市村字里許下坤の方にて加茂宮川へ落つ又此あたり眼目山は古唄華山と號す曹洞宗峨山和尚の弟子大徹和尚の開基なり立川寺と號す和尚在世の間奇異の事多し大德なればなり右の川源よりして西海に入まで七八里

早月川

早月川魚津より五丁許住吉村の南にある街道にて歩渉りにす水出る時は南北の村より川渡人夫を出す早瀬にて石を轉ばし流す舟にて渡すことわたはず洪水の時は街道に溢れ四ヶ所に分流し高塚村三ヶ村の間へ落つ海近し水源は松倉の奥山古鹿熊村より出づ魚津より松倉へ二道あり各五里鹿熊村は先年金鑿屋敬の高として少々田畠あり松倉深山もろ人猿のごとし炭を焼き厥狗脊を採て營みとす早月谷よりこゝに至る道わしく冬は通路なりがたし故に魚津の巽の方より宮津村の東峻山を踰ゑ往來す三里半あり甚だ艱險なり魚津より峠へ二里半峠より村へ一里雪深き年は田畠熟せず椎名恭種が松倉の古城も此峠の西の高山なり天正の初上杉謙信越中へ出陣の時落城す古は今の山の頂を往來せしと見えて山を切り平均惣側もあり城の下西切道と云ふ所に川あり是は立山劔ヶ嶽の西より出で山中猿多し田畠をあらす此より西海に至る七里許

片貝川

魚津宿の北にあり流れ急に石を轉す水出る時は街道も石川の南北村より川渡人夫を出す舟にて渡すことわたはず水源は又立山劔ヶ嶽の北より出る蓬澤村大菅沼よりも出で島尾村東北を流れ廻りてこゝに至る片貝谷檜杉を生じて麻のごとく茂密なり大さ皆數圍の良材を出す又毎年魚津町薪木呂も伐出せり川はこゝより辰の方へいたり又乾へ流る海まで八里餘あり

布施川

同郡にあり流れ急にして都て片貝川に同じ水源は笠破村の奥山より出で大海寺野の北をめぐり石田村の上にて片貝川に合す山より海まで七里

黒部川

水源は上にては東西へ分流し一は東信州山の西より出で一は越中飛州信州の山境赤牛といふ所より出づ越中内山村の外に人里なきゆゑ遠山のこと詳らかならず黒部川所々徒渉り舟にて渡すことあたはず流筏よりも疾し洪水の時は四十八瀬に分流すといへり故に往來の人こゝに久しく滯留して難儀せしより万治年中三日市村より泊の間浦山舟見にも各新宿を置き愛本の川に橋を架す山間流れ急にして柱立たず材木を兩崖より搭ひ重疊して橋中高く起ち虹のごとく長さ三十三間水際まで數十丈日本に稀なる橋なり此川南より北へ流れ橋より下は西をさして流る上より海に至る十七八里許黒部山中杉檜槻槙等の樹多し人倫絶へたる處ゆゑ浩る良材を伐出すことならず惜むべし此川上に信州へ至る間道あり

小　川

舟見村の北にあり徒渉りなり水源は蛭谷村の奥小川の湯谷より出で春日村赤川の間に落つ此川上往來の道あり小川の奥にては是を赤川といふこゝに生ずる鮭魚は名物なり大にして味ひ他に勝れり

境　川

徒渉りなり此川は石高く瀬のはやきこと箭を射るごとし西へ流れて海に近し堺村の北にあり御關所は村中にあり水源は大平寺といふ山の溪より出で街道より拾丁餘是までは加州領なり左は有家村上路村にて越後高田領なり街道より三十丁許り此谷よりも流れて境川へ入れり海まで四里許り小川大ならざれどもみだりに渡りかたし堺村の西向ひは能州奥郡小木村の湊となり海上廿五里荻村は宇出津より一里半北なり

○御領村名

新川郡奥田庄十六箇村

奥田村　上奥井村　西川原村　下奥井村　下奥井新村　奥田下新村
下桑原村　下赤江村　西田村　窪村　上赤江村　稲荷村
鶴田村　中島村

内牛島一ヶ村神通川を隔てり加州御領上下赤江村奥田庄の内なり三十年前廣田郷に改むる

山室郷四箇村

清水村　公文名村　雙代村　高木村

大田保七十箇村

西田地方　東田地方　根塚村　二口村　中野村　小泉村
大町村　下堀村　上堀村　小杉村　布市村　陀羅尼寺村
金屋村　經力村　吉岡村　森田村　下千俵村　林崎村
青柳新村　牧田村　青柳村　大井村　今町村　福澤村
中布目村　上布目村　江本村　上千俵村　月岡村　稲野村
月岡新村　桑原村　下大浦村　田中村　黒牧村　中大浦村
上大浦村　田島村　文珠寺村　大塙新村　新保村　本郷村
大泉村　黒牧村　本郷下新村　太郎丸村　今泉村　下懸尾村

上懸尾村　袋　村　赤田村　二俣村　石田村　古上野村
磯部村　布瀬村　島黒瀬村　和田村　和田新村　上轡田村
上轡田新村　増田村　下轡田村　下板倉村　東本郷村　西本郷村
羽根村　羽根新村　高田村　高田新村

大田保之内三室郷三箇村

花崎村　小原屋村　荒屋村

三室郷加州御領にあり万治二年新川郡御替地の時分れ村なり

大田保之内熊野郷九箇村

小中村　上熊野村　下熊野村　安養寺村　辰尾村　辰尾新村
宮保村　悪王寺村　杉瀬村

大田保之内八川郷六箇村

關村　中屋村　下番村　善名村　下馬瀬口村　上馬瀬口村

八川郷加州御領にもあり先年御替地の時分れたり

大田保之内蜷川郷三箇村

最勝寺村　八日町村　黒崎村

宮川郷三十八箇村

八木山村　合田村　長走村　岩木村　塩村　神通村
大利新村　福居村　押上村　吉倉村　中田村　惣在寺村
栗山村　任海村　友杉村　島田村　新保村　秋ケ島村
経田村　荒屋村　才覺寺村　萩原村　東塚原村　西塚原村
野替村　鵜坂村　鵜坂新村　分田村　上田島村　宮ケ島村
見角村　田島村　下野村　下野新村　庄高田村　有澤村
添島村　板倉村

婦負郡万見郷二十九箇村

愛宕　石坂新村　石坂村　駒見村　田刈屋村　百塚村
五艘村　安養寺村　山岸村　四ッ屋村　松木村　本庄村
宮尾村　田尻村　寺島村　八幡村　布目村　今市村
草島村　荒屋村　窪村　西岩瀬　四方　四方新
折出村　打出新村　鵜島村　畠中　舟橋町

宮川郷幷に大田保村に神通川隔て天正十三年洪水見角川東へ入川になり島黒瀬村下黒瀬村西塚原村東塚原村秋ケ島野替村と川を隔て又元和元年熊野川洪水友杉村入川になり島田ケ一村熊野川を隔て東にあり

倉垣庄十箇村

針原村　林崎村　針原新村　百塚新村　北代村　北代新村
八町村　利波新村　針山新村　練合村　倉垣庄加州御領にもあり

婦負郡

中沖村　大塚村　本郷村　野口村　野村　二ッ屋村
高木村　小竹村　吉作村　住吉村　三ッ屋村　峠茶屋

追分茶屋

長澤郷三十四箇村

呉服村　寺町村　金屋村　小泉村　安田村　安田新村
杉谷村　平岡村　鹽野村　小長澤村　長澤新村　友坂村
下條村　下　村　羽根村　長澤村　古澤村　朽谷村
花木村　北押川村　西押川村　土代村　押川新村　土代新村
椎木村　吉野村　山本村　山本新村　北野村　川原町村
蓮花寺村　坂下新村　富崎村　三ノ熊村

爲成郷十七箇村

坪野村　海川原村　砂子田村　板倉村　袋　村　藏島村
持田村　中名村　荻島村　道喜島村　堀　村　十五丁村
爲成新村　道場村　清水村　新屋村　下井澤村

山田郷四十三箇村

平等村　宮谷村　高塚村　告谷村　告住村　鵜谷村
加例谷村　牛滑村　葎ヶ原　大瀬ヶ谷　沼又村　山田牧村
清水村　今山田村　東谷村　中尾村　下瀬村　三ッ屋
外輪野　押　場　上瀬　白井谷　小島村
中　村　北　山　湯　押　村　小谷　赤目谷　三ノ瀬
道島上野　皆枚村　中瀬鎌倉　若土
谷村高峯　鍋谷　敷納深谷　高清水

高山

田中郷五十四箇村

小川子村　中野島　高田　田下　吉田　上吉川村　吉川新
澤田　大坪村　森田村　平林　高日附　鉾木　道
千坊寺　新山　百山　三田　奥田　熊野　妙川寺
奥田新　小倉　翠尾　館本郷　水谷
福島　下高善寺　宿坊　上高善寺　石戸

是より中野積谷

高橋　柴橋　高熊　谷内　上野　野須　江
峯上ノ名　窪須　細江　瀧竹　内
下ノ名　柚木宮ヶ嶋　天池　尾　久
高尾和山北袋　坂下村　尾　中村

楡原保百四十七箇村

下井澤　笹倉麥島　笹倉新　上井澤　田屋新
田屋余川島　余川新　濱子寺家
黒田井田丸中島　井田新　小長谷　小長谷新
村杉樫山　田新　外面谷　宮屋
掛尾岩屋　谷村　瀧谷桐　脇小井澤
畠上黒瀬泉　角間　大杉廣田
上笹原下笹原名ヶ原　戒子　西神通　中神通
横野杉田薄島

城生野飼下深谷深谷井栗谷葛原
治部川原北谷板下根上土村下伏
小羽長川原須原笹津岩稲割山
楡原花谷片懸猪谷蟹寺加賀澤
野積谷の内川住岩島布谷谷折下仁歩
上中山土下薄尾花谷杉ヶ平等桐詰
瀧谷夏前在原新屋三松枥折
上玉生小畠尾畑島地上牧安澤谷
一後谷二ッ屋横平山中花房清水
上仁歩谷入谷鼠谷草迎倉ヶ谷吉友
平澤無道原茗ヶ島大玉生桂原栗須
赤石獵師原西松瀬東松瀬新名高嶺
西葛坂上田地油村東布谷東川倉下牧
水口西川倉高ノ下上ヶ島道畠下中山
八十島東葛坂上乘嶺青根下田地下乘嶺
追分大道高瀬小谷足谷八尾町
田頭内名野中島地下島地小無
西ヶ原川内専澤

上井澤村先年井田川洪水入川になり一ヶ村井田川の西にあり右村數の内八十ヶ村野積谷より谷中へ入込楡原保の内なり此中足谷村大道村追分村高瀬村野積谷室牧の川の西へ隔たり田中郷の内へ

入交

野積谷古より國司守護の領にあらず
禁裏へ金子糸綿蠟等貢候故公卿御才許にて京都へ上せ候に付御綸符を下しれかる今に枥折村武藤孫助末孫加例谷小右衛門方に四枚所持二枚は菊の御紋二枚は桐の御紋なり御領となり初會所才許の所百姓願によつて渡部助右衛門代官となる後助右衛門我儘なる事重り斷絶す居屋敷は大田口亀澤向門のある所のよし

野積谷室牧

高熊高橋柴橋竹内谷内宮ヶ島
尾久窪天池追分馬瀬柚木
足谷大道下名上名須口嶺袋坂下高尾上野
野須口和山北
細瀧

仁ノ谷長谷

切谷杉ヶ平瀧谷廣谷夏所爾平
新屋納ヶ原田順野内名島地尾
清水花房上杉一後谷薄尾
谷安澤谷二ッ屋横平上中山栗澤朽水
名ヶ島土玉生下畠尾畠無道原倉谷
谷水三杉鼠谷草連入谷上仁歩

下仁歩　大下仁歩

東野積谷

獵師原　桂原　西松瀬　赤名布谷　赤川倉
川桂岩島水口　上ヶ島宮ヶ下道島
下中山青根乘嶺　新名高嶺下乘嶺
八十島上田地東葛坂　油

御領之外新川射水礪波郡村名を記さず

和漢三才圖繪越中四郡五十三万六千三十七石

土産

鹽　黄連 立山　鉛 熱谷　八掃布 今石動　琢砂 栗ノ浦　松波鮓 俗呼日ニ鮓一　九万疋 一名志賀瓦

絹 出二射水郡一

○古城事跡神社佛閣

新川郡

富山御城 號二安住城一

水越越前守繩張と御ふれど何人か不詳なり御城地古へ藤井村安住村といふ兩村にかゝり其初め神保二三代居住せり

町名

一番町　二番町　西町　中町　袋町　東四十物町
大田口町　室屋町　中野町　餌指町　中野新町　石倉町
古鍛治町　古寺町　西南田町　砂町　東西田町　海老町
南新町　立町　五番町　仁右衛門町　西三番町　川端町
東三番町　今町　鍛治町　荒町　材木町　木町
西堤町　今木町　東堤町　川原町　新川原町　小島町
先上リ立町　向川原町　東田町　北新町　東中間町　柳町
稲荷町　横町　覺中町　清水上町　風呂屋町　米屋町
寺内町　片原町　北横町　八人町　中島町　古川町
西中間町　後町　下金屋町　上金屋町　黒木町　宗爲町
山王町　門前町　木場川原町　太一夫町　東散地町
南田町散地　中野散地町　南新町散地

右南御門より東の方

越前町　旅籠町　西四十物町　千石町　平吹町　御坊町
土居原町　長柄町　堀端町　鉄炮町　長清寺町　七間町
右南御門より西

船頭町　愛宕町　今町　船橋新町　五福新町

愛宕町中へ御郡地入込

町總計九拾壹名

稲野若水と云ふ者越中にあり本草に通ず著述書八百卷、加州公より御扶持賜はる後ち京都に住す

越中に門人堅中といふ者あり亦本草に委し其の住せし後を覺中町と稱す

越中に四ッの名水あり藤の井、花の井、桃の井、櫻井なり藤井は御城中にあり花の井は愛宕神社の西方にありといへり習一國師越中へ來り弘長二年石坂に一寺を建立して愛宕權現を鎮守とし愛宕山土代寺と號す後今の所へ移る國師名水あるを知て御手洗とし又祈禱などを書する硯水に用ゆといへり桃の井は今遍照寺屋鋪にあり貞享の頃永井源兵衛此に住せり時に此井あり清き水にて煎藥の水茶の湯などに汲めり櫻井は新川郡櫻井の庄にありしとなり今三日市邊なりと云ふ

杉内といふは佐々の臣杉内林太夫といふ者住せし所ゆゑ名となりしとぞ其頃圓隆寺の後に牢あり新町橋より南横に道ありしゆゑ今に新町橋を牢橋といへり又大田口は町端にて里人など町へ入るに今遍照寺前の川にて洗足せしゆゑ足洗川といふ又此川の邊にてひかし狐狸しば〳〵人を魅ければ佛眼親王御領たる時に石に佛像を刻みて橋とし供養あり漸く其事やみしとぞ

延喜式神祇越中卅四座 大一座 小卅三座

婦負郡七座

姉倉比賣神社　白鳥神社　速星神社　多久比禮志神社
熊野神社　鵜坂神社　杉原神社

新川郡七座

神度神社　建石勝神社　櫟原神社　八心大市比古神社
日置神社　布勢神社　雄山神社

射水郡十三座 大一座 小十二座

射水神社　道神社　物部神社　加久彌神社 二座
久目神社　布勢神社　速川神社　櫛神社
磯部神社　箭代神社　草岡神社　氣多神社

礪波郡七座

高瀬神社　長岡神社　林神社　比賣神社
雄神神社　荆波神社　淺井神社
山王權現　稻荷　平尾大和

[7] 佐々成政富山居城の時城内の山王を今の所へ移し富山氏神とせり御城地初め藤井村の時富山寺あり山王鎮守なりしかば普泉寺町へ移りしかども山王祭禮には舊によつて富山寺御旅屋となり神輿行幸のよし　正甫公御代富山の宇普泉と改まれり

神明　吉尾伊勢
中神明　近尾河内
天滿宮　淨禪寺
白山權現　平尾壹岐
鹿島大明神　近尾河内
祇園　圓隆寺

愛宕

稲荷 稲荷町

稲荷 千石町 熊野堀之左衛門稲荷と云

神明

諏訪大明神 諏訪河原

普泉寺 真言宗 加賀大納言様より寺地拝領後御印書燒失中納言様御代住侶金澤へ至り燒失のよし申上げ御聽に達し如前寺地拝領せり

宥照寺 明智日向守の墓あり是は明智三成弟僧となり宥照寺住侶たりし故に墓を築き供養すとい ふ

光嚴寺 禪宗 增山より富山へ移り瑞龍院様より清水寺地拝領せり龍光院様御入國微妙院様 天德院様

御位牌御安置其後今の所へ移る寛文三年寺地御寄附御印書あり又寛文十一年天德院様五十四回忌御法事之時增地拝領印書あり

海岸寺 江湖興行に付寛永十四年中納言様より寺地拝領御印書あり寛文三年龍光院様より如先規幷領せり左の如し

當寺敷地千三百歩之所永代令寄附訖佛事勤行不可有怠慢者也

不動院

本住院

祐眞院

吉尾伊勢

近尾河内

御印寛文三年十二月九日

補陀山 梅岸寺

蓮華寺 婦負郡蓮華寺村にあり富山へ移る神保佐々寺内の割札今にあり

極樂寺五箇所 佛眼妙心親王開基御像御履等あり寺町極樂寺富山守山高岡又金澤各二ヶ寺あり皆佛眼親王開基なり

蓮臺寺 吉野屋慶壽建立千佛堂あり元錄三年 正甫院様御墨付あり

長源寺 二代細川越中守殿二男住職了恩といふ籤具足等相傳ふ六代住職了勝は長崎新次郎といふ

大閤秀吉公御一行二通 高德院様御一行今に所持せり左の如し

爲扶助丹波國桑田郡湯井村之内を以て貳百五拾石城州水主村之内を以て百五拾石都合四百石全領知不可有相違之狀如件

天正十一月八日

筑前守 秀吉 判

長崎新次郎殿

爲扶助四百石進候内丹州桑田郡湯井村内を以て貳百石申付候此外百五拾石者於山城表重而可進置候恐々謹言

天正十九月廿五日

筑前守 秀吉 判

長崎新次郎殿

能加之内より以六百俵令扶助畢全可爲知行之狀依て如件

天正十八極月五日　　利家御朱印
　　長崎新次郎殿

願海寺　先住賢周は菊地伊豆守嫡孫にて二歳の時火吉六郎病死母抱て願海寺へ嫁す後住職となる、
瑞龍院様　龍光院様御印背あり左の如し
越中國縄打之内をもつて千俵之所令扶持訖全可爲知行之狀如件
　　文祿五九月九日　　御名御判
　　菊地吉六殿

慶聲寺　太田重左衛門爲基所寺地拜領
極性寺　醍醐帝御宇藤原穩子基經の三男德麿呂十七歳にして剃髪延喜以來越中新川郡に住す　天皇勅書の額あり館定山と號す七世慧明院鸞師に値ひ數々問答して一向宗に轉じ弟子となる是を敎順坊といふ八世信空坊友杉村に寺を移す應永十七年兵火に羅り後富山へ移る
專福寺　平惟盛の太刀源空上人筆幡あり
覺證寺　龍光院様御小性橋本主殿明暦三年死す此寺に葬る其後主殿伯父信州戸隱山圓德院來て主殿爲苦提法串勤行且願候て千歩寺地寄附
大法寺日蓮宗　元祿三年從正甫院様寺地拜領
淨禪寺　天滿宮畫像法性坊筆意筆といふ初め鮏川端にあり元祿中鮏川洪水其後柳町へ移る

神社佛閣多くして收擧すべからず事あるは猶四郡條下に記す
稻荷村城　稻荷社地の邊に土居あり巽に郭跡あり疑ふらくは豐田城攻の時謙信本陣掘上なりしや
父老云天正年中謙信一夜に築く
荒川天神少彦名命天正年中佐々成政再興新庄城砦よりは大なり郡主の城ならん
父老云轡田備後守（七寸五分か）井上肥後守主たり（八代興後が天正七年佛生寺砦にて打死す後又黄門利常公の御旅屋修造ゆゑ古城繩張混雜す又尻亟坂の邊にひや橋といふあり又此邊に淨土寺と云あり經堂ありし所を今經堂村といふ淨土寺阿彌陀は寺内淨誓寺に傳ふ又路傍の石碑も淨土寺の碑と云ふ
豐田城　今田畑となる本城と覺しき所南西に土居堀跡あり西の方土居の内古樹多し春は櫻多く咲て甚だ佳觀なり巽に當り首塚のごとくなる物あり本丸四十八九間大屋布搏へなりしや繩張杯する所なし父老云成政の臣竹島五郎左衛門又丹羽權平住す
東岩瀬城　永正二年亦河出雲守久次住す長尾爲景の旗下金子監物に討たれ落城又藤澤弼次右衛門住す
日方江城　江上重左衛門住す
大村城　轡田豐後守住す長榎五ヶの内なり今寺地となる豐後の從四家農となり今にあり
水橋城　水橋將監住すと云ふ義經奥州下りの時に此水橋安藝守といふあり其後なるや黑部山中に

水橋五郎太夫と云者安藝守後なりといふ爐炭燒を業とす椿葉松杉笹梅花の枝などを燒けり當地村上清兵衛も其後と云ふ

滑川城　加州領となり今枝内記住す

有金村城　佐々喜左衛門住す

上梅澤村城　主不知

小井手城　平城多は田畠となる本丸に唐人兵庫屋敷といふあり後は泥なり

池田城　土肥家記天正五年六月十一日市田古城迫合の時有澤采女鉛を合すとあり池田とゝなへ似たり誤りか父老云金森住す

東馬場城　本朝三國志天正七年六月長九郎左閘門重迹弟幸恩寺還俗して三宅と戰ひ大に勝ち佛生寺の砦を破り八伏川小竹東馬場兩城をも屠ると云ふ

館城　主不知

魚津城　西南沼澤東平地北は海堅固の地なり加州領となり村井豐後守長賴住す村井は金澤城代なるもゑ城生より青山佐渡來り住す

松倉城　鹿熊城金山城とも云ふ北陸の名城なり北高さ五百七十間西高さ六百四十八間角川を帶び東山峙迹

天神山城　小川山人なり前に片貝川なり

松倉　義弘といふ鍛治住す畠山二ノ丸といふ太刀の作者なり

吉祥寺　今村里田畠となり寺跡今に礎殘れり又大岩野といふも田畠となれり

からかしら谷　浦山の上なり大なる巖洞に人の手足の痕馬の蹄の痕あり是は上古强狗良と云ふ賊の住たる所なりと云ひ誤れり

升形山城　西東は高山峙ち南北は斷壁なり早月川を帶び應永二年六月二日岡崎四郎義村入城天正年中謙信攻陷すといふ義村未子魚津に流浪其後島の内宮ヶ島へ移り西本郷藤右衛門といへり又佐々新左衛門竹内宮内住す

堀江村城　土肥但馬守居住

井口城　生地の事か不詳

南保館　南保彌五右衛門住す宮崎太郎嫡入膳太郎安家叔父南保次郎家隆と源平盛衰記に見へたり此南保住せし所なるや

泊荒山城　甲州武田信玄より足輕大將を居けるが謙信より追拂ひ越後の將入る佐々の時前野小兵衛住す加州御領となり小塚權太夫住す

大屋庄村館　井口藏人居住

境御關所　越中越後境

宮崎城　山城なり北越太平記永祿六年九月鎌信境川の砦修理今境の屋敷構の所か又宮崎の砦か

弓庄城　柿澤村南東なり土肥四五代住す

佛生寺城　高野無量寺より南東に本城の跡あり北東に土居あり若狭川を北東に帶ひ堅固なり土居堀の跡所々にあるといへども多くは田畠となる平城と見る細川曾十郎住す日本百將傳に足利尼張守高經の下司細川出羽守鹿草彦太郎なりと云ふ總見記文正の頃斯波武衛義廉に六臣あり鹿草出羽二宮織田彈正三郎敏定朝倉新兵衛尉貞直甲斐刑部左衛門尉清宗細川とあり越中へは鹿島二宮細川下ると見へたり三家絶へ三家存す通記には鹿草彦太郎朝倉彈正甲斐左近細川出羽とあり

眼目　立川寺大徹和尚開基此寺へ龍女來て傳法し布施とし袈裟を納む世に比ひなし又土肥の菩提寺境墓ありと云ふ

大岩山　日石寺不動明王行基菩薩彫刻

明日觀音春日作　法福寺千光坊古跡なり仁王は弘法大師作といへり

日中村　日置神社あり式内なり日置寺あり古は日置大社にて堂宇多し今に礎あり又佐々成政附城あり

森尻村　神度神社は式内なり古立山の前堂といふ今に礎殘れり

野島村　上市川岸に大なる巖あり岩出ヶ端といふ佛像文字あり

蓑輪村胡麻堂村入合山の中に蓑輪五郎左衛門城跡あり

早月谷の中入合に長十五間許幅十間許の石あり昔は石上菊花多く咲きしもゝ菊石と云ふ

黑谷村山女村入合山の中に佛ヶ巖と云ふあり又此に寺あり大威德明王の金佛あり

三日市　村家に柿木あり昔親鸞上人越後へ下り給ふ時辻と云ふ者の方に宿し給ふ時に柿を上り候へば上人其實を植ゑれくべしと仰せられ則ち植置きしに柿三本生じ他にまさり多く實を結ぶ是を三本柿と云後二本枯れて今尚一本あり辻は即ち此村家の告なりといへり

町村　景清の墓あり越後景虎の類葉なるや

大田本郷館梶田新五居す齊藤新五の事なり齊藤梶田ともいふ

觀音院　万治二年大田本郷東西兩村御領分け有之刀尾權現水上觀音兩所氏神に相分つべく氏子共闘取いたし水上觀音西本郷村氏神に取當る其節河原の内三千歩爲宮地拜領

今泉城　本丸縄張乱れて堀土居正しからず郭配も見へず太郎丸村は嫡子郭と見る田地方神明は城の外搆鬼門の鎮守と見へたり其の邊の小川を惣搆といふは今泉の外搆にして富山城の外搆とは見へず澁谷筑前守秋貞勢を入置きしに松倉の河田豐前守に攻められ天正六年五月五日落城其跡へ越後志賀兵部へ入れりといふ

最勝寺領蜷川村　土居堀田の畔に交る蜷川氏墓所に大なる板あり此を追手といふ居館の追手なるや

興國寺布市村　桃井直藤菩提寺開山秀峯尤奇和尚佛生寺細川領主たる時守佛を納む主方領となり二百石寺領を寄附土方能州へ替地ありて寺領なし時に住僧天逝故ありて富山へ出で一禪寺を建立し布市の寺は弟子柱滝に讓る

大安寺　布目村

瑞龍院様新川郡御巡行寺へ御休時に境内拜領御印書あり微妙院様御代地子米御免

其許寺中竹木幷に石垣以下あかし候者可爲曲事候手切なしにむさと申候て能越者有候はゞ押へ置此方へ案内可被申候謹言

五月廿九日　　利長　判

布目村大安寺

福圓寺　大浦村　　大浦保内福圓寺

禁制

一甲乙人等乱入狼藉の事

一剪取竹木荒菜園事

一號國方衣冠之人ゟ非分之儀申懸事

一俗人寄宿當寺の事

一寺内に放牛馬事

右條々堅令停止若有違犯輩者可被處嚴科者也依下知如件

明應八年五月廿四日　　越前守判　細川なるべし

月岡　檀の圓城院城跡なるや土人云御分國の頃山本清三郎住す堀掘上あり

岩木砦　岩城村の東鹽村の西なり後は大峪にて下に細道あり神通川を帶び城生城の附城と見ゆ中央八間四方土居堀あり

上掛尾村　日養寺神宮寺　聖武帝日本に七箇寺神宮寺御建立あり其一寺と云ふ

懸尾村　野上五郎右衛門と云郷士布市村加藤大炊介布目村黒尾喜左衛門袋村小林某四人織田方松倉攻の時大勢を卒なて後援し大に働き各功ありければ信長公より賞あり御朱印を給はる野上の後富山野上屋方に傳ふといへり

城生城　南西は深山北は山續三方大峪數十丈東神通川を帶びたり甲州家に貴ふ繩合見ゆ

西勝寺　婦負郡井田村に住せしが文錄二年城生主青山佐渡守寺地を與へ城生城下に移る其後城生村立いたし今の所へ移る

津毛城　福澤村の上なり熊野川を帶ふ

樫木城　黒牧谷巽山に入ること一里六七丁桃村邊なり鎌信の將村田與十郎住す

中地山　血懸村の南小袁喰田にあり

上熊野城　二宮右衛門太夫住す斯波の臣なり

戸川城　梅尾城とも云ふ市場村東山城にて穴あり四五丁横に道あり中に蝙蝠多く山下藏屋敷跡あり市場村下北に連なり屋敷跡多く此邊を掘れば骸骨出づ

猿倉城　戸川城へ十丁許寺家村へ半里餘飛州咽喉東西峠路の樞要なり岩稻楡原笹津眼下なり坂本

寺家市場三ヶ村を船倉といふ寺島三八郎住すといふ

婦負郡

楡原城　上行寺境内にあるは屋敷構なり寺を去ること一丁餘山上に城あり土人附城といふ又山上に城あり見ざるもなに其地理を知らず考ふるに屋敷構は常居にして山城は事ある時に籠るならんか城主は島山義則にて寺境内に島山墳墓あり山城は屋敷構の西南にあり此城の北に堀一筋ありて山上は平なり後は石繰谷と云ひ絶險なり麓に鎌の町あり又屋敷跡もあり

予曾て南山に遊行す記あり左に錄す是を以て山中の事大略知るべし

南山遊行記

富城南行三十里、有二高原一曰二鹽野一、松林夾レ徑窈窕幽邃、經二過此中二二十里許一、漸入二千岳麓一、有レ村曰二東條津一、離レ郡忽仰二兩山一聳立、其間豁然有レ川、是通津也、藍流勢峻盪激暴盤二其涯一、水深千尺、石皆欝然負土、相連若二頻額一　鬱、其山水之異態、無下一不レ可二人意一者、觀者各自得焉、箕二踞盤石一、傾レ壺就レ醉遂命二管師一移二舟前岸一、攀緣而登、又有村曰二西條津一、由二條津一至二岩稻村一三五里、往々群山競起中有二雙峰最峻秀者一、美石相累而露二山骨一、半復雲遮雲上有二洞穴一、人不レ能レ攀之厥繰道、蹊意是羽客魑魅之所居乎、其下有二兩巨峽一、出二於水中一、奇形怪狀若二鬼之鬪一、土人名レ之曰二鬪鬼巖一、又南去數里至二楡原村一、有寺曰二上行寺一、古刹也、由二楡原一至二千蔵谷一十里、其間松溪最善、山皆奇石壯麗環二合山腹一、通レ徑如レ斗、折如レ蛇行、頭上懸懸欲レ崩、脚下淵深畏レ墜、百仞石壁若レ築、壘、堰松生二其巔一、鬱

葱陰二于鏡面一、其旁溪流出二於山間一、落レ江轟如レ雷、水中詭石縱横、又重洲小溪、澄潭淺渚、間厠曲折、平者深黑、峻者沸白、隔レ江而東、山舒村遙、雲之浮、鳥之翔、舉凝々然以左二一願之間一、其幽麗奇絶、殆不レ可レ狀、蔵谷有村、弗擔八九連二山足一、脩竹森然以高、喬木蓊然以深、又南絶レ水有レ峻嶺一、柵レ羅登レ磴、植レ杖回二膽遐邇一、其高下勢所然注然、若レ垤若レ丸、二千里、積壘累積、莫レ得二遊歷一、踰二此嶺一而下一盞、茶時至二片懸一、村富饒若二城郭一、屋舍壯麗也、松間紛壁曰二大淵寺一、又南行一里、土斷而川分、乘山横繞、嶺闕瀴澤、樹益壯、石益瘦、又南行八九里、至二于猪谷一、山水最奇麗、而無二大草木一、蔦蘿攀二羯巨石一、其石之突怒偃蹇、爭出而爲二奇狀一者不レ可二勝數一、自レ是前途飛越之境、斷岸千尺、深潭接レ藍、有下戟二人於鑑輿一、貫二有尋之繩一而渡者上、欲二往觀レ之、猪谷有レ關、守關吏不レ許二猥出一、關無下以得上窮二其狀一、遊行漸遠、日沈二于虞泉一、因尋二禪房一宿、翌日晨起、欲下由二片懸一渉二東道一、則時幾二十月半一、俄頃雲起溪風凜烈、雪將レ至、以下其境不上可二久留一、乃記之而去、同遊者田君壽野伯綱隷而從者一小生、曰二小八一、

下笹原城　越後より越中攻の時神保の將住す若ケ原城　主不知

高嶺城　東野積なり南西大峪東北は堀城外に屋敷あり主知らず又神保の將住すと云ふ

高尾城　野積黑牧谷なり　主不知

大道城　黑牧谷なり西は數十丈絶壁にして山田川を帶びたり向きに牛嶽あり東南北山三方は堀切なり東は追手と見も天正年中謙信增山を攻め屠る時神保家の將多く野積谷に入り所々に城を築

く此城は神保幕下寺島牛之助職定小島甚助胤興兄弟籠ると云へり時に野積谷小谷村六右衛門へ寺島よりの書狀九通土玉生村新左衛門今に所持す享保年中大道の邀若土村の中より銃炮一挺掘出せり昌披問答寺島小島兄弟越中の國侍にて西野隼人か二子共に初め佐々に仕へ天正十五年皆利長公に降ると云ふ

大林小島城　山田谷なり白井谷村山上を鐘撞堂と稱す父老云ふ越後と取合の時寺島小島築く敵來る時相圖に鐘を撞きしとぞ

山田　温泉あり又飛越境に牛嶽といふ高山あり牛の形に似ればかく名つけしとなり西の方は加州御領にて彼方よりは鍬先峯と云山田川上をゆふねと云て魚とまりの瀑布あり是より上へは魚のぼることなし此川源飛州百瀬といふ所より出るゆゑに百瀬川といふ

大淵寺片嶋村　微妙院樣御印書あり如左當寺來年江湖就興行寺内地子米三石五升從當年被成御赦免之旨被仰出全可致支配者也仍如件

寛永十五年十二月十日

御印　　横山大膳亮判

奥村河内守判

越中婦負郡片嶋村奥村因幡守判

大　淵　寺

祇樹寺　澤谷村

貳万歩但草高八石六斗八升山錢銀金場拜領寛文四年　龍光院樣より先年江湖執行御免許之通被仰付御印書あり

本法寺鷲谷　法華經二十八品の繪圖あり是は放生津海中に夜々光輝あり漁人怪み網を下して捜しけるに二十八の卷軸を得富崎城主神保八郎左衛門に献す然るに何の圖か知れざるもゆゑ本法寺日順を召して見せしむ日順詳に之を講せり依て本法寺に賜り秘藏せり又放生津の曼多羅寺は此圖始めて上りたる個處ゆゑ寺號とすといへり

布谷村　蘇夫嶽と云ふ高山あり登りがたき山なり山靈あり又一眼隻脚の妖怪あり山海經所謂獨脚鬼ならんか蘇夫嶽の下に桂原といふ村あり村夫薪を採る爲め登りけるが此妖怪に殺さる腦をすふと見ゆて頂に大なる穴を生じ死せり又山腹にて炭を燒く者兩人或夜此妖怪に殺さる是は投られたりと見ゆ少し水ある芦茅の中に兩人の死骸あり各滿身傷つき足摩せしと見ゆて泥中縱横に痕ありしと云ふ又婦負郡小竹村若宮紀伊が弟十八歳の時祭禮にいたり其夜佐五兵衛の方に宿し表座敷に寐しが夜深に寐し下の疊を起すものあり神官も盤共にねこされて坐しける忽ち目醒て之を見れば其長け大なる女の鬚奚の大さにて神官に向ひ莞爾と笑へり神官身の毛起ちけれども心つよき男にて我汝が爲に何の害かある而るに我を威すは汝が樂なるや益なき事なり速かに去るべしといへは妖理に服し少頃して立ち去り再び來らざりしとなり又山伏宿しけるが時に妖出ければ山伏劒にて擊んとす妖山伏を抓み投出し劒を承塵にはさみ去るかゝる事度々ありといへ

り

牛滑村　誰信塚と云あり何者の塚か知るべからず

下狄村　昔大なる池あり中に大蛇すみけるが或時下の谷川へ池水ぬけ落ち水涸れ蛇死せり今に此山に蛇骨あり牛道も延れり上に土をれはふよりわらはには見へず

八尾　宿にて九百家餘あり一月に六日市あり五箇山野積谷山田其外山村より繭糸麻苧紙類裝など賣買す又時により椎茸栗茸柿栗を出す

開名寺　鐘銘に桐山下野開名寺とあり其の先飛州に在りて願智坊といふ覺如上人より願智坊執持鈔受二與之一と云越中飛州に四十三の末寺あり永祿六年三月廿四日齋藤一鶴寄進狀あり天正十三年閏八月從太閤御所如先規貳千七百貳拾歩寺地拜領御朱印今にあり幷金五入添翰もあり　瑞龍院様由緒御覽慶安二年正月廿七日就御尋右衛門尉幷會所奉行へ舊事書上候又御領となり延寶七年就御尋細野九郎右衛門小島六左衛門へ書上候

當寺之儀關白様へ申上候處如先規不可有異儀之旨被仰出候段可被得其意候依而爲右政道方出使者差越候猶口上申含候間不能委細候恐　謹言

午閏八月朔日　　金五入在判

開名寺　床下

霧山下野之事も令聽聞末代寄進申候此上者長久可申談候之間聊於無御疎略者覩者可申候自然爲子々孫々違乱之儀候者以此證文可有御斷候仍而末代寄進狀如件

永祿六年三月廿四日　　風間忠左衛門家次判

豊島神九郎正家判

赤曾布丹右衛門鎮政判

開名寺參る

右竪紙背翰の裏月日下　　齋藤一鶴印

尾崎城　桐山峯つゝき開名寺境内堀切なども有れども縄合正しからず能州長の一族尾崎大助が後尾崎兵部丞忠連爰に城を築けり子孫神君に仕ふ尾崎清兵衛と云ふ

井田館　村中に飯田町あり井田町ならんか

井田村城　主馬城と云井田の館は常居にして山上は敵を禦ぐ固めか又井田川岸に主馬の墳墓あり

しが岸崩れて今はなし

館本郷屋敷　水谷臧人住せしは爰の處ならんか後田中市正居住せり初め又四郎と號す田中の五保といふ近在七ヶ村を領す田中熊野道水谷上高善寺下高善寺館本郷なり七ヶ村今に七月廿八日祭にて是を五保祭と云城の廓外西南に古墳あり田中市正と石に刻み年號月日は磨滅して見へず

瀧山城　富崎村上なり後は絶壁にして山田川を帶び城墟より今に燒米出づ

富崎城　鑄物師の龜鑑あり天福年號にて公郷の名多く連署す御宸翰と云ひみだりに披見すれば祟

わりとて祠にれさめ神とす二月九日祭あり是を綸旨祭と云ふ

森田村常樂寺　古は大加藍にて十一面觀音行基師作五大明王弘法大師筆仁壽二壬申年玄覺大師下向二重塔を建つ自ら千佛を刻みて安置す又五間四面の大日堂ありて諸國の齒骨を納め高野山の如し天暦四年坐主夢想によつて天神の社を造る北野梅林山と號す後兵燹に罹りて亡びたり三田村に千房坂といふ所ありて常樂寺の末寺多し此所に建逕るゆゑ千房坂といふ又仁王門と稱する田の名あり仁王ありし所といひ參詣の人宿せし所を今宿坊村といふ

本覺寺　富崎村

槻宅殿知行の内長福寺分五百苅并に島野山共に寄進申候上不可有他之競候然者本役之儀五十疋此方ゟ可有沙汰候若於何時も兎角之儀者〇〇候處可爲相違候併此旨違乱有之者以此墨付被申斷可有知行者也依而如件

永祿五天卯月十七日　　勝重判

本覺寺

勝重は神保が一書に水越越前守勝重富崎に居城とあり

態以折紙申入候依諸手就入魂之儀近日可及行候然者此割諸百姓等へ可被加言事肝要存候猶重而可申候間不能懇札候恐々謹言

二月九日　　小島胤與判

寄進之地長福寺分如前々可有所納候若後日於有違乱之輩者堅可申付候仍而如件

永祿九六月十一日　　寺島職定判

本覺寺旨御同宿中

本覺寺

永代寄進申田地事

合百苅四俵田也　有坪は藥師堂下大鯏可也田數五枚四郎右衛門作也

右彼田地者野上分内也爲渡世寄進申所實正也但本役者親地方へ七月百文再々極月百文御立可有之候若於後日子孫として違乱煩申輩於有儀者此證文を以御領主へ可被披仰候其時全く一代之子細申間敷候仍而永代寄進狀如件

永祿九年霜月廿八日　　長職判　寺島小島神保に屬す

越中婦負郡爲成保北方袋村　　西川堪助定勝判

本覺寺

下瀬村城　釣瓶城と云天正年中謙信越中攻の時神保の將住すと云此城の向外輪野に大搆小搆と云て堀切などあり謙信流の大陣取小陣取の事歟

三瀬山城　山上平にして堀切あり後に瀧落て溪川あり其川下に町跡的塲屋敷跡あり爰を瀧山城の

砦と云ふ富崎へ山通すること十丁許然れども砦とも見へす南西敵付の心あり神保黨住すといふ

長澤城　藥師堂の後要害の地にて實に建武康安頃の城地とみゑたり坤の方にある山城は境目など

の如し南東はへろ川を帶び西北は山續にして谷深き險路なり古城瓦屋敷跡あり今に燒米土中に

あり又古井石にて甃今は習す藥師堂の上の山に勅使塚あり又外に五つ塚あり首塚なりや後寺島

牛之助住すとも云ふ

安田村城　天正十三年秋金屋村白鳥城より加州岡島喜三郎吉長移る（備中と改）其後金澤へ歸り備中代り

に平野三郎右衛門住す後又是も金澤へ歸る

中堂寺　小泉村之内今以荒地田畠貳丁致合力候能々爲御開可有候爲其一書如此候恐々謹言

天正十八二月二日　　岡崎帶力左衛門判

中堂寺殿（御宿所）

貴札拜見申候依貴公樣御屋敷之儀被仰越候右より如申貴坊又は聞名寺どの　公儀にも御存知之

事に候間屋敷分除旨出雲其外奉行衆被仰候間其通御代官衆へ可被仰斷候委曲御使へ申入候恐惶

謹言

極月五日　　大塲覺太夫判

安田村　中堂寺樣

金屋村　西野と云所に掘立あり木曾義仲倶利伽羅へ攻のぼり給ふ時宿陣の地なり後のしるしとて

木賊を植給ふ今に存せり此時有澤より金屋村鐘掛の瀬はせり道街道なりと云姥が懐も爰にあり

友坂村　白鳥神祇あり式内なり此社の上に糠塚といふあり又此あたりより燐火出て神通川の邊を

めぐれり浩る事常にあり是は佐々成政が妾早百合といふ女故あつて成政手討にし神通川へ棄て

しより幽魂燐火となりたるとなり

白鳥城　金屋の上なり神保長元之を築く其後加州より岡島備中片山伊賀守入る又岡島は安田城に

移り片山は五福大峪城に移る

寺町村　海陽山最照寺とて京都東福寺末寺ありし所に今の寺跡墓などあり

羽根村城　鶴が城といふ下村境沼あり治乱記天正十七八の頃上總万喜城土岐左兵衛太夫賴春筑下

に鶴の城龜の城といふあり土岐と齋藤とは同姓なる加はり用ゆるか又神保の將大間智兵庫長政

住す安田玄佐羽根村次郎右衛門其末葉といへり

澤口城　今の羽根村なりとて昔は有澤の澤口と稱し最上左衛門太夫安幡住す又姓を毛受ともいふ

布瀬村文助其末葉なり此城を澤口城又は大幡城とも云最上重寶とせし物金の大錢東坡の黄竹唐

牧溪和尚の筆觀音の黄大錢は山王の像を彫刻せり後本丸の東高き所に瘞み祠を建て山王と稱し

城の鎮守とせり今羽根村の神是なり又黄竹觀音等は後蜷川最勝寺に納むといへり最勝寺は最上

が氏族なり又富山最上屋藤兵衛も末葉なりといふ

有澤館　土肥の臣有澤采女長俊住す圖書介弟なり

吳服村　大峪城平城なり神保越中守築けり天正十三年秋利長公筑下片山伊賀守住す

安養坊山　佐々攻の時大閤秀吉公の陣城あり此所を道心山と稱するは成政剃髮し降參せしゆゑに號す又鞍見坂と云もあり

吉作城　奈古江兵庫助貞時住す安藝守の甥なり

長岡　御墓所延寶年中創造

早晩勸行　眞國寺　經妙寺

七面大明神　五時谷　万治年中藩中奥村藏人建立吳山風景勝絶富山より綫に一里詩歌連俳の客吟遊の地とす南部景衡詩あり左に錄す

遊二吳　山一

今朝風日暄、況逢休沐暇、玆與二三子一、躋攀當二首夏一、竹林布二鬱陰一、黄鳥囀二葉間一、迂迴經二磴道一、曲折繞二桑拓一、突然出二絶頂一、疑是自天下、滿山紅與レ紫、過レ雨花未レ謝、薰風一披拂、衣袖芳二闌麝一、回レ首馳二遠目一、美景相因籍、巍峨立山巔、芙蓉削二嵩華一、永含太古雪、富十同各價、渺茫北海上、能佐波間跨、銀濤浴二魚龍一、蓬瀛實可レ訝、岩瀨與二興方一、漁村聯二茅舍一、遠近皆佳境、何殊倒瓶レ瀉、險望忙二應接一、未レ暇レ舉二盞斝一、安隨二浮丘翁一、仙遊從此化、

北代村　光明山極樂寺神保長職高札判物あり

八幡村　八幡宮古跡なり

五厩村　五郎次郎則重といふ鍛冶住す遺跡あり鎗倉五郎入道が弟子なり又越中鍛冶は守田國光宇津入道と云元大和鍛冶也國房國弘國宗貞宗國友友則清光行光重清なり

駒見村　昔此村にようゆふといへる者あり其家に久しく使ひし姥狼の化けて人となりたりしとなり或時山伏の夜更て吳服山古坂を過來りしに狼の群來て山伏を繞はしければ山伏怖れて喬木に攀上りけるを狼あまた重なり其上に姥跨つて山伏を引れろさんとす時に山伏短刀を拔て姥が肘を打れとしければ重なりたる狼ちり〳〵になり逃失せけり夜明けて山伏樹よりれり駒見村を見かけ爰にて暫く休はんと立寄りようもふが家に入けるが彼姥傷の痛みけるや叫めき號び打臥居けるが山伏を見るや否逃出し其より行方しれずとなる是御郡の舊記にあり唐にも桑を採りし男を狼の來りて噛まんとしけるを斧にて額をうちはりければ狼血を引て逃去れり彼男猶血をしたひ尋行けるが狼村家にあり彼男を見畏れて遁げ去りぬ是も亦村家に久しくつかはれし老父にて狼の化し居たるとなり諭愚隨筆といふ書に載せたり

岩瀨城　小出五郎景邦住す古へ岩瀨の渡岩瀨の湊といへるは打出濱を云ふ今海となれり東岩瀨は打出村より出で〻家造し次第に家居も多くなり賈舶なぞ來りて湊となれり貞享二年加州より見上新左衛門來りしは東岩瀨奉行を置ける始なりといふ西岩瀨四方皆宿なり家數多し

射水郡

黒川城　辻城にて上古よりある城なりといへり又日の宮より黒川村の間に十三の塚あり首塚なる

か詳ならず此邊大閤山といふは秀吉公御陣を据ゑられし所なり

中老川村　黒川村の間に三十三の塚あり越前の侍石黒源五右衛門築くといふ首塚なるべし何れの時か不詳又原九左衛門の先祖築くとも云ふ

放生津城　今加州の御藏屋敷となれり

二塚城　陣城砦の類か

後醍醐天皇第八の皇子能州流配にて放生津の大西彌兵衛と云ふ者深くいたわりまいらせて御宿申ける夫より守山へ移り給ひ牧野村にて御うたあり

思ひきやいかに越路の牧野なる草の花にかりねせんとは

守山の奥に陵あり爰にてかくれさせ給ふと見ゑ高岡守山極樂寺御菩持所なりと云ふ

二口村　堀内村境に三島の城跡あり此邊に公卿住居のよしにて其跡もあり三島野といふ名所は此あたりを云ふとぞ

願海寺城　寺崎民部左衛門同喜六住す織田軍記にも載せたり

橋下條城　神保長職住すと云ふ又八幡山王の社ありけるが兵火に亡び今其跡あり又此村に寺林某といふ郷長あり金森法印の支給とて家に古物多し紀新太夫行平貳尺四寸金作の太刀あり渡部綱が太刀なりとて秘藏す是は布谷村左五兵衛が家に傳へしが故ありて寺林方へ來るよし

小杉　三ヶ村邊鷹寺と云ふ所に鷹土山蓮王寺と云ふあり是は百谷若大臣鷹の爲に建立のよし越後

謙信乱入の時兵燹に亡びたり丈六彌陀の首脚三王の首今にあり行基の作なり百合若大臣殿海島の一揆を退治せる賞として此所を給はりたるとぞ

小泉村城　寺島牛之助住すと云ふ

蓮華寺村　等光山蓮華寺境内に幅三尺長さ六尺許の石塔あり名謚屋遠江守墓といふ

六道寺　三箇所に船渡あり中の渡しは木渡しなり古國府の下へ着伏木へ着渡しあり川上の渡しは吉久より國府村へいたる

古國府　古堂國の府なり後神保安藏寺氏張住す又雲龍山勝興寺移住す順德院皇子佐渡宮信念上人開基元佐渡の國にあり蓮如上人越中へ移給ふ門前に瑞龍院様微妙院様御名の御札あり又侍屋敷町あり門内北の方に又侍屋敷あり勝興寺系譜に天正十二年春勝興寺顯榮顯幸上京を伺ひ木船の石黒左近勝興寺へ不意に夜討し火を放ち勝興寺家人下間源五郎同左近城戸刑部本戸主計沼田庄左衛門等討死殘家人與力坊主防戰の術なく急ぎ顯榮顯幸へ注進すこゝにねて下間右衛門尉再稱寺等を以て佐々成政と緣組ありて神保が城跡古國府を成政より附與よつて勝興寺を爰に建立同年冬移越中一向宗西派惣錄與力の寺四百ヶ寺餘寶物多し岩波の掛幅織田家の重寶なりしを故あり佐々成政大閤へ捧げしが大閤より右掛幅に七拾五石の地を添へ御寄附せらる卽ち矢田村なり

國府村　八幡宮勝興寺門前町中はゞより右に入り五六丁過ぐれば宮あり古跡なり喬木多し此所四

方土居濕多し宮の側に大なる皂角樹あり是れ義經鎧懸の皂角なりといふ又伏木港に遊女あり賑やかなる所なり此邊赤坂山梟が池機織の井戸弓の清水狙盤石判官雨はらし女岩男岩剃なしうは ら蝙蝠が洞あり又山路に紅葉川紅葉の橋あり

一の宮　氣多大明神別當慶高寺故あつて延曆三年礪波郡高瀬大明神一宮となり給ふ

二上山　養老寺養老年中草創

慈尊院金光坊あり古は大地にて坊も多し

卯花山　名所なり

岩崎城　阿尾城の寨なるが又氷見城とも云ふ

唐島　雪島と云ふ名所あり陸を隔つること拾丁許辨才天の堂あり

朝日觀音　上日寺の靈境に在り氷見江とて一里餘の湖あり氷見町貳千軒餘もあり

氷見城　狩野中務住すと云ふ古史に見ゆ狩野は氷見に並ぶ村名なり中務を村名によつて狩野といひたるにや太平記に氏家中務重國といふ人越前足羽にて新田義貞の首を取ると見ゆ越中の住人とあれば此人ならんか又或家系に越中國侍堀江中務少輔景實といふ人あり是等にてもなきや

昆目集に天正年中菊地十六郎住すとあり又昌披問答に利長公守山御入城の時菊地伊豆氷見城に入り天正十四年なりと錄せり昆目集に又永祿年中加納中務高岡般久寺を創造すと云ふ

阿尾城　「英遠とも」太平記に見ゆ菊地北國へ來り氷見に住す又天文永祿の頃より菊地伊豆入道武勝同十六郎安信住す氷見より西の海邊に多枯浦澁谷磯長濱などあり布勢の湖は氷見街道より高岡へ出る間布勢村に湖の跡ありいづれも名所なり

海老山砦　神保氏張築くと云ふ

守山城　初めは神保氏春住す後瑞龍院樣十三年御居城せらる前田創業記に天正十八年二月小田原陣の時前田對馬守長種留守居と云ふ

瀟田村　鹽池あり氷見海より南二里許所の者汲みて鹽の代りに用ゆ西風の時は甚鹹く北風の時は鹽氣薄し海水を製して鹽といひ山中より出づるを鹽といひ鹽と云ふはくちやしとの意詩王事靡ゝ鹽といへり

森寺村城　長曾筑前守住す

池田村城　三谷朝宗住す

青江谷　長尾爲景坑に陷死せし所なり

萬松山　翠德寺黃金佛あり長一寸許又渡部綱が髻あり

西田國泰寺　清泉國師開基由良派の本寺なり足利尊氏の建立

射水川　雄神川は六道寺の川を云ふ名所なり

岩ケ淵　文祿二年八月向井彌八郎印牧藤兵衛といふ浪人劔術仕合ありしこと三蘆記に載せたり

鹽野山　藤永年中十郎藏人符家谷戰の事平家物語に載せ末森記に倶利伽羅を右に見て飯山と末森

の間志雄越とあるはこゝか

安川村　藥勝寺後の山に後花園院皇子文明年中京都大内山名の乱を避け宏に閑居し給ひ三年の後増山の城主神保に害せられ給ひしよし今禁裏塚といふあり方貳間許三段石にて壘上に五倫石あり法名德大院殿と號す稻増親王ともあり又寺前南道の傍に古杉あり其下に又五倫石あり皇子と共に戰死の　公卿九人の塚あり此皇子は德大寺大納言實規卿なるや

高岡城　天正の初め益木中務丞住す有澤撰書に寛永十五戊年一國一城公儀御定にて高岡魚津廢城となる高岡御殿秀次公の御殿を給はり御造營廢城の後は御旅屋御殿となる高岡と云ふは中納言家持卿遊中主たりし時二上山より鷹を失ひ給ふ其鷹關野なる小高き岡にれり居るを里人とらへて奉りしより鷹岡と呼しとかや中古又關野とゝなへ來りしを慶長十四年利長公富山より御移り又高岡と改まりたり利長公出頭の坊主三休と名つくともいへり又高岡御馬出町に金子某と云ふ醫あり保元の頃金子十郎家重が後裔なりといふ今に家重が鎧武具を傳ふ

熊野權現　近江國盤谷住人名謂屋遠江守治宣越中礪波郡を領す年月詳ならざれども初め關野に住し爰に八幡を勸請し近江町と稱す嫡子治吉增山に城を築けり瀧山の天兒某と戰ひ遂に落城し淺野谷へ退き又增山を攻め治吉の臣寺西入道常範水を絶ち攻めしかども城中に礒石あり常に水貯へ乏しからず又搦負郡に糧道あり是を斷ちて落城すといへり

瑞龍寺　高岡山寺領三百石　祠堂銀四十五貫目余　酒東漸寺五十石　法性院五十石　林洞院三十石　免古院三十石

利常公御代御建立明暦二申年より萬治元戊年まで三年にて成就結構壯麗北陸無双の伽藍なり山門正保年中堂塔を建つ門宇皆鉛瓦にて葺く唐山經山寺の如く造營棟梁は山上善右衛門薄廣とて名人のよし

繁久寺　寺領五十石　利長公御墓所

御寶藏七重の石塔高弐丈餘中に燈龍あり

二基大坂より來りしが故ありて一基立たず關野邊に石の二王と共に埋めり後洪水に岸崩れ其所淵となり水底に沈みてあり水澄める時は見ゆるといふ繁久寺より瑞龍寺へ至る道十八丁兩行に松あり一丁毎に兩の石燈籠あり

增山城　山城にして險なり山上に堀あり水絶ることなし和田川の水脈通ずるといふ父老云熊川宗範住す成政の臣中川宗伴なるか三靈記に利長公守山へ御移の時山崎庄兵衛長鋭入るゝ昌披問答に利長公守山へ御移の時當城へは山崎閑齋入る

淺野谷城　鬼ヶ城といふ

芹谷　千光寺の邊に鐘ヶ淵といふあり兵乱の時寺院回祿釣鐘水中に入りしとなり水澄める時は龍頭見ゆると云ふ

七山　山背參差として七川あり流水繞りて風景面白き所なり奇説あり略す又中田村を盤若野といふこと軍書にあり

木船城　石動祖岡の間街道左十丁許堅固なる地形沼あり土人云安居村向水島の正満寺を木船の石黒攻む寺僧多く庭中楠のうしろに藏れたり今に數圍の楠あり

水牧村　壽永の頃水牧四郎泰高出づる所なり

金屋村　此邊は慈名產なり古天子へ奉ると云ふ

やち川　親鸞の弟子弘長二年親鸞京にて遷化し給ふを聞き時に雜魚を得て腸をぬき居けるが大に驚歎し其魚をやち川に棄てけり夫より此川の雜魚に腸なしといへり

井波城　飛越の境五箇山に接す成政の臣前野小兵衛長康住す

瑞泉寺　末寺三百五十余寺中に坊官侍等住す本山の外にて坊官を置くは瑞泉寺のみなり　後小松院明德三年綽如上人建立綽如本寺を巧如に讓り當國へ來りて礪波郡杉谷に幽居せり時に書翰異國より京都に來る文義曉りがたし勅して綽如を召んで讀ましむ綽如讀破すること水を流すが如くなれば叡感あり時に綽如越中に一宇を建立せんことを願ふ即ち勅許ありよつて越中に歸地擇み給ふに井波に洞浪水といふ池あり爰に寺を建立し池の緣によつて瑞泉寺と名く又礪波を改めて井波とす綽如上人自筆の勸進帳今に瑞泉寺にあり　後小松院御位牌あり上宮太子の繪傳あり巨勢大納言金岡畫御贊は　宇多天皇御宸筆表粧加賀大納言　利常公御寄附其外寶物多し

縄池　井波より城端へ至る道山腹にあり周二十六七丁水清潔にして其深きこと測るべからず傳云此池元親部川邊にあり蛇すみて人を害す神融和尚之を愁ひ此所に縄張し呪誦して蛇を封せしが一夜に縄を限て池となれりよつて縄池と稱す此池へ錢を入るれば晴天忽ち變り霖雨をなし五穀を害す

子撫川　昔東國より上京の僧村家に入り茶を乞ひ飲みけるが此僧の美目ふさに村家の處女戀慕の心を生じ僧去たる跡にて茶碗の餘瀝のありけるをむすめ飲ける是より懷姙し月盈ちて子生なる双親驚き密夫を問ひけれども事の答なし斯て三年を過ける時彼僧歸來て又此家に立寄りければ女しか〳〵のよしを僧に語りて兒を抱かしむ僧あやしむ事なく兒の面きより踊まで呪誦して廢擦しけるに這兒忽に池のごとくになりなるを此川へ流しける是より子撫川と稱すといへり

櫛田明神　此あたりに大なる池あり昔大蛇出でしば〳〵人を呑みけるある女知らで爰を過きしに例の大蛇出けるが彼女の櫛を見てれそれ池に逃げ入る夫より再び出すとなり依て此櫛を神として祭れりと云ふ是は湯津の爪櫛の事を含みたるなり

城端城　荒木大膳住すと云ふ親部川庄川を帶び後は山峙甚だ堅固なり加州荒木善太夫其後なりといへり馬場藏書又御系譜天正十三年河地才兵衛住す此地產物縮緬絹紬糸綿麻紙等なり

善德寺　加州公より八丁四方の地御寄附且那三千餘門跡逕枝門の左右築地大堂丸柱五尺廻り回廊書院坐敷對面所間數多く金張付彩色繪露地古く正面に硫黃山をうけて絶景なり此硫黃山頂に硫黃多し山の形四面同じ名山なり木堂の前に鐘樓あり城端西山道より加州もわくの溫泉まで四里其だ難所なりもわくより金府へ四里善德寺信長公大坂攻の時加越能の門徒を從ひ木願寺を援ぐ

是門主より善德寺へ援兵催促の書翰あり敵に奪はれん事を恐れ書を笠の紐の中に入れ遣はせり
是を笠紐の文といふ今に傳ふ

天柱山　城ヶ端より東山中へ入る事四里又左へ十八丁過くれば天柱石あり此邊山川もなし石横廿五六間許竪二十丈許碧空に聳へ近寄り仰き眺めば目くるめき頂に大樹一株あり何樹とも辨たず

五箇山の内松尾村邊なり三月頃より九月の末まで此所へ行きがたし蝮蛇多し人を嚙む患ひあり

大勘定村　此山より雲母を出す

大西村　前に大井川と云ふあり瑪瑙出づ此所より出る瑪瑙は扶桑第一なりといふ又松尾村邊に卵花山あり此山に大石あり面に彫みたるが如く郭公のかたち見る高岡の醫松田三知は城端の産にて此石を見たりといふ

蛇喰村　祖夫山といふより木葉石を出す木葉又樹の枝水中へ墜ちて皆石に化す此山より流出づる水油のごとし

安居村　山に風穴あり又蓑谷村に海水あり親部川橋修復の時此所より石を切り出せしが此石鳴出しけるゆゑ切らずとかや二間許りの大石なり奇怪なり又同所山中に長五六尺許の木佛多くあり いつの時にか棄てたると見ゆ近くに寺跡もなし

遊　善　古は踰前と書けり加越境なり此に三ッ池鼎の足のごとく溪にありゆゑに池水遠し此所四時草木花咲き池に垂れ梅、櫻、映山、紅葉、菊、水仙、寒椿其外名も知れざる艸木花咲き其美事目を

驚かせり圓なる池に咲乱れ垂れたるを都の人來り見て其美なるを着物の摸様に染出せり是をゆうせん染といへりとぞ

法蓮寺　東福野の末和泉村邊爰に桑山と云ふあり麓に蓮如上人の像あり靈異ありて遠近の人參詣す毎歳三月廿五日開帳あり又山の上松林の中に黑き石あり方四尺許上に徑一尺許の穴あり深さ五六寸中に水を貯へ四時涸るゝことなし土人之を汲盡さんとするも忽ち沸き出て盡ることなし

池尾村城　東西五十間南北三十間許非口城といふ

道林寺村　いつみ谷と云ふ所に三尺許の水溜あり時〻沫を吹出す又東の方に貳尺許の横穴あり水少し中に水音聞も下に流れ出る所もなし爰にれり〳〵小鳥、蛇、蛙などの死せるあり毒水なるや

今石動城　秀吉公佐々攻の時御腰を懸けらる其頃前田右近秀繼嫡又次郎任す三蓮記に慶長十九年大坂陣の留守には笹島豊前を置き能州石動山五社權現此地に移らせ給ふ故に今石動といへるよし家屋五百軒餘産物布を出す五郎九八搆布とて江戸京へも多く賣出せり

久利須村　高岡石動の間氷見街道にて此山に俊寛塚あり方八間許の石壇あり平相國清盛の時俊寛成經康頼三人鬼界ヶ島へ流罪と云ふて爰に來れり其故は成經は平經盛の聟なり時に氷見の郷は門脇殿の知行所なれば爰に三人共に隱くし置けり後成經康頼は赦免にて俊寛のみ殘り終に爰にて死せり此塚のあたりに古藤あり又十丁許奥に瀑布あり蒼崖より落る貳丈餘景色宜しく紀州那智のたきに勝れり成經康頼此所を熊野山と號し瀑布を那智のたきと稱し毎日參詣のよし此邊を

宮崎郷といふ

總郷村　今石動を五位の庄とも云ふ是より此の山子撫川の上にあり佐々の計策を加州へ注進せる田島兵衛こゝにあり利家公より總郷村より五里四方の地兼光貳尺四寸の刀黒革縅の具足を賞賜あり山邊又親部郷あり三日市十日市四日市など云ふ所あり四日市宿あり此山奥に鹽斗石とて人の腰をかゞめて鹽をはかるに似たり寔に奇石なり

朽上新村　蓮如上人下居の所あり

のうか村　延寶の頃次郎右衛門剛力大食の者あり

安居村　安居村彌勒山觀音釋迦作と云ふ仁王運慶作繪馬狩野古法眼畫

弘法寺村　安居より半里北に在り此村に清泉湧出で水中一點の塵なし傳云ふ此邊水あしく人難儀せしかは弘法大師憐れみて此水を出し給ふとぞ

倶利伽羅城　名所の礪波山といふはこゝなり加賀と越中の境なり峯に伽藍あり昔越の大德諸國修行し給ひしに倶利伽羅明王を行ひ給ひしかばそれより此山をくりから嶽ともいふ越中礪波郡の内なればとなみ山といへり大德とは泰澄法師なり神融和尚とも云ふ元享釋書に傳あり

かん田五郎丸城　主不知

蓮沼城　北越太平記に天正四年三月謙信椎名泰種が籠る所の蓮沼城を攻屠り泰種自害すと見も

關野谷　蓮沼邊なり爰に巴山吹の塚二ッあり松を標に植ゑたり倶利伽羅峠南の谷なり巴は石黒太郎光弘が方にて死せり山吹の事はいぶかし

小島村　木曾くりから合戰に向ひ給ふ時軍勢石を持搬んで築きたる所あり義仲爰にて休息し給ひけるよし

高瀬村　高瀬大明神越中一の宮なり大巳貴尊同村の邊非波城ヶ端の山入に光源寺と云ふあり大同元年高麗山源法寺勸學院といふを造立し一山繁昌の所なり最明寺行脚の時此寺に來り給ふいかなる事にや翌年佐野源左衛門をして僧侶を殺害せしむ後又謙信の時兵火にかゝり滅せり勸學院妙空文明六年一向宗に轉ず今の光源寺其後なり勸學院明空の塚寺中にあり

二日町　綽如上人井澤へ通行の時腰を懸けられし所あり諸人尊敬禮拜しければ此にある塚を禮拜塚といふ

赤丸村　淺井城といふあり元正天皇の皇子在せし所と云ふ後又下間和泉住す

堤　村　谷の内と云ふ所に織田陸奥守氏知と云ふ人居住す後剃髪し應安二年一宇を建立す今境内に氏知の墓あり

名畑村　小屋か谷といふ所に成政陣營の跡あり

いなは山城　今石動北二里田川村上なり主知れず

末森城　加能越境なり

朝日山砦

鳥越城

松根城　植生山つゞきに松永城と云ふあり松根の誤か平家物語に松永日の宮とあれば別の所ハ昆目集成政臣杉山主計住すと云ふ主計男小介　利家公へ降る

源氏峯城

黒　坂　今此邊を荒町と云ふ安居より倶利伽羅へ至る捷徑なり之を黒坂越と云ふ又此道より西山の半に安居への道あり是を矢立越と云ふ黒坂の事源平盛衰記にもあり

二　俣　天正十三年八月廿四日成政富山城を打出で夫より松根源氏峯倶利伽羅二俣など堅固にせりといふ

一乘寺城　佐々臣杉山小介住す

赤丸村城　中松國松住す謙信攻め陷せりと云ふ

河合田村城　主知れず

土山城　神保居住のよし越後衆の墓あり又中川宗平住す

上見村城　笹村太郎左衛門住す

松尾村　松尾明神あり古は大社のよし華表の礎林中にあり又尺六寸許の佛像あり弘法の作と云ふ又御手洗の池といふあり

道坪村城　主知れず

最明寺村　最明寺行脚の時此所に御滯留夫より村名となりたるよし

隱尾村城　渡部源左衛門住す

金剛寺村城　石黒與三左衛門住す

佐ゲ野村　岩坪村五月五日神事に兩村より人多く出で礫し血を見て止むといふ上古印地打の祭といふは是なるべし

和田村　北島村の邊陸家村といふあり此村に昔竹くらへの神事とて二ケ村より其年生したる若竹を橋の南北にして長短をくらべ祭禮とせりとぞ

築城年表

○壽永　源氏峯　倶利伽羅○元仁元　最勝寺館○元弘三　放生津○建武三　松倉　魚津○井口　長澤　布市○康安二　國府城○應永　金屋館二　升形○嘉吉元　富崎○長享二　松根三　蓮沼○永正二　東岩瀬　滑川○天文二　小井出七　井田二十　願海寺廿二　上熊野　阿尾　荒山○永祿　富山元　增山六　堺　檜原十三○元龜二　津毛城又桃井居城建武康暦の頃　樫木二　高岡八　戸川三　新庄　館本郷○天正　白鳥二　貴船四　下瀬五　大道五　池田六　今泉　岩城七　佛生寺七　小竹七　馬場八　猿倉八　守山　中地山八　水橋十　弓庄十一　城生十二　有澤十五　非波十三　今石動十　岩崎十三　安田十三　大峪十三　吳服十三　黒川

不レ記二年號一城　墟

稻荷　南保　稻村　堀江　大村　下笹倉　茗ケ原　高嶺　高尾　三ノ瀬　大林　海老坂　井田主馬　尾崎　氷見　豊田　井田　日高江　有金　上梅澤　館　淺野谷　かん田五郎丸　いなば山

戰爭年表　自緣永元至天正十四

永祿元戊午三月越後長尾謙信勢富山增山放生津木船を攻め麥禾を苅取る五月歸陣
同二己未四月三日謙信越中へ出陣神保椎名と和平を乞ふ六月武田信玄の軍勢飛州を攻め山縣將と
して遂に越中へ打入り七月越後勢又神保椎名を討ち同廿四日高岡にて首實檢椎名神保織田へ好
みを通ず
同六癸亥八月越後勢松倉小出城を攻め遂に放生津瀧山城等を攻屠る九月歸陣
同七甲子四月甲州山縣三郎兵衛飛州を攻む遂に越中中地山を攻め江間常陸介輝盛信玄へ降る弟圓
成寺を質とし甲府に到る七月又甲州より芹谷千光寺の衆徒を語らへども諾せず却つて鳥越所々
に要害を搆ふ武田方より討滅し寺院に火を放つ山縣猶國中を打從はせんとせしに謙信川中島へ
出馬ゆゑ歸陣
同八乙丑六月山縣江間を先鋒とし越中へ働き松倉城椎名越前守泰種降る二男龜松丸を質とす
同九丙寅五月越後勢增山を攻め上杉彌五郎義春をして弓庄土肥助五郎政繁を攻めしむ五月城落七
月歸陣
同十丁卯五月信玄飛騨越中へ出馬六月牛川中島へ出陣
同十二己巳八月謙信越中へ出馬神保安藝守長純を攻め同月能州畠山流浪神保へ寄食す
元龜元庚午十月畠山神保氏治等一向宗一揆の徒諸浪人を催ふし小井手城を圍み謙信越中へ出陣越
中勢水橋富山城に苦む水橋落城

同二辛未越後勢椎名が松倉城を攻落し河田長親を入れ八月再び謙信越中へ出馬戸川城を屠る八月
二宮右衛門太夫越後將村田修理亮と青柳村にて迫合同月小出城に長尾小四郎を入る
同三壬申神保椎名の黨富山籠城七ヶ所に寨を築き越後方衆七ヶ所を破り十二月富山落城
天正元癸酉四月十二日甲州武田信玄卒す織田信長公妹を神保安藝守長純に嫁す
同二甲戌畠山義則神保長盈井三宅平が爲に亡ぶ七月越後勢神保長純が貴布禰城を攻陷す
同三乙亥五月廿二日佐々內藏介越中の守護となる八月織田氏越前一向宗一揆を亡す
同四丙子謙信蓮沼城を陷す椎名泰種討死蓮谷筑前守秋貞越後へ降る先鋒として飛州へ討入江間輝
盛降る四月猿倉の三木休雀廣瀨牛丸等中地山城を陷す江間輝盛奔つて之を追ふ同月廿二日飛州
八日町にて討死集成に九月謙信越中へ乱入と見る
同五丁丑六月十一日土肥池田城追谷後織田家に屬す六月謙信已に越中へ出陣七月七日氷見に在陣
先鋒を以て能越二州の堡際數ヶ所を陷ゐる遂に能州へ攻入り七尾城を圍み城主長重連弟孝恩寺
を江州安土へ遣はし信長に後援を乞ひ同廿一日七尾籠城遊佐温井叛き長重連防戰對馬守繼連臥
病自殺す九月謙信又越中へ出陣神保を追放す
同六戊寅四月十三日越後謙信卒す同月織田より神保安藝守長治に佐々權左衛門成次を添へ越中守
護として入國（成次政祐とも云ふ受領伊豆守長治又正武とも云ふ）集成に天正六五月五日今泉落城蓮谷退散秋貞細入谷にて死す
同九月信長の將齋藤新五越中へ討入津毛城越後勢奔走今泉を攻め新庄迫谷冬に至て治る

同七正月上杉家嘗評論信長公妹を神保滝十郎へ嫁す成政富山居城、集成に同年十一月廿日柴田勝家加州一揆を討亡し若林長門守始め十九人の首を安土へ献ず同六月長重龍越中守山より起つて能州湯井三宅を討亡し又佛生寺の砦を破り八代肥後守を討取小竹東番塲兩城を屠る

同八庚辰三月十一日越中國人寺崎民部左衛門同喜六郎安土へ召び惟任に命して囚閉

閏三月下旬加越一向宗一揆蜂起柴田勝家越前より加州を攻め野々市の坊を落し越中安養寺越より能登を攻め長九郎左衛門降る椎名小四郎土肥と水橋にて迫合今年水越越前守勝重増山入城七月六日木船の石黒左近一堂三十人信長公安土へ召され惟任に命し長濱にて殺害

同九辛巳三月上杉景勝越中へ出陣小出城を攻め四月松倉勢魚津へ籠城八月信長公諸將に命じ能越の數城を攻め陷さしむ

同十壬午三月京都馬揃北國諸將上洛間を伺ひ河田富山城を襲ひ同月九日又小井手城を攻め神保佐々を歸國河田松倉へ引入五月景勝天神山へ後援同月廿一日魚津城に於て河田病死同月廿七日森勝藏信州より討つて出で春日山城を攻めんとす景勝歸陣六月二日松倉粮盡き落城十三將自殺成政富山へ入城神保守山城へ移る八月佐々弓庄を攻む

同十一癸未三月八日土肥富山の町を打ち佐々の砦新城を燒く五月六月佐々弓庄を攻め七月土肥佐々と和平秋佐々城生城の齋藤を攻む

同十二甲申成政養子を利家公に約せし謀計顯はれ加州より朝日山砦を築き同廿八日迫り合ふ九月十日成政末森を圍む十月十四日利長公鳥越城を攻め同月景勝土肥を將として境砦を襲ひ成政の將敗れて和を乞ひ質を出す

同十三乙酉二月廿五日村井長頼蓮沼に火を放ち三月廿一日成政鷹巣へ火を放ち四月八日鳥越に迫り合ふ同十二日阿尾落城同月今石動に新城を築き六月廿四日佐々勢守山氷見へ打ち出づ八月十八日秀吉公發向金澤城に着成政諸城を開き富山一城に籠む同月下旬秀吉公呉服山に至り白鳥城に入る閏八月十五日成政降る白鳥陣城へ來り拜謝す同月十日秀吉公凱旋越中三郡　利家公へ賞賜新川一郡成政に賜る此時　利長公守山へ入城

同十四丙戌新川一郡　利長公へ加恩せらる於茲越中平均神保氏仝年加州へ到る

肯搆泉達錄 終

越中舊事記

緒言

一、神社佛閣悉く是を盡す事を得ず唯世人のあまねく稱するものを執て是を記す

一、名所は歌抄舊記に載するを以て爰に記すいまだ其所を詳にせずといへども追て可尋之

一、舊跡は先年御尋によつて在々所々より古老の書上たるを集めて一冊とするものあり多分是にもとつき或は軍書等を考へ交へて傳説の信に近きものをもつて記之

一、此に輯錄する所四郡をわかつて其郡毎に事跡をしるすといへども前後混雜する所多し唯その次第にかゝわらず追々と誌せしによつてなり

一、猶後に秡書一覽を添へしは舊跡等に便りせむとて是を纂めしものなり

越中舊事記

一、越中國四郡新川、婦負、射水、礪波、總高五拾三万六千三十七石

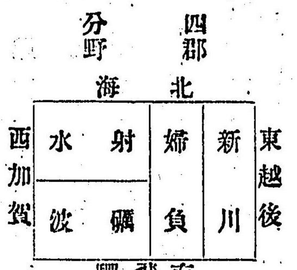
富山より京まで八十三里同勢州山田まで九十六里二拾七丁同攝州大坂まで九十六里半同武州江戸まで東海道通百七拾二里十三丁同下道通百七里中仙道通百八拾弐里十八丁同加州金澤まで拾八里同能州所口まで拾三里同飛州高山まで二十二里二丁

一、富山より近邊道法如左

八尾ニ四里　大岩ニ六里　桐谷ニ六里　新庄ニ一里　長澤ニ二里廿七丁　東岩瀬ニ二里　西岩瀬ニ二里　長岡一里　四潟一里　井田三里　笹津三里十六丁　放生津三里十六丁　古國府五里廿六丁　鵜坂三十丁　城生三里十五丁　上市　下村　水戸田四里　岩峅四里　井波九里　小杉三里廿九丁　高岡六里余

神代之卷云伊弉諾尊伊弉冊尊生佐渡洲次生越中洲矣用明天皇御宇定五畿七道也越前加賀能登越中越後此五洲一國也文武天皇御宇加賀能登二州分也聖武天皇天平十年令天下諸國造國郡圖進分越中國四郡屬越後國　續日本記

越中四郡　新川　婦負　礪波　射水



越中名所

伊久里森　石勢野　射水川　伊頭部山　古江磯　浦　這槻川　大野路

戀山　礪波山　雄神川　平布崎　垂姫崎　卯花山　立島　奈古

長濱　越海　松田江橋　雪島　氣比古宮　鵜坂川　布勢海　薮波里

二上山　有磯海　木葉里　碎田川　英遠浦　賣比川　信濃濱　叔羅川

見奈岸山　繁山　須麻末山　澁谷　杉野　菅山　多枯　三島野

宇奈比川　越湖

名所方角抄云　戀山氣比古宮雪島壹岐國にも有名寄には兩國に入る、也とあり

新勅撰戀一　戀の山しけき小笹の露分て入初るよりぬる、袖哉　神祗伯顯仲

和漢三才圖會云這槻川宇奈比川伊久里森垂姫崎平布崎松田江橋等の名所あまた有之未勘其處

菅　山　春はなを日影もふかを菅山のみらくもあかぬ花の色哉

木葉里　色まさる木葉の里の唐錦あらくなたてそ菅の山風

ちりまかふ木の葉の里を立別れ嵬住よしと秋も行らん

伊頭部山　万葉　我こゝろしのゆうしらす時鳥いつへの山を鳴て越らん

見奈岸山　夫木　押こめてみなきし山の朝霞やたけも見へす立にけらしも

大野路　万葉　大野路はしはし芝原しけくとも君か遊はゝ道廣からん　光俊

薮波里　新勅撰拾遺　屋ふなみの里に宿かり春雨にこもりつらんと妹に告はや

賣比川　めひ川のはやき瀬毎に簪さしやそともの花のうらもたちけり　家持

叔羅川　万葉　しくら川夏さひとり平瀬にはさそもさし渡と早世くには　仝

新川郡神社佛閣名所舊跡

立山、當山縁起繁多なるによつて和漢三才圖會の旨を略書す

立山權現　祭神　伊弉諾尊　方五間　南向拜殿　十間　本社　十九棟　力尾權現　手力尾命也　祭四月八日神輿七社　岩峰寺別當　天台斐帶

二十四坊鷲大宮也自此絶頂まで凡拾三里八丁山の傳記に云文武天皇大寶元年二月十六日夜帝夢想

によつて四條大納言有若に越中の守護をなさしめ給ふ其子有賴出家して當山を開く五知山の慈朝

に受戒し改名慈興とす蓋當山の形似佛像膝を一の越とし肩を三の越とし頭を四の

越とし頂上を佛面五の越とす岩峰寺より二里横江一里有賴熊を射る所なりと血掛一里血を引去る

所死出の山と云あり苔峠寺一里姥堂あり大寶三年卯四月六日慈興上人老田江州志賀に卒す慈興自作母の像を作り慶長元年八月中旬彼岸葬式の法式をなす今に然り湯川一里又云勝妙川と藤橋あり行人垢離をとる所美女杉一里千手堂あり材木坂有傳云昔女人堂を建てんと欲し材木を寄す然るに其材木皆一夜に石と變す熊野權現鷲窟あり各一社あり傳云昔若狭小濱女僧止宇呂尼といふ者壯女壹人童女壹人を連れて女人結界の山に推參す爰において壯女乍ち化して杉の木と成る因て美女杉と名く斷罪坂一里彼童怖れ進まず時に尼尿しながら其ありさまを見て大にのゝしる其地に穴をなす深くしてそこはしをしらず其所をしかりはりと名つく伏拜一里此所にて勝妙瀧を見る數丈の大瀧なり然ども一段中落する所ありと云桑谷一里桑崎權現の社あり不動堂一里中津原一里彌陀原と名つく右に高山あり藥師嶽といふ其麓に温泉あり國見坂一里二道有右は姥か懐左は市谷道若狭老尼爰にて額に角を生ず化して石となる姥石と云其角今に寶物とす市谷へ行けは畜生原あり傳云昔奥州板割坂藤義亟と云者登山爰にて頻に睡眠す化して馬と成り且角を生ず其角寶物として今に有又森尻智明坊と云者性驕慢にして俄に聲牛の如く吼へ遂に天狗となる自ら光藏坊と云市谷に棲む劔山力尾權現是を追ひ出す退き去るとき爪一つおとす寶物として今にあり市谷に行道に小鏈大鏈有人是を繩る其鏈は三條小鍛治宗匠作と云獅子ヶ端窟あり愛染明王弘法大師護摩壇の跡室堂左に山あり三寶崩と云昔飛彈の小萱江に北山石藏と云者性貧欲猛惡にて毎に物の命をとり人を害す遂に變じて鬼神となる尖りたる牙を生ず爰に陰くる別山金剛童子逐ひ出す牙稜け口噤て死す其牙今にあり寶物とす根尾の社あり天狗嶽あり其麓に龍神の社あり是則狩籠池の神なり地獄谷道あり追分地藏堂あり毎年七月十五日夜胡蝶多く出で遊ぶ呼んて生靈市と云高き卒塔婆を建て無縁の菩提を弔ふ毎夏月麓の廿四坊の中三坊更々住居す室堂と云登山の人爰に寓す室堂三棟彌陀聖觀音地藏絶頂懺悔坂あり稜川あり五色の砂あり五色濱と名つく六觀音あり淨土山あり阿彌陀堂西向三尊影向の山一の越より五の越に至るまで各堂一宇づゝあり稍暖地あり九品と名つく登山の人杖草鞋置きて本社へ參る本社六尺に一丈二尺南向白砂庭六尺九尺右の方奉納堂あり本尊阿彌陀如來垂跡伊弉諾尊不動明王垂跡手刀尾命什物有賴之刀無銘、鬼牙一つ北山石藏之口牙、錫杖行基菩薩奉納、駒の角藤義亟の化馬に生す、角二つ若狭老女額に生す、天錢三文外に異國の古錢數多、天狗爪一つ光藏坊之手爪、雁股鏃有賴熊を射る矢の根、別山本社より五十丁、後光石、橋立口、白山權現堂、折立富士權現、蟻戸渡、砂嶽炎土、光佛、行者返、抱石、別山、帝釋天、別山より室堂に出る、大走、小走、塞河原地藏堂あり、玉戸窟阿彌陀右來迎の瀧あり、八所の小窟、胎内潛、蓮華岩、揚枝嶽、美久里池周五十丁地藏堂あり、伽羅陀山、地獄谷地藏堂あり、八大地獄各十六別所、百三十六地獄、血池水色如血處々猛火燃起り罵詈號泣聲ある如し人肝を潰す劔山あり山の腰に石塔あり不思議の塔と云岩石峙つて鋒刃の嶮嵓いふべからず

岩峠苔峠の峠の字所見なし古より用ひ來れり

立山産物　熊の膽　黄　連

たち山に降をける雪をとこなつに見たともあるすゑんかうならし　家持

立山にふりおける雪をとこなつにけすてゝたるにゐむならとそ　同

劔の鋒　越路なるつるぎの峯もあゝそ海思ひきるせもなとなかるへき　同

雁金は歸る道にやまどふらん　越の中山霞隔て、　西行

白雪のつもるはあやし横雲のうへに見得たる越の立山　他阿上人

書鑑に越中森尻村の森尻寺の住僧立山の一の谷と云所にて牛になりけりとあり上件の智明坊の事に相似たり元亨釋書に藏緣法師は神融の從弟なり北國のみ遊行して立山白山を修練の場として往來する事たゆみなしと

文覺上人山に登るとは平家物語に見得たり

行脚の僧此上に禪定せしに奥州そとの濱の獵師の靈顯はれて古郷の妻子へ言傳せしとて袖をちさりて渡たしける善知鳥といふ謠にうとふ　そとのはまは奥州の名所そもうとの濱にうとふ屋敷とてありと傳へける

佐々氏さら〳〵越といふは天正十二年十一月廿三日の事なりと云

此節景清盛嗣の仙人になりたるに逢ひしとなり文武帝の大寶元年より天明三年まで千八十三年か

延喜式神名帳に雄山神社と云ふは立山權現の事なりと　神職の人の説なり

立山や獨くるわね秋の色　三四坊

立川寺　眼目禪宗

大徹和尚の開基なり大徹は能州惣持寺の開山瑩山和尚の五の弟子の一人なり材木は悉く立山權現寄進し給ふといへり又化女來りて傳法しろの布施とて袈裟を上る今もあり世に比類なき物なり　龍棚

といふ右大徹和尚の墓へ山燈龍燈とて海よりひとつ山よりもひとつ灯火の如く火來りて墓の左右に燈る、事今以てあり此二つの火相ろろふまであたりの松の枝にとゞまれり此松を待合の松と云今なをありと云

日石寺　大岩山　眞言宗

不動明王　矜羯羅　制吒迦　行基菩薩作

傳云昔行基師諸國に遊行して佛像を造り給ふ然るに越中白石と云處にて東方を望み見るに山の麓に火の上る石見ゆ行基直ちに行て此不動尊彫刻すとなり大瀧小瀧あり又藤の水といふ有り諸人眼病の治を祈る元祿十五年壬午七月廿七日越後ねち谷といふ處の百性の盲目こもり居しに靈夢に　此山の瀧の脇ゝ藤の木あり其根より水出づべし其水を受けて眼を洗ふべしとあり依て告ゝ任せて廿七日の曉藤の根を尋ぬるゝ盲目なれは參詣の人に助けられ藤の木のもとへ至りさくりて水を求む信心肝ゝめいして洗いければ忽ち眼ひらき山を下るときは杖をとらすとなり其外靈驗しるすよいとまあらす

明日觀音春日作眞言宗　法福寺　千光坊

甚だ古跡なり門の仁王は弘法大師の作といへり

上　龍　不動尊　禪　宗　大信寺

不動明王瀧の落つる岩山に彫付あるなり其像見わけがたし眼病を煩ふ人祈願するに甚だ靈驗あり

此の上瀧の南東は常願寺川なり此川縁に穴くりの用水跡あり今も此穴の内へ入るにその奥いくはくとも知らず此穴の内に蛤の形なる石大小多くあり乾けは石の如し

瑞龍山最勝寺　蜷川村　禪　宗

蜷川新右衛門の墓並位牌有蜷川氏の事は一休物語に有り此村に蜷川寺と云ふ一向宗の寺有り是も新右衛門由緒有るよし最勝寺よりは蜷川村と云蜷川寺よりは最勝寺と云今東武御旗本に蜷川氏有りて今最勝寺と通路あり蜷川氏歴代墓五六基あり近代は遺骨を送らざるよし

最勝寺寶物

閻浮檀金の彌陀佛小像　厨子入　揚柳觀音畫像一幅、揚補之梅の畫一幅、蘇東坡之竹之畫一幅、寒山十德之唐畫一幅、弘法大師法華經廿八品一軸、紺地金泥なり微氏の畫蓮摩一幅、同古畫達摩一幅、鷺鷥雁之畫二幅對、古畫之出山釋迦一幅、古畫三幅對、中尊釋迦左右文殊普賢一休之筆一幅、新右衛門親當筆續千載集一軸、極札添同辭世之詩歌一幅、親當之畫像一幅、蜷川家譜一軸、當寺由緒一軸、寶物施主の目錄一軸、厨子入涅槃像畫兆殿司筆と云近年大坂より夢想にて當寺に納む

願樂寺　生地東派　三才圖會に出
上宮寺　砂子坂村西派

遵如上人の御子開基か猶八尾の處に有り遵如御子多　然れども皆本願寺の系圖に明白なり上宮寺の開祖は遵如の弟子ならんか

瑞川寺　林崎村　禪　宗　今無住也
弘誓寺　飯坂村　西　派

遵如上人の御子の開基井波村明淳寺などと同じ開基なり右砂子坂の事に似たり

猪谷御關所　越中飛驒之堺　足輕番也

猪谷より半里斗こなたに舟渡村邊に弘法大師の蒔きたるとて四季絶へぬ菜生せり近郷より是を採るに尽るとなし富山より猪谷まで至て難所にて山坂のみなり道程千石町より加賀澤の先なる塚まで九里九丁余ありと云富山より猪谷までの道筋村々左の通

根塚村二口村二上小中村下熊野村安養寺村辰尾村合田村鹽野大窪村舟渡し西笹津岩稻村楡原村庵谷村片掛村猪谷村御關所在蟹寺村加賀澤村飛驒境なり是より籠の渡し又西海道と云ふ道も有よし

鹽　村　　黑　花

鹽野南北二里東西一里ありと云此野の清水中にありその清潔なる事類ひなし近き比まで御旗屋あり寶暦年中に野の中に民家五六軒建ちて大窪村と云又安永七年比より堀川をなして野の内へ水を通し水口は神通川へせき入たり同九年より開發田となる

安永八年秋前書あり鹽野にて

時なれや此とき稻の浪の花

布市村

桃井播摩守居せし所なり興極寺と云禪寺あり此寺の本尊は播摩守の看經佛といふ桃井氏の位牌ありれんたいせよじといふ有是は當山滿淨寺蓮台寺といふて天台宗にて布市にありし跡と云今正月毘沙門天の繪を配る昔は此寺より出しとかや又ぜん塚五郎塚と云ありぜん塚を錢塚と云世よ作の鞍といふものあり此鞍うちの名人布市村よ居せしと云何さま布市は城市の跡と見得たり或云布市よ城跡ありと今は其所田畠となり不分明也太平記時代桃井播摩守の城有けるよし播摩守の墓は今よ興國寺境内よあり

月岡野

月岡野は布市の續よて廣野なり月岡村の民家の前よ少しの溜江あり古の月岡の井の跡なる由毎歳八月十五日の夜天曇或は雨降りの時も此江内のみ滿月の影顯然と映るなり今以同じ之を以て月岡の里と云よし古歌よもあるよし追て尋へし

黒瀬村

黒瀬千石とて昔は禁中へ貢物いれたる所とかや天正年中神通川の瀬かわりて所々よなりしなり今島黒瀬村なといへるも分れなり日宮權現と云あり神躰は金鏡にて河水に流れし今能州に在と云神通川と熊野川の落合に此日の宮の跡有て今も祭禮をなす又桑名氏にて孫左衛門といへるもの此邊の盛なりし時由緒正しき者也今もかすかに此子孫此邊にあるよし若林六左衛門といふものもその

せ川よりの故ある人なりしよし今は其所に其子孫絶へたりと云富山御家中淺野家の家來に若林氏あり是六左衛門が後なりといふ說あり

友杉村

極性寺屋敷佛松といふあり醍醐天皇の時藤原穩子基經の三男德麻呂十七歳高野山に登り出家延喜に當國新川郡に來り七堂伽藍を建立す天皇勅額を給ふ館定山極性寺宗貞院と云六十七世の住持を慧明院と云此時親鸞寺の前を通り伽藍を拜す寺僧親鸞の容貌俊傑なるを院主に告ぐ院主出て謁すしは〳〵問答してたちまち念佛の旨を隨喜して弟子となる名を改めて敎順坊とす其徒三人同じく改名して定相寂念念名等是なり第八世信空房寺を友杉寺に移す應永十七年兵火に罹り燒失す後富山に移す此友杉村に柳瀨三郎右衛門と云由緒有百姓の末ありと云

舟倉村

舟倉權現祭禮三月廿五日十月十二日也十月の神事は世にまれなりと云能州石動山の權現と鬪爭の事有りて舟倉權現礫を打給ふゆへ上野といふ間に石なしといへり又石動山の權現とは陰陽の神にて嫉妬にて礫を打給ふとい、傳へり

古城

古城跡といふべきを通辭よ古城と云外川猿倉とて二ヶ所あり外川は飛驒國錦山の城主鍋山休庵の家臣白屋筑前守越中へ切て出るとて此外川の城よ糟籠る夫より福澤の城を責或は今泉の城河田豐

前守を攻落す信長記越中今泉の城　河田豐前守も落城と云　其後岩木村ゟ付城して城主齊藤次郎左衛門を攻む齊藤より越後長尾家へ後詰を賴む長尾家より出馬ゟて白屋筑前守を飛洲へ追返す此白屋後に謙信の幕下となるゟし甲陽軍鑑に見えたり末にある稜書と見合すべし猿倉の城は寺島三八郎といふ人の居城といふ此山に大きなる穴あり人穴と云大勢の人かくるべしと云猿倉の城跡は東笹津村の奥の山上なり是山へ登れは岩稻村庵峠など見ゆ舟倉の城跡は猿倉の城跡より東々北に當りて其間遙に隔りたり或云舟倉戸川の城は後佐々與左衛門入城なり白屋筑前守幕下なりと云樫木村の城は村田修理介居城なり福澤村定の城は戸川の城主白屋筑前守より樫木村の城責の時の付城なり度々せり合あり永祿年中春三月三日筑前守並嫡子監物次男三平打負て飛驛をさして落行西猪谷まで追かけて鉄砲にて筑前守を討留たり子息二人は行方知れずとなり右付城にて上熊村の舘に居住の二の宮何其村田修理と度々攻合あり或時村田方にて安達清藏討死二宮方にて小林傳八討死す此兩人は武功の人の由扨又右付城にて越後謙信新川郡の庄官百性共に目見得請べしとなり天文年中秋八月朔日と觸出さる庄官百性共付城迄追々と來る一人づゝ奥の間へ呼入刎首せらるゝ此事を下掛尾村飯川彌右衛門聞出し月岡野より引返し布瀨村中川左兵衛に告ぐ兩人同道して野積谷へ身を陰す其後何歳八月朔日下掛尾村彌右衛門を布瀨村左兵衛方へ招き急度振舞ける後豐右衛門代まで例とす

堺御關所越中　越後境　御關守御馬廻組の士一人　與力三人以下多し

境に御旅屋あり此衛藤地手桶に大竹を以造り有さし渡し一尺余なりと先年愛本の川筋洪水の節流出たる竹なるよし今に其切れを以て造りたる煙草盆與力の家にもありさし渡し一尺二寸なりと見たる人の物語なり

安計呂山　越中境川の奥山也　狗脊名物

相傳て云昔山姥有て此上に棲むと今古木の榎有是山姥の携へし杖なりと三才圖繪にもあり

泊町

古城跡あり是は小塚權太夫と云人の居城なりと山城にて竪三十間横二十間あり泊町より五十間斗往還道筋にあり或記に泊町荒山村城は前野小兵衛又小塚權太夫居城とあり

宮崎

後白川院第二の皇子以仁親王の御子をは治承の乱の時以仁親王の御めのと讃岐前司重秀が北國へぐしまいらせけるを木曾義仲もてなし奉りて越中の國宮崎と云所に御所を造り御元服有ければ木曾が宮とも申又還俗の宮とも申けり、源平盛衰記

此以仁親王と申すは高倉の宮の御事にて治承四年源三位頼政す、めによりて謀叛を起し給ひ流矢に當りうせ給ふ

松倉古城

鹿熊の城とも云加積郷なり竪二十間横十六間有とそ北の方高さ五百七十間西の方高さ六百四十八間東の方は高山峠連り西の方は大川流出るなり魚津の町へ出る角川なり魚津より一里二十五町有